
ゼロの使い魔 ギアスオブナイトメア

アストレアセカンド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの使い魔 ギアスオブナイトメア

【Nコード】

N4201T

【作者名】

アストレアセカンド

【あらすじ】

ルルーシュは一度は死を覚悟した。しかし、スザクとの一騎打ちの際、異世界への扉が開かれた。ゼロレクイエムの失敗、悪逆皇帝ルルーシュの失踪から生まれるであろう争い。それを、起こさないために、ルルーシュとスザクは自分たちの世界で死ぬことを決めた。新たに召喚された理不尽極まりない世界、ハルケギニア。ルルーシュの道は、どこまで続いていくのだろうか。

それは物語の導入（前書き）

この小説は独自設定が多いです。また、原作は一度アニメを見た程度なので正確には記述できません。最低限度名前を間違えないようにする程度には頑張ります。ゼロの使い魔とコードギアスR2の二次小説です。設定が気に食わない、不快だと思われましたらブラウザボタンでバックしてください。今のところ戦闘描写を詳しく書けません。

編集しました。

それは物語の導入

「世界にギアスをかける」

ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアはそう決心した。

全ては妹、ナナリーのために。

凱旋パレードが開かれている今、高見の見物をしていた。口にはニヒルな笑みが浮かび、悪虐皇帝として最後の手を打つ。思えば、長かったものだ。一人で世界を変えるには失ったものが多すぎた。

民衆がどよめいた。整備されたコンクリートの道路から、黒い仮面をかぶった親友が現れた。俺が全てを破壊し、ゼロ……スザクが再生を担う。ルルーシュという悪が滅ぼされて、世界は話し合いで政治を始める。争いのない、そんな理想の世界に。

スザクは鋭利な黄金の剣を構え、ナイトメアフレームを縫って突進してくる。

ジェレミアが指示するが、人間離れしたスザクの脚力で銃弾はただ地面に埋まる鉛玉へと変わる。

覚悟した。

死ぬのは怖くない。

俺が死ぬことで世界が平和になるのなら、ナナリーが幸せになれるのなら、こんな人殺しの命など惜しくはなかった。

「ああ………思えば長かったな」

スザクが俺の目の前まで来た。

見栄えのよい黄金剣をかがげ、俺を断罪せんとばかりに刺突の構えを取る。

仮面の奥であいつはどんな顔をしているだろうな。

胸に吸い込まれるように、黄金の剣は俺の胸を貫いた。

一瞬の静寂、一瞬の歓声。

黄金の剣は密かに震えていた。

耳を澄ませば、嗚咽すら聞こえてきそうだ。

俺はここで死ぬべき男だった。

それは、その思いは、数瞬後に破壊された。

俺とスザクの足場が、まるで銀色の鏡のようになり、無理矢理に引きずり込まれたのだ。

意識が朦朧とする中、頭に沸騰しそうなほどの激情がかけめぐる。先ほどまでに歓声をあげていた民衆も何かおかしいと勘ぐり始めた。

スザクの剣は肺に達し、すぐに俺を死なせてくれるだろう。

だが、ここに俺の死体が残らないのではまずい。ギアスについてはコーネリアにもロイド伯爵にもバレている。これがギアスの効果とでも取られれば、ここまでの俺たちの成果は全て無駄になる。

悪虐皇帝は死なねばならない。
首をさらさなければならぬ。

そうしなければ世界はまた戻ってしまう。

悪虐皇帝ルルーシュを探すために、また人の血が流れる。ナナリ
ーが危なくなる。

俺の考えも空しく、鏡は俺の全てを飲み込んだ。

憤りも、覚悟も、目的も、スザクさえも。

胸に刺さったままの剣が血を止めどなく流す。なにやら分からないことになったが、俺は死ぬわけにはいかない。皆の前こそが俺の墓場なのだから。

それは物語の導入（後書き）

感想を宜しくお願いします。今考えている分の道筋を違えない程度にならいろいろ追加したりするかもです。

それは理不尽の塊で（前書き）

連続投稿です。

修正 読みやすさ向上のため、文節の区切りを多くします。

それは理不尽の塊で

広場は騒然としていた。

先ほどまでルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールをバカにしていた少年たちですら、微熱の二つ名を持つキユルケですら、血なまぐさいことに慣れたタバサやコルベールですらも、声を発せなかった。

召喚は成功した。何十回目かにも及ぶ召喚の果てに、彼らはルイズの前に姿を現した。

「あんた達、誰？」

まるで汚いものを見るかのごとく、侮蔑した眼差しを向ける先には二人の男がいた。性別のほどは分らないが、片方の男はフルフェイスでもう片方は地面で倒れている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「何とか言いなさいよ」

ルイズは目の前の全身黒い男をにらみつけていた。高らかにメイジとしての成功を叫ぶつもりが、何の因果かおかしな服装の二人組を召喚してしまったからだ。

対してスザクも声を上げることができなかった。自分とはかく、世界的には犯罪者となったゼロを知らないなどとはどう考えてもお

かしい。

初めはルルーシュがギアスのまだみない力で逃げようとしたのか
と思ったが、重傷を受けて倒れる様子を見ると全くの不測の事態ら
しい。

さて、困った。

ルルーシュと交わした約束は確かにゼロが皇帝を打つことでゼロ
レクイエムの終わりとなる。ルルーシュと自分のこれまでの努力を、
ましてや親友の命を懸けた行動を、ピンク色の髪を持つ女の子に邪
魔された。

それにスザクは喋れなかった。ゼロを演じるべきか、スザクにな
るべきか踏ん切りができない。

ここが何処かも分からないでむやみに名前を出したくない。しか
し、このままではルルーシュが死んでしまう。価値ある死なら許容
できた。ルルーシュが望んだからだ。

だが、無駄死になどさせるわけにはいかない。ユフィの敵ではあ
るが親友。胸に刺さった剣を抜いて治療を施せばまだ何とかなる。

結局、このにらみ合いが続いているのだ。

「コホン、宜しいですか？ ミス・ヴァリエール。早く契約を交
わしなさい」

「ですがミスタ・コルベール！ 相手は貴族に顔も向けない不埒も
のです！ もう一人はうずくまって起きあがらないし、ここまで無
礼な平民と契約などできません！ やり直しを要求します」

「それはだめだ。これは始祖ブリミルが残した伝統なんだ。君だけの例外を認めるわけにはいかない」

「そんな……」

背後からそんな声が聞こえたが、スザクはルルーシュの元へ向かった。軍人仕込みの応急処置を行おうとしたが、ゼロの衣装は都合よく包帯など入っていない。

明らかにこのままでは死ぬほどの傷だ。

「ルルーシュ、僕はどうすればいい……」

「……」

ルルーシュは肺にたまった血を抜く。広大に広がる芝に血糊がこびり付いた。

幸い生徒からもコルベールからもルイズからも、ルルーシュの傷は見られていない。不遜な平民として扱われているようだ。

「……何とも、皮肉だな。皇帝が、平民か。確かに……俺は……どんなに……罵倒されてもおかしくはない」

「ルルーシュ、死ぬな。ここで死ぬことは許されない。世界はまだギアスにかかっていないんだ」

「ああ、死ねない……. なんとかしても、どんなことをしても

だ・・・・・・・・」

「ちょっと、ご主人様をほっといて何処・・・・・・・・に・・・・・・・・え？」

「どうかしましたかな、ミス・ヴァリエー・・・・・・・・」

二人はどうやらルルーシュの傷に気がついたらしい。

青白い顔の血塗れの男を見て、ルイズは体が緊張して動けなくなった。コルベールはルルーシュの傷が重傷だと言ったことを見抜いたらしい。すぐに水メイジを呼び寄せた。

「このままでは場が収まらないな。各人、教室に戻りなさい。ミス・ヴァリエール、君もだ」

「しかし、私はまだ契約できていません」

「それは後日改める。今はもう戻りなさい。使い魔の君は残ってくれ。話が聞きたい」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

スザクは無言で首肯した。

ルルーシュの傷が塞がることに驚愕したスザクだったが、横からいぶかしそうにこちらを観察するコルベールに居心地の悪さを感じた。

水の秘薬がどんなに高いものかも知らない二人は、涙を流しながら

ら高価な秘薬を使うモンモランシーのことに気がつかなかった。

「さて、彼の傷は君がつけたのかね？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

スザクは頷いた。結果はどうあれ、ルルーシュの傷はスザクがつけたものだ。誤魔化すなどできない。

「いい加減、話してくれてもいいのではないか？ 文字は書けないが、コミュニケーションはできるのだらう？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

スザクは首を縦に振る。コルベールはフルフェイスの男に問答をかけるが、一向に話は進まなかった。

「ミスタ・コルベール。宜しいですか？」

「ん？ おお、ミス・ヴァリエール。ちょうどよかった」

火の塔で住んでいるコルベールの元にいつまでたっても引き渡されない使い魔を引き取りにルイは来た。表面上は顔を作っているが、未だに契約できていないことから進級が心配になったのだ。

できるだけ今夜までには契約をすましておかなくては明日の授業はいつにもましてからかわれることが容易に予想できた。

「あんだ、いつまで黙ってるのよ？ いい加減喋りなさい。というか仮面を取りなさい」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あんだ、平民のくせに何様のつもりなの？」

貴族の命令を断ったスザクを睨みつけるルイズ。スザクはルイズの殺気など柳に風のように受け流した。これ以上の殺気などカレンから頻繁に受けていたからだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・うつ・・・・・・・・こっは・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・！！」

スザクはルルーシュの元へと駆けつける。

相当深かった傷は金髪の女の子が泣きながら治療してくれた。痕は少し残ったものの、まるで魔法のようにルルーシュの傷が塞がった時には流石にスザクでもビックリしたものだ。

「・・・・・・・・失礼。私はコルベールと言うものです。ミスタ、お名前を聞かせてもらえませんか？」

「・・・・・・・・ルルーシュ・ランペルージだ。傷を治療してくれたことには感謝する」

あえて名前を開かさなかった。

何処に飛ばされたかは知らないが、気絶する前に見た景色は明らかに発達していない都市。素顔をさらしても殺されなかったところ

を見ると、ここは外界との接触を絶っているとルルーシュは結論づけた。

「よかった。ミスタ・ランペルージ、詳しいことを聞けないかね？なぜ君は血だらけで倒れていたんだ？」

「それは……………」

スザクの方を見る。

かすかに首を振った。話すべきではないと。

確かに計画を知られるのは必要最低限信用できるものだけだ。こんな見ず知らずに自分たちを勝手に拉致したような奴らに詳細な情報など与えたくは無かった。

「悪いが国の伝統のようなものでな。あまり醜聞をさらすようなことは言いたくない」

「ふむ、失礼した。それは言いにくいことだったか」

ルイズは先ほどからルルーシュを睨みつけている。

コルベールが貴族の対応をしているにも関わらず不遜な態度を崩さない相手をどう使い魔にするか考えているようだ。

しかも、モンモランシーから水の秘薬分の金額を要求されてお小遣いが飛んだのだ。お礼も言わずにベッドで淡々とコルベールに受け答えるルルーシュに少なからず悪感情が育っていく。

「すみませんが、ここはどこ国ですか？ 何分、自国からでたことが無く、社会に疎いのです」

「ここはトリステインの魔法学院よ！ あんたたちが誰なのか知らないけど、この名前くらい聞いたことあるでしょ！」

意気揚々とまくし立てるルイズだが、二人は首を傾げる。

「トリステイン？ 聞いたことはあるか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

二人は何も知らないようだ。ルイズのフラストレーションがどんどん貯まっていく。

「トリステインを知らないなんて何処の田舎者よ！ あんた、分かってる！？ 私はあんた達のご主人様なのよ！！」

「・・・・・・・・ここまで厚顔無恥な輩は久しぶりにみたな。しかし、トリステインだと・・・・・・・・」

「まあまあ、落ち着きたまえ。ミス・ヴァリエール」

ルルーシュは思考する。

何十通りの推論をたて、結論を導くために頭を働かせる。そのとき、先ほどのルイズの言葉がルルーシュの心で引っかった。

「魔法学院・・・・・・・・だと？」

「そうよ！ 私たち貴族は魔法使いなの！ あんたは私の使い魔！
分かった！？」

今までの推論が音を立てて崩れた。もう一度要素を入れて再思考する。

しかし、スザクがルルーシュに答えを示した。頭上に浮かぶ月が二つ。

「夢ではないか。なるほどな。考えたくも無かったが、ここは少なくとも俺たちの世界じゃなさそうだ」

ルルーシュは自嘲気味に笑った。

「スザク、ここにはブリタニアは存在しないかもしれない」

「本当なのかい？ ルルーシュ」

「ああ。私も何度も考え直し、否定し、再思考したがな。月は一つしかない。それが二つあっては、少なくとも俺たちの世界であるというのは考えつかない」

「……そうか。僕も考えたくは無かったけど、事実として受け止めるしかないようだね」

二人には出ていってもらった。ルイズは夜が遅いからと部屋に戻り、コルベールは学院長に報告に行った。

「しかし、ゼロレクイエムが失敗だとはな。魔法ときた。ギアスは何処まで私の人生を狂わせるのだ」

「考えよう。ルルーシュ。僕たちはあの世界から弾き出されたのなら、遺体は二人とも発見されない。恐怖が続くんだ」

「ああ。俺はあの世界でもう一度死ななければならない。ナナリーのために。それに、ユーフェミアの悪名を濯ぐために」

「……………僕たちに選択肢なんてないんだ。死すら選べない」

「生き延びるんだ。私たちはなんとしてでも。ギアスを使ってもだ」

「そうだね。でも、このままじゃまずい」

「俺たちには戸籍も身分も剥奪された。あのルイズとか言う小娘のいいなりになるのは癪だが、文句を言える立場でもないらしい。ギアスはあくまでも最終手段だ。カラーコンタクトがここで手に入るか怪しい。最悪使いどころを間違えれば、排除される可能性が高いからな」

「……………」

何とも言えない空気の中、コルベールが帰ってきて就寝となった。

あくまで二人は契約をルイズとする事のメリットとデメリットをコルベールから聞きながら考えを組み立てる。

ただ生き延びる為に。

二人はルイズの使い魔になることを承認した。

それは理不尽の塊で（後書き）

ルイズアンチです。どちらでもよかったのですが、スザクはともかくルルーシュは従わないでしょう。

それは魔法の一端で（前書き）

まだだ、まだ終わらんよ！

ちよい修正です。

それは魔法の一端で

「スザク・・・・・・・・」

「なんだい、ルルーシュ」

「なぜ私は、ルイズの下着を洗わねばならないのだろうか」

「しょうがないよ。使い魔になっちゃったんだからさ」

今日の朝、コルベールに案内され、二人はルイズとコントラクトサーヴァントを結んだ。スザクは両手に、ルルーシュは額と胸に。焼きこてを押し当てられたかのような痛みだったが、二人は声を耐えることができた。

コルベールは驚いていたようだが、ルルーシュにしてもスザクにしても、死ぬような痛みなど何度も受けている。今更コントラクトサーヴァントの痛みで床を転げ回るなど、ルルーシュはプライドが許さなかったし、スザクは情けない姿をさらさないために必死で耐えた。

ルイズはルルーシュの苦悶の表情と歯をかみしめて騎士のように立ち振る舞うスザクを満面の笑みで眺めていた。権力者特有の背徳感を味わっているのだ。

ゼロの衣装を脱いだスザクと顔色が安定してきたルルーシュはかなりの美形であった。そんな男を服従させ、使い魔として連れて回る。想像しただけでルイズは顔を赤らめて恍惚そうに笑ったのだ。

おそけを感じた二人は連れだって脱出しようとしたが、朝ご飯を抜かれるとあつてはルイズの言うことを聴かないわけにはいかない。

特にルルーシユは死んだ後に糞尿など垂れ流せるか何日も絶食して胃はもちろん腸ですら空っぽだ。ここでの生活の不便さはある程度我慢できるが、食事は最優先で確保したかった。

「仕事とはいえ、ナナリーと同じくらいの歳の奴の下着を洗うなど。屈辱だ」

「図太く生きよう。君は少しでもタンパク質を取って血を作らなきゃ、いつ倒れてもおかしくないんだし」

「生き恥などこれ以上かいても問題ない」

「君は相変わらずだね。でも、こうして話せるなんて、生徒会以来だ」

「ああ、俺たちは互いに遠回りしかなかったな。いつだって会うときは戦場だった」

「……君には君の理由があつたし、僕には僕で国を変えたかった。今更許すなんて言えないし、できない」

「私も許してもらえるなどと思っていない。私の手は血にまみれすぎた」

「それを言うなら僕だって同じさ」

沈黙が続く。

互いに洗濯物を洗ってはいるが神妙な面もちで軽い言葉などかけられないほどの空気が形成されている。スザクは無表情で、ルルーシユは若干顔に陰りを見せた。

少なくとも、ルルーシュはユーフェミアの死を利用したことを今でも悔いている。

二人の空気を散らしたのはルルーシュの腹の虫だった。

「……………ぶ……………つ……………く……………」

「笑うなスザク。生理現象だ」

顔を真っ赤に染めながらルルーシュはスザクを直視できなかった。目を合わせれば、昔のようにからかわれるかもしれないからだ。

「了解。いや、ルルーシュだって人間だしね」

「お前の中で俺は人じゃなかったのか？」

かつてのように笑いながらルイズの部屋へと足を向けた。洗濯は終わったし、待望の朝ご飯を食べなければ。

アルヴィーズの食堂には貴族が溢れていた。

貴族のための食堂なのだから当然かもしれないが、長い机に並べられた豪華絢爛な食事にはスザクはもちろん、ルルーシュも驚愕した。西洋圏で胃世界なら米は無いだろうと踏んでいたが、さすがにパンはあった。しかし、それ以外の食事は明らかに過食の類に入る。

「ふふん。ここはね、アルヴィーズの食堂よ。貴族が学ぶのは魔法だけじゃないの。貴族の教育は食事までも含んでいるのよ」

得意そうにルイズは言った。貴族というのは、かつてのルルーシ

ユも貴族であつたが、ここまで暴食に浸る経験は無かつた。子供の頃の話であつたし、マリアンヌが栄養バランスを整えていたせいもある。

「ルイズ「ご主人様」……く、ご主人、あれだけの量を朝から食べるのか？」

「いいえ、もちろん残すわ」

「ご主人、それでは残つた食事はどうなされるので？」

さすがに廃棄はしないだろう。

文化圏としてEUの大昔のような政治体系で貴族が弾頭しているなら、どこから搾取しているかなどスザクでも思いつく。

民衆からの血税だ。

それを残すことを前提に食べているとあつては、スザクはもちろん、ルルーシュも信じられなかつた。

「知らないわよ。どうせ、使用人が分けあつて食べるんじゃない？ それよりイスを引いて。気が利かないわね」

「すみません」

スザクがさつとイスを引く。満足そうにルイズは食事を始めた。こういつては何だが、使用人は主が食べ終わった後に食事をするものだと分かっていた。

しかし、ルルーシュは限界に近いこともあるし目の前でおいしそうに見せびらかしながらルイズがローストビーフを食べているのだ。

スザクはルルーシュの内面をおもんばかつて聞いた。

「ご主人、我らはどこで食事をすれば？」

「ん」

ルイズの足下にはほぼ水に近いスープと硬いパンが皿に入っていた。

「なによ？ まさか私が用意してあげた食事が要らないって言うの？」

気に食わないことは確か。

しかしこれ以上何か言おうものなら問答無用で粗末な食事ですらありつけなくなるだろう。

スザクは驚愕した。

確かに使い魔とは奴隷に近いと思っていたが、未だ血も体力の回復も完了していないルルーシュにすら満足に食事を出そうとは思えない。

ルイズにどんな算段でこれを用意させたのかは分からないが、スザクはルイズの人間性を疑った。

「イスに座らないでよ。ここは貴族の食堂なんだから」

仕方なく床に体をおろし、粗末な食事に手を着ける。スザクは軍隊で何回も食事を抜くこともあったし、別に今すぐ食べなければ死んでしまうことも無い。ただ隣で座り忌々しくルイズを睨むルルーシュは別だ。

「ルルーシュ、僕はスープだけでいい。パンは君が食べる」

「・・・・・・・・スザク、悪いがそれはできん。どんなに惨めでも、どんなに死にそうでも、私には生きる義務がある」

「だから、君がこれを食べるんだ。僕はいい。けれど君は昨日血を流しすぎただろう。今朝だって4回も貧血で気絶してたじゃないか」

ルイズが「あっ」と何かに気づいたような声を出したが、今更食事を変えようなどとは言わなかった。

「お前も人がいいな。だが、それでも拒否する。お前も万が一の時の為に体力を回復させる。貴族は魔法なんて言う訳の分からないものを使うそうじゃないか。私には武器を持っても戦えない。悪いがお前だけが頼りなんだ」

「・・・・・・・・分かった。僕は君を刺したあの黄金の剣を帯刀しておく」

「残念だけど、それ、売っちゃったわよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・はあっ!?」

「なぜだ!?　なぜ君はあの剣を売った!?　あれは私たちの持ち物だろう!」

「そうだ。あれは確かに黄金で作った剣で実用性は低い。けれど、まさか僕たちの荷物を勝手に持ち出さないでくれないか?」

「仕方無いじゃない。黒い方の治癒にお金がかかったんだし。けど、あれが黄金って本当?　平民のあんた達が持ってたものなんて価値は低いわよ」

「ふざけるな。あれは本国から純金のインゴットを削って宝石を付け加えた正真正銘の宝剣だ！」

「宝石ってあのガラス玉のこと？ 確かに綺麗だったけど、価値は低いつて言われたわ」

「ガラス玉……だと？ ああもう、この国のことが余計に分からなくなった」

「……すんでしまったことはしょうがない。諦めよう」

「……くそ、おそらく血糊を理由に価値を下げられたか。あれ一つで豪邸が建つほどの価値なんだがな」

食事をした気にもならず教室まで引つ張られる。

スザクもルルーシュも顔は美形なのだから女子生徒の眼差しを一心に浴びていた。ルイズはいつも来る罵声が、使い魔達への嫉妬に変わって若干嬉しそうだった。

魔法という学問に並々ならぬ好奇心をルルーシュは持った。

ギアスと同じ絶対性はないだろうが脅威性は身を以て体感している。何せ瀕死だった自分を蘇生させるがごとく復帰させた。あのとき感じた暖かみが少しでもルルーシュに残っているのかも知れない。

「みなさん、おはようございます。春の使い魔召還は無事終わったようですね。……ところでミスタ？ 何故立っておられるのですか？」

「ミセス・シェヴルーズ。彼らはルイズの使い魔です」

「おや、そうなのですか？ 私はコルベール先生から聞けば、彼らはロバ・アル・カリイエの貴族ということでしたか？」

シェヴルーズの言葉に一番驚いたのはルイズだ。何せ平民と信じて疑わなかった相手が貴族だという。周りの生徒も少なからず動揺している。スザクとルルーシュは一応学は学んでいて国の中心にいたことをコルベールには話していた。

しかし、ここから国までは遠く、ここでは確かに平民ということになるだろう。

それをどう曲解したのかは知らないが、コルベールは二人をロバ・アル・カリイエの貴族だと思ったらしい。気品がそれを物語ったかは知らないが。

「あんたたち、ロバ・アル・カリイエの貴族って本当なの？」

ルイズはさすがのように見てくる。今までの自分の行動をてらしあわせて、貴族であつたら取り返しをつかないまでの扱いをしていたのだ。このことが実家にバレれば貴族としての礼節を軽んじたとしてお母様から壮絶なお仕置きをもらうかもしれないとルイズは考えた。

しかし、二人は何のことだとばかりに首を傾いだ。

「いや、ここで言う貴族の枠組みには俺たちは入らない。何せ魔法が使えないのだからな」

そういつた途端クラス中の雰囲気が悪化に戻った。シェヴルーズもなら使い魔でも問題ないわとも思っているのだろう。

ただこの場にいる誰もが予想だにしていなかった。

ルルーシュは貴族ではなく王族。

それも最近までは国の統治を行っていたのに代わりはない。

スザクにしても日本最後の内閣総理大臣の息子でブリタニアでは最高の騎士としてナイトメアフレームに乗っていた。魔法という分かりやすい目盛りを壊してなお余りあるほどに敬意を払ってもおかしくない相手なのだ。

何せ国の国王と騎士を共に拉致である。

学院を仕切るオールドオスマンといえど、ここまでの二人を喜んでルイズの使い魔にしようなどと思わなかったであろう。

ルルーシュもスザクも社会的に死んだのだ。今更ここでそんなことを言っても仕方のないことだし、国が違えば習慣が違うとはつきりした身分は明かさなかった。

「なによ、変なことコルベール先生に言わないでよね。平民が貴族を語るなんておこがましいわ」

ルイズはネチネチと二人をなじる。辟易としながらも授業の邪魔にならないようにルイズのそばの柱に背中を預けている。

黙っていればそこそこ可愛いだろうなと共通認識で思っていたが口から出るのは罵倒やら権力を盾にした横暴やら。使い魔のルーンは働いているが、好感情と悪感情が常に列挙しては消えるので効果のほどは分からない。

温厚なスザクでさえルイズにはあまり関わりたくなかったのだ。

「ミス・ヴァリエール。使い魔と楽しそうにお話をしていらっしやいますね。ちょうどいいわ。そこまで私の授業が面白くないなら、実演してみなさい」

「ふえ？ 私がですか？」

「やめてくださいミセス・シェヴルーズ！」

「なぜですか？ 彼女は大変勤勉だと聞きましたか？」

「危険です」

「なにを不思議なことを。鍊金で危険なことなど起きません。失敗をおそれずにまずは挑戦してみなさい」

「・・・・・・・・・・・・・・・・分りました」

「お願い、ルイズ。やめて」

場が騒然となる中、ルルーシュとスザクは混乱していた。

「なにが危険なんだろう」

「おそらく、ルイズが今まで魔法を積極的に使わなかった理由が分かるかもしれんな」

「ああ、確かに魔法使いの割に魔法をあまり使わないよね。一度も見たことがない」

「察するに周りに被害が及ぶのだろう。生徒は皆机の下に避難しているしな。俺たちも避難するぞ」

「そうはいつでもさ、一応見ておかないか？ 隠れてたら、またあの子に文句言われるかも」

「・・・・・・・・・・・・・・・・それはイヤだな」

戦力分析の為、二人は見守ることにした。タバサが必死になって止めるが二人は平気だろうと動かない。諦めたのかタバサは教室から出ていった。

「錬金したい金属を思い浮かべてください。詠唱は分かりますね？」

「はい」

場に緊張が走る。生徒たちは使い魔を避難させて何とか被害を少なくする心算らしい。

「錬金！！」

ルイズが唱えた瞬間、スザクのギアスが起動した。

「な・・・・・・・・・・・・・・・・！！？」

「スザク！？」

スザクは状況分析をするとルルーシュと共にしゃがんだ。ルルーシュの頭を押さえているせいか、どうということだとルルーシュは暴れる。

しかし、数刻後には頭の上を爆風が過ぎ去っていたことに二人は冷や汗をかく。

窓側の壁を粉砕するほどの威力。まともに喰らえば死んでいたかも知れない。今更ながらに魔法とはいかに理不尽なことかと思いきる。ファンタジーではないのだ。銃と変わらない。

「スザク、助かった」

「いや、僕もまさかここまでですさまじいとは思わなかったよ」

使い魔が爆風で暴れ、生徒が収集に奔走し、監督役のシェヴルーズは気絶し、ルイズが爆発の中心で口から黒い煙を吐いて一言。

「ちょっと失敗したわね」

涼しい顔であり得ないことを言い放ったのだ。

それは魔法の一端で（後書き）

スザクのギアスがルイズの魔法に反応。ぶっちゃけ虚無は反則だ
と思います。

それは貴族のわがままで（前書き）

あれ、書く事がなくなってきた。

それは貴族のわがままで

箒と替えの机を運ぶスザク。ルルーシュは非力なため、生徒会で培った窓拭き技術や清掃術を試していた。ルイズはとうとうとさつさと仕事を二人に押しつけ、昼食を取りに行った。何でも『主の代わりに仕事をできるなんて幸せな平民よね』と独自の倫理観を披露していなくなった。ルルーシュはすでにルイズに期待はしていなかった。ワガママで自分勝手に権力者の娘で。この国は近い将来潰れると、別段あり得なくもないことを思った。

「よいしょっと。これでいいのかな？」

「いいんじゃないか。俺たちは平民らしいからな。多少の位置など教師が直すだろう」

「そうだね」

「しかし、ルイズの魔法はすさまじかったな」

「うん。僕も命の危険を感じてギアスが発動しちゃうし」

「……それに、なぜか断末魔が聞こえた」

「生徒たちの声じゃなくて？」

「いや、怒鳴り声だったろ、それ。私が聞いたのは悲鳴だったり呪詛だったり。それら恨み言が混じったような声だった」

「僕には聞こえなかったよ？」

「……ルーンのせいかもしれないな。額のルーンで何となく効果が分かるんだ。俺には魔法具と魔法を使うルーンが、スザクには身体強化と動物を操れるルーンが有ると」

「へえ、すごいね。魔法使えそう？」

「話にならない。力の一端すら使えそうにはない」

「僕も身体強化は分からないや。動物もさっぱりだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・まあいいか。アルヴィーズの食堂へ行くか」

「了解。僕もおなかぺこぺこだ」

「申し訳有りません!!」

「謝ってすむとも思っているのかい？　メイド」

「申し訳有りませんでした!!」

何の騒ぎだろうか。アルヴィーズの食堂では黒髪のメイドが金髪の少年に謝っていた。

「なんだろうね？」

「どうせ下らんことだろう」

何でも会話の流れからして、メイドが拾った香水が原因で二股がバレ、メイドに八つ当たりしているらしい。

ルルーシュは開いた口が塞がらなかった。一方的に悪い金髪の少年が、善意で動いたメイドに叱咤しているのだ。何とも奇妙だ。自分たちの価値観ではあり得ないことだった。

「ルルーシュ」

「さすがに放つてはおけんだろう」

未だに謝り続けるメイド、シエスタの元に近づく。二人を不振がる者もいたが、面白そうに観察している。ギーシュに余計なことを言っただけたりされると小声で聞こえてきた。男子がルルーシュ達の顔に嫉妬し、腹づもりが爆発したのだろう。

「君、そこまでしたらどうだい？」

「貴族云々手前に人間としてどうかと思うぞ？」

「君たち、何を言っているのかね？ 僕は彼女に教育しているだけだ。って何だ、ルイズの使い魔達か。同じ平民が叱責されているのを見て助けにでも来たかい？」

「国は違えど、私とて人の子だ。何の粗相もないのに八つ当たりされるなどおかしくはないか？」

「彼女は何も悪くない。君は自分で分かっているはずだ」

「ふう、何を言うかと思えば。君たちはトリステインの国の人間じゃないんだろう？ だったら口を出さないでくれないか？」

「それはできない。僕は軍人として、人を守る責務がある」

ギーシュがスザクの言葉に眉を顰めた。

「……軍人？ なるほど、確かに鍛えているようだが、それも平民にしてはだな。僕はギーシュだ。ギーシュ・ド・グラモン。トリステイン軍人家グラモン総帥の三男だよ」

「軍人だと？ お前がか？」

「あり得ないよ。確かに筋力トレーニングはしているようだけど、実戦経験がまるで足りていないようだし」

「戦場ではいい的だな」

「……君たち、言わせておけば、好き勝手に！ いいだろう。僕は君たちに決闘を申し込む。ここまでバカにされたんだ。逃げないよな？」

「誰が逃げるんだ」

「僕は受けて立つよ」

「いいだろう。準備ができたならヴェントリの広場で待っている!!」
マントを翻し、颯爽と帰っていった。

「あなたたち、殺されちゃう………」

シエスタは震えながら答える。大きな瞳に涙を浮かばせ、ルルーシュたちの身を案じている。

「大丈夫。僕たちは負けないよ」

スザクは笑顔で自信を表した。シエスタは、スザクの花咲くような笑顔に数瞬見とれてしまっていたが、すぐに顔を青くする。

「ダメですって！ 貴族の方には魔法があるのですよ!? 逆らったら殺されちゃいます!!」

魔法至上主義の暗闇を二人はみた。なぜルイズが貴族を重視するのか、なぜ自分たちは平民だとバカにされるのか、ここに来ての疑問が氷解したようにも感じられた。

「ちょっと、アンタたち！ 勝手に決闘なんて受けるんじゃないわよ!!」

「なんだ、ご主人か」

「何だとは何よ！ いい？ 聞いて。ギーシュなら今から謝れば許してくれるわ。謝っちゃいなさいよ」

「イヤだ」

「拒否する」

「何でなのよ！ おとなしく私の言うこと聞きなさい」

「そうだ、ご主人、決闘は何をすればいい？ 相手を殺すまでか？」
「ギーシュはしないだろうけど、他の貴族なら平気でやっちゃうわ」
「スザク、剣は？」
「一応木を倒して木刀を作った」
「嘘！ 木をどうやって切り倒すのよ！」
「殴ったら倒れたんだ」

シエスタとルイズは共に驚愕する。しかし、ルルーシュには理由が分かっていた。

「あの衣装は対格闘戦も想定して手袋にダイヤモンドパウダーを混ぜたりスラッシュハーケンを真似してラクシャータに作らせたカーボンナノチューブの糸が有ったな」

「使わせてもらったよ。ルルーシュ」

「ああ、別にかまわん。俺の武器はコレだな」

「決闘に飛び道具ってありなのかな？」

「いいだろうさ。相手だって、魔法って言う武器を使うようだしな」

それは貴族のわがままで（後書き）

次回決闘です。

それは男の戯言で（前書き）

決闘です。

編集します。

それは男の戯言で

「諸君！ 決闘だ！！」

娯楽に飢えた貴族が集まったのか、数は多かった。

ただ男女比3：7で、女子の中にはルルーシュとスザクを私用の執事程度には欲しがっている者も少なからずいる。ただ言い寄ってこないのは経済的後盾が無いのだからしょうがない。

「さて、僕は魔法使いだ。むろん魔法は使わせてもらっつよ？」

「ああ。別にかまわん」

「僕は大丈夫」

「変な筒と手袋で勝てるのかい？ 全く、君たちはいったいどこからきた野蛮人なのさ」

「「ブリタニアだ」」

「ブリタニア……ふん。聞いたこともない。さぞかし弱小国だったんだね」

「ああ。今はもう滅びたがな。いや、私が滅ぼしたからな」

瞬間、時間が止まった。

今まで騒いでいた貴族が、ルルーシュとスザクを見る。どう見ても国相手に戦えるようには見えない。

「滅ぼしただつて？ 一つの国を？ 冗談はやめたまえよ」

「まあ今はここには無い国だ。せいぜい戯れ言程度に解釈してくれればいい。だが、俺が自国の体制を破壊したことは事実だ」

「君は革命家か何かかい？」

「似たようなものだな」

ルルーシュはニヒルに笑った。人をチェスに置き換えた戦争は、奇略妙略を用いたものが多かったが、国に勝ったことは事実。今はもう舌戦で心理を読みとるため動揺を誘っている。

「ギーシュ！」

「なんだい、ゼロのルイズ」

「いい加減にしてよね。だいたい、決闘は禁止されているじゃない」

「それは貴族同士の決闘だろう？ 僕は確かに貴族だが、君の使い魔は貴族じゃない。なら問題は無いじゃないか」

「それはただの屁理屈よ！」

「やれやれ、君はなぜそこまで使い魔を庇うんだい？ どちらかに恋でもしたのか？」

「やめてよね！ ただ使い魔が傷つくのが見たくないだけよ！」

「ご主人、僕たちなら大丈夫。だから向こうへ行ってくれ。ここは

もう戦場だ」

「アンタたちも、謝っちゃえば痛い思いしなくてすむのに、何そんなに意固地になってるのよ！」

「これはな、プライドの問題だ。なぜ私たちが自分たちより格下の相手に媚びねばならない。戦闘でも、身分でも。ここはそういう土地なんだとは理解したが、だから私たちがそれに従う道理はない」

「僕も同意見だ。確かに貴族が偉いのだろうけど、それを理由に人を害していい理由にはならない。僕には曲げることのできない信念がある。ナイトメアフレームが無くとも、僕は新しいやり方で自分の道を切り開く」

さすがのルイズも、ここまで意見を突っぱねられては何も言えなくなる。

穏和そうなスザクの顔から笑顔がなくなり、ルルーシュは冷徹なまでのペルソナをつける。

二人はもう戦闘へと頭を移行しているのだ。スザクは手袋を、ルルーシュは懷に手を忍ばせる。

「ルイズ、君の使い魔は勇猛じゃないか。わざわざ主がそれを止めるなんて無粋だぜ？」

周りからも早く始めるとばかりに野次が飛ぶ。ルイズは居たたまれなくなりすごすごと引き下がった。

「さて、邪魔者もないだろう。始めようか。僕は「青銅」のギーシュだ、ゼロの使い魔君」

「私はルルーシュ・ランペルージ」

「僕は枢木スザク」

「尋常に勝負」

勝負はほんの一瞬で終わった。ギーシュが作ったワルキューレが、ルルーシュとスザクに襲いかかったときに、まるで鋭利な刃物で切り裂かれたように胴が飛ぶ。

二体のワルキューレが行動不能となった。

それも、よく分からないうちに、使い魔達は何もしていないというのに。

「なるほど、君達はメイジだったのか」

ギーシュはシェヴルーズの授業での会話を思い出していた。ロバ・アル・カリイエの貴族。東方の魔法なら、理解の及ばないことでも説明が付く。おそらく風の魔法だろうと結論付け、もう一度クリエイトゴーレムを唱える。

いやらしい手を使う。まさか、魔法が使えないと嘯いて貴族の目を欺くとは。

「今度は五体だ！ 君たちがいかに優れたメイジとは言え、自分たちの数以上の敵を相手に出来るわけではない」

全力を出せば、相手がどんな相手であれ勝てるはずだ。何せ、グラモンは軍人の家系。

トリステインを背負って立つべき誇りある家系だ。

赤字が続いて経営が危ないとは言え、それは負ける理由には何一つならない。

一体を様子身として放つ。すると同じ場所で切り裂かれた。ギーシュはそれを見ながら、どういう魔法かと推論をたてようとする。

「考えても無駄だ。カーボンナノチューブは目に見えない鋼の糸。誰も今から動くなよ。その土人形のようになりたくなければな」

ルルーシュが放った謎の言葉に、ギーシュは頭をひねった。ルルーシュの言うことが嘘であれ誠であれ、確かに彼らは杖らしき物は持っていない。

つまり魔法の発動などしていないのだ。まさか先住魔法かと思っただが、目の前の二人はエルフではないし亜人でもなさそうだ。

しかし、事実としてギーシュのワルキューレは真つ二つにされている。後4体控えているとはいえ、考えなしに突っ込めば二の舞になるのは目に見えている。

やっかいなのは目に見えないカーボンナノチューブとかいう糸のことだ。行動は大幅に制限された。自分も、観客も、ルイズですら行動範囲が定まらなくなったのだ。対して相手はこの状況を作り出した張本人。何か彼らには見えているのだろう。

しかし、ギーシュの推論もむなしくルルーシュにも見えてはいなかった。

スザクはカーボンナノチューブに体が接触する直前にギアスが発動するため、大まかには行動が出来る。ラクシャータに作らせたコレは、彼がゼロであった時の代物であり、自分以外が使うことなど考えていなかった。だからこそ糸を切り離して無力化する強力な裁断機が内蔵されているのだが、解除するかはスザクに任せている。ルルーシュはただギーシュを挑発し、スザクが戦える場所を整える

ことに専念した。

「魔法とはすさまじいね」

スザクはそんなことを漏らした。

確かに原子配列の変更には物質の形成、科学者の編み出した錬金術を完全否定出来る技術だった。それを杖の一本で子供でも行えることに戦慄を覚えた。

だからこそ、相手の土台にあがることは避けなければならなかった。舞台にあがるには二人の魔法の認識が恐ろしく危険度が高いものであるために、ルルーシュはリングから降りて新しいリングを作り上げた。

魔法が物をいうなら、こちらでは進んだ科学を見せるべきだ。相手にとつて未知な物は恐ろしい。理解が出来ないからだ。しかもラクシャータは狂がつくほどのマッドサイエンティスト。こちらの要望を大きく上回る兵器の作成など朝飯前だった。冷静な思考判断などおそらく追いついていないだろう。

スザクというナイトは、ポーンを相手にさせることすらおこがましい。キングである私を取るにも役不足だ。ワルキューレとギーシュの魔法、自信を真つ二つに切り裂く。ギアスという奥の手を残し、スザクの実力を隠し、相手の魔法とやらを観察できる。

完璧だ。

こちらは見えないカードを切っただけ。

理解の追いつかない物質に対処など出来ようもない。

「卑怯だぞ！！ 戦え！！」

だが観客はあくまでもルルーシュ達がボコボコにされる様を見に来たのであって、訳の分からないまま膠着状態を続けてほしいわけ

ではない。ギーシュは動けないし、自分たちもそう自由には動けない。観客がしびれをきらすのは当たり前だった。

「だってさ、ルルーシュ」

「決闘におもしろさを求めることには賛成だが、これ以上は殺し合いになるのではないか？」

「確かにね。彼には魔法という武器があつて、僕たちにはそれを対処できるほどの時間は無かった。くれば迎え打つ程度には覚悟してるけど、観客が入ってきたら、躊躇無く対処するしかない。話し合いで決着がつく場合は、双方が双方相手に歩み寄らなければいけない。彼らからして明らかに身分違いの僕らにすることといえば、命令や強制だ。それは言葉の暴力になる」

「だからこそ俺たちは屈してはならない。撃つていいのは、撃たれる覚悟の有る奴だけだ」

「それすらも自覚せず、暴力をまき散らす存在ならば」

「我らは敵を倒そう。かんぷなきまでに」

圧倒的な暴力と優しい説得。どちらも言いたいことは同じだ。ようはどこまで被害を最小限に抑えるか。

ここで貴族を殺すことになっても、たとえ権力者が国を挙げてルルーシュ達を追おうにも、彼らにはギアスが有った。

スザクは死ねない。

ルルーシュは死ぬわけにはいかない。

ユフィの為に。

ナナリーの為に。

だからこそ、ここにいる貴族を殺しきることだって容赦はない。

一時は国ごと敵に回って、人を多く殺しすぎた。

今更偽善者ぶる訳でもないが、ルルーシュ達には死ぬ覚悟があつて反逆し、それ相応の報いを受けたとしても反論はしない。だからこそこの闘争。そこに人間の死という有象無象は要らないのだ。

「どうするんだい？」

「くだらない問いだな。無論、現状維持だ。ルイズに聞いたが貴族どもは精神力を使って魔法を為すらしい。それが切れるまで待つてやろう。そうすれば俺たちの勝ちだ」

「自慢できない勝ち方だね」

「当たり前だ。銃で一撃のもと殺してやつてもよかったが、原因はくだらないものだ。ギーシュとやりに殺される覚悟はない。だからこそ、俺たちは奴を殺す価値もなくなった。後々面倒にもなるしな」

貴族を殺せば、またルイズが面倒なことを言ってくるだろう。彼女の庇護下に無理矢理入らされたとは言え、食事すら満足に取れない現状でそれは得策でない。無力化させるにはあの杖を壊すか、ワルキューレをすべて破壊するか、それともギーシュの戦意を下げさせるか。

「スザク、少し、奴らを脅してやれば決着がつく」

「OK。首と腕、足だね」

息の合ったコンビネーションでギーシュの周りに糸を配置させる。ガンダールヴとヴィンダールヴのルーンを所持するスザクにしてみれば、元の戦闘力と相まって初めての武器でもそれなりに操れる。ワルキューレはまたも真つ二つになり、ギーシュの顔が真つ青になる。すべて、ワルキューレの全てをルルーシュ達に破壊された。よく分からないまま、なにも出来ないままだ。

「さて、一応言っておこう。降参しろ、ギーシュ・ド・グラモン。まだやると言うなら片腕は覚悟しろ」

ルルーシュの言う覚悟が、ギーシュには分かってしまった。名誉も、誇りも、魔法も打ち砕かれた。今のギーシュにはルルーシュ達が悪魔に見える。

「ひ、卑怯だぞ……化け物め……」

ギーシュが苦し紛れに発した一言で、ルルーシュは少し、驚いた。

「化け物？　ずいぶん低い評価を下されたものだ」

クツクツとルルーシュは笑う。ギーシュはルルーシュの奇っ怪な行動にどう対処していいか迷った。

「祖国を滅ぼした、たったそれだけの男が、化け物か」

「何……貴様、自分の祖国を滅ぼしたのか……」

「父親にな、愛想が付きた。母親には絶望させられた。妹と私は棄てられたのだよ。親と国からな」

「馬鹿なそんな戯言」だから私は国を滅ぼした」・・・・・・たったそれだけのことで」

「言ったではないか。私は国を滅ぼしたと。父を殺し、母を殺し、義兄を殺し、義姉を殺し、妹を処刑する手前で召喚された。国の貴族は全て分解して政治を変えた。弱い者の立場を肯定するために、強い者のあり方を否定した」

「全ては我が覇道のために。守ると誓った妹ですら、手に掛けようと画策した男だ――！」

スザクは思う。それを全て、彼は頭で計算し、苦悩し、涙を流したことを知っている。

フレイヤ弾頭を撃った自分も、サクラダイトで富士を噴火させたルルーシュも、道は全て真つ赤に染まっている。

覇道とは常に茨の上だった。ルルーシュは足を踏み入れ、壊れそうになりかけてまで守りたい者がいた。全ては結果を最良にするため。過程がどうであろうと世界を破壊し、世界を救済しようとした。

「踏みにじった者の思いを背負う。結構だ。私が死ねば、それだけで世界を救えるならば」

あの日の前日、ルルーシュはゼロの仮面をスザクに託した。世界に対して反逆を行った男には見えないほど、憔悴しきった顔で。

「貴様、それでも人間なのか・・・・・・お前には人の心すらないのか」

「ああ、愚かしい人間だ。そうしなければ生きていけなかったからな。だから、私は明日がほしい。今よりもずっと幸せで、未来を夢

見ることが出来るなら。昨日も今日も要らないんだ」

「スザク!!」

「おう!!」

ルルーシュのかけ声に、スザクはギーシュに切迫した。別に獲物を持つてもっているわけではない。ただ、ギーシュを力一杯殴りとはすだけだ。

ただ、そこにガンダールヴの力と軍人本来の腕力、ギーシュのひ弱さを鑑みれば、ただのパンチとは言え、骨の一本は覚悟しなければならなかった。

「ひ……分かった、僕はこうさ」

言い終わる前に拳が突き刺さる。何かが折れる音が、広場に響いた。

「悪かったな。今日は耳が少しばかり遠かったようだ」

全ての貴族の不信感をあおり、ギーシュとの戦いは一応の区切りを見せた。

それは男の戯言で（後書き）

ルルーシュ自身の存在を少し暴露。皇帝だった件は心のうちに留めます。

感想を頂いたnamatoroさんの意見を受け、一部改訂しました。一応皇帝をバラすのは止めておこうと。

それは新しい使い魔で（前書き）

決闘後、ルイズとキュルケの会話です。それと、ルルーシュがギアスを使います。
編集をば。

それは新しい使い魔で

ルイズは驚愕した。

ルルーシュには経緯に驚かされ、スザクには人を何十メートルも殴り飛ばせるだけの力があつた。

メイジをどんな手段で戦ったのかは知らないが、勝つたのだ。結果だけみれば華々しく称えられるものだが、彼らが去つた後の広場は沈黙が続いていた。

『祖国に反逆した男』『それを扶助する騎士』

ルルーシュとスザクは自らそう名乗っているようなものだった。

ここトリステインでは貴族が権力を集中して持っているため、ルルーシュの言葉に聞き逃せないものが有つた。

貴族制を壊したことだ。その真意はどうあれ、快く思うものはいないだろう。ルイズからみてルルーシュに怯えるもの、危険視するもので分かれていた。

「ルイズ」

「あによ」

につくき宿敵とも言えるキュルケが来た。

朝はさんざんサラマンダーを自慢させられ、使い魔はどうしたとしつこく聞かれたのだ。彼女からすればルルーシュもスザクも情熱を燃やせる相手だったらしく、手を出そうかという段階で決闘騒ぎに直面した。

倒れた彼らを助け起こし、タバサに治癒でも頼めば接点を作ることが出来るだろうと傍観していたが、それはついぞ叶わなかった。

ルイズはどう思っているか知らないが、彼らの作戦はギーシュの自滅を誘う特殊なもの。

おいそれと簡単に出せる戦術とは違う。

それをルルーシュは言葉巧みに混乱させ、スザクをうまく扱い、あつさりと予定調和まで持っていたのだ。

交渉ごとには使えるルルーシュ。

戦闘面ではギーシュを圧倒したスザク。

是非とも家に取り込みたい欲求がわいてきたのだ。それもヴァリエールの使い魔とは、ちょうどいいとばかりに。

「彼らは何者なの？」

「知らないわよ。貴族と騎士だってことは聞かされてたけど、真相なんて間違いに決まっているわ。魔法も使えないみたいだしね」

「逆に聞くわよ。ルイズ、魔法が使えなくても自国に反逆できたってことは、彼には魔法に変わる手段があったととってもいいでしょう。しかも、おそらくあの口ぶりなら、人の上に立っていた指導者それをトリステインが浚ったとすれば、どうするつもりなの？」

「・・・・・・は？ 何がよ」

「言い換えるなら、それほどの人望をもしも彼らが持っていれば人は必ず取り戻そうとするわ。そして国を破壊できるほどの力を彼らが持っているならば、トリステインはどうやって対応するのかってことよ」

「不埒なまねをすれば、切り捨てればいいじゃない」

「・・・・・・、ルイズ、あなたスザクの強さを見たでしょう。力

も速さも、段違いよ。詠唱前に殺されるに決まってるわ」

「……………いざとなれば、ワルド様が……………」

「あなた、いざとなればっていうけど、今彼らと部屋を共にしているはずよね。ヴァリエール家の三女とはいえ、あなたを人質にすればいくらワルドって人が強くても無理よ」

ルイズは考える。

使い魔とはいえ、二人は、全くルイズの思惑には乗らない。言うことを聞くのは食事が抜かれるかどうか、住めるかどうかだ。ルイズ自信をご主人とは呼んでいるが、それはルイズが強制させたことであって自発的なものではない。

スザクはルルーシュに仕えているというより友人みたいに接しているため、まかり間違ってもルイズの味方などしないだろう。

ルルーシュはルイズのことをよく思っていない。不機嫌な顔をするだけだ。

もし二人を排除するために国が動いたなら、ルイズはルルーシュにとってご主人ではなく交渉の手札に使うだろう。あの男はそれを平気で実行できるだけの覚悟がある。

身震いがした。

「ミス・ヴァリエール」

「何ですか、ミス・ロングビル」

「オスマン学院長が呼びです。決闘の件についてだと」

「・・・・・・・・・・わかりました」

渋タルイズは広場を後にする。百面相のキュルケを残して。

「まあ座りなされ」

「失礼します」

「礼儀を尽くしていただいて痛みいる」

オスマンはルルーシュとスザクを呼びつけた。何せ、未知の技術を用いて、衝撃の過去を明かし、正体は掴めないのだ。これで警戒しなければそもそも学院長などという立場にはたっていない。残念なことに、人を疑わなければ人物の理解は広がらない。ルルーシュ達を見極めるため、危険を承知で会合を持ったのだ。

「楽にしてくだされ」

「そう思うなら、この居心地の悪い探査魔法をやめてくれないか？」

「・・・・・・・・・・なんの事かのう」

オスマンがとぼけるが、ルルーシュは目をキッとつり上げてオスマンを睨む。

「魔法など、いくらでも見れる機会があつた。後は理論を解明し、状況を判断し、条件をクリアする。魔法とは、精神力を用いて精霊を刺激し、使役する技術だと言うことはすでに理解した」

オスマンは冷や汗をかく。数百年生きた彼はせいぜい20も生きていない青年に恐怖した。

彼は見ただけで魔法を理解できる。

トリスティンの王立魔法研究所ですら確証に至らない精霊魔法の存在を明らかにしたのだ。

「ほう、博識じゃな」

「ルーンが教えてくれた」

「ほ？」

いかなオスマンとはいえ、ルルーシュの先ほどの発言には驚いた。

「ミヨズニトニルンという額のルーン、そして胸に刻まれたリーヴスラシルというルーン。魔法を扱え、魔法具を作るルーンなど、馬鹿げた能力だ」

「僕はガンダールヴとヴィンダールヴだったね。身体強化と動物を操る事が可能なルーン。結構強力な力だね」

「ガンダールヴ……ヴィンダールヴ……ミヨズニトニルンじゃと……！？」

オスマンはブリミルの使い魔を思い出した。

神の盾、ガンダールヴ。神の笛、ヴィンダールヴ。神の本、ミヨズニトニルン。記すことさえはかれる使い魔。ガンダールヴ、ヴィンダールヴ、ミヨズニトニルン。そしてリーヴスラシル。彼らは始祖の使い魔とも言うのか、圧倒的な力を有していることが伝

えられた。

（まずい、まずいぞ！！ ルーンがなぜ彼らに刻まれているかはしらんが、こちらを快く思っていないことも事実じゃろうし）

悪いとは思いながらもギーシュとの決闘は見させてもらった。

コルベールから報告された自称貴族。

いくら自分の身が危険にさらされれば力の一端くらいは見れるはずだとオスマンは勘違いしていた。既知ならわかるが、未知は物差しがない。彼らが使ったのは視認できない糸。しかし、それすらもブラフで見えない剣かもしれないし、見えない魔法かもしれない。貴族が魔法を彼らに見せすぎたのだ。

「私が見たのは土だけだったが、教室にいる他のメイジと比べさせてもらった。火と水、安定しないが風もあるみたいだな。質量保存の法則を完全に無視した魔法だ。あり得ないと言わざるを得ないが、対処できないわけではない」

オスマンはルルーシュの言葉に沈黙を返すしかできなかった。

「オールド・オスマン。ミス・ヴァリエールが来ましたぞ」

「おお、コルベール君、ミス・ヴァリエール。入ってくれたまえ」

ルイズは二人を見てすぐに嫌悪感を露わにする。

スザクとルルーシュは、もとより主であると認めたわけではないのだが。ルイズにしてみれば嘘つきで従わなくて妙な力を使って卑怯な手段で勝ちを得る、使い魔は盗賊とさして変わらないと思っている。

「何だ、言いたいことがあるならはつきりと言ったらどうだ？」

「じゃあ、何で私の許可も得ずに決闘なんてしたのよ」

「決闘の手順とルールは分かっていた。許可を得るといっても、私もスザクも主は持たない。意志さえ違えば、スザクは間違いなく私を殺す」

「ああ。それだけは認める。ルルーシュのやり方が最良でないなら、僕は僕でルルーシュとは袂を分つ」

「私たちを認めさせるというのはそういうことだ。命令や強制ではなく利益追求。そして目的の一致だ。私が上に据え置ける人物など、知略で私を上回る人物ぐらいだ。だからこそ、私には主は必要ない」

「僕は仕えるに値する人物から騎士の証をもらった。彼女以外からの命令など受けたくないし、彼女を殺したルルーシュに完全に仕えているわけではない」

「言うなれば私とスザクは共存はしているが、意見の不一致で敵対する。自分の意志を持って行動するのだ。使い魔などそちらの言い分はあまりに一方的でこちらのデメリットが大きい為、辞退させてもらうと言ったことだ」

驚いたのはルイズだ。そしてオスマンはさらに驚く。

「あんたは私の使い魔でしょ！？」

「確かに契約しなければいけないと言うからそちらのルールに乗っ取って契約は交わした。しかし、契約とはそもそも双方の了承を以

て行われるべきものだ」

「僕たちは君への義理で契約を返上した。僕たちがこの世界について教えてもらうことと君が進級すること。価値としては吊りあっているんじゃないか？」

「待て待て待て。先程の口ぶりじゃとお主たちはこの世界の人間ではないのじゃろう！？ 身寄りも無くして何処に行こうと言っんじや」

「ここにおいても送還の呪文すらないのでは仕方ない。腹に据えかねることは多々ある。この魔法学院とやらにも、ルイズにも未練はない」

「僕たちは受け身で生きるわけにはいかない。たとえ君たちと敵対したとしても、僕たちは止まらない理由がある」

はつきりとした物言いだった。要約すれば「ここにおいても意味ないし、出ていく。止めるのなら殺す」という暴力的な解答だった。ルイズを筆頭とした貴族が一方的な手段に出るというなら、ルルーシュたちはそれに一方的に返す。

もっとも、ここまで扱いが低ければルルーシュはいつか死ぬだろう。

貴族に逆らった。

貴族に意見した。

貴族をバカにした。

かつて貴族だったルルーシュが、耐えようもない嫌悪をトリステインの貴族の子供に抱いているのは事実だし、値踏みするように、

観察するように見てくる視線にはいい加減うんざりしていた。

拠点として使えるかもしれないメリット。低い扱いで自由を縛られるデメリット。考えたのはそれだけで、ルイズのことは気にかけてすらいなかった。

結論として出したのがここから出ていくことだ。ずるずると今の関係が続けるのは得策でないと判断した。スザクも同意のようで今日の朝には決まっていた。

最後の最後でルルーシュの背中を押したのが、ギーシュとの決闘騒ぎだったわけだが。

「あい、分かった。そこまで言うのなら仕方ない」

「オスマン学院長!？」

「このままでは泥沼じゃろう。確認したいが、ミス・ヴァリエール。それでいいかね？」

「しかし、私の使い魔がいなくなるのは」

ルルーシュはあることを思いついた。ルイズはルルーシュとスザクを召喚している。聞いた話では一人につき使い魔は一体だけしか召喚できないというのに。それは何かが精神力に影響し、使い魔の召喚を己の中で遮る何かがあるのかもしれない。使い魔が死ねば再召喚は可能。つまりは、ルイズ自体でルルーシュたちとの繋がりを感じている限りは無理だという事。

「方法ならある」

ルルーシュの言葉に誰もが耳を傾けた。

「要は使い魔さえいればいいのだろう？ 私も、スザクもまだ死にたくはない。だが、ルイズ。お前から俺たちが死んだと、認識できないと言うことになればいいのではないか？」

「ギアスを使うのか？」

「強制じゃと！？ なぜ水のスクエアスペルを……」

「これは魔法ではなく私に宿った力だ。絶対遵守の王の力。そちらの魔法とは違うことを容赦してくれ」

「ミス・ヴァリエールに何か損害は無いのかな？」

「無い。私たちを見かける度にギアスが発動する。精神を操るものではあるが、俺たちはルイズには何もしない。ただ私たちに关わるものを認識できないというだけのものだ」

「ふむ、いいじゃろう。ミス・ヴァリエール。使い魔を一度手放すことになるがよろしいか？」

「ええ。分かりました。次はもつといい使い魔を呼び出しますわ」

「……ルルーシュ・ランペルージが命じる！！ 私たちの存在を、認識するな！！」

赤い鳥の紋章がルイズの目に入り、ギアスが発動する。

「ミス・ヴァリエール。気分はどうですか？」

「……ミスタ・コルベール？ 私はどうかしたのですか？」

「どうって、■■■■君がきみに■■■をかけたんだ。彼らが見えるかね？」

「彼らって、誰のことですか？」

「ここにいるだろう？」

「…………ミスタ？ からかっていらっしやるの？」

「無駄だ。おそらく、姿はもちろん声さえ認識してはいない」

「何という、すさまじい力じゃ…………これがリーヴスラシル…………記すことさえはばかられる使い魔の力なのか」

「な！？ それは初耳ですぞ！ オールドオスマン！」

「うつむ、圧倒的すぎる力じゃ」

「残念ながら元には戻せない。ギアスは私から離れてルイズの中で命令を繰り返す。今更、口先だけで了承した契約を破棄などできないぞ」

「……………」

「さて、いくぞスザク。他のルーンの性能も未知数だ」

「ああ。まずは武器を手に入れよう。どこまで行こうか」

ルイズと二人がいなくなった学院長室。コルベールはルルーシュ

の言葉にイヤなことが頭をよぎった。

「オールドオスマン・・・・・・・・・・もしか他のルーンとは・・・・・・・・・・」

「左様。ブリミルとともに戦った伝説の使い魔、盾と笛と本じゃ。ああ、もしかなくても、ヤバいかのう？」

「ええ、トリステインだけでも宮廷貴族が責任の追及をしますぞ。伝説の使い魔などいい戦争の道具です。もしか、次にミス・ヴァリエールが召喚する者も伝説の使い魔なのだとすれば」

「虚無の再来・・・・・・・・・・王家は混乱し、ヴァリエール派が生まれてかつぎ上げられるであらう。そうなれば王家は混乱し他国の介入もあるじやろう。よいな？ 口外は無用じゃ。トリステインが亡んでしまうわい」

「はは、もちろんですぞ」

しかし、とオスマンは前置きし、ルルーシュたちがでていった扉を見つめる。

「始祖の使い魔たちか・・・・・・・・・・何かの前触れでなければよいが・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・使い魔を召喚せよ!!」

何度目かの爆発。先日の使い魔召喚で、使い魔を召喚できたかど

うかすら分らないルイズはコルベールに促され再召喚をしていた。
爆発、爆発、爆発。辺りは戦場とでも見間違えるがごとく陥没し、
土煙を上げていた。

（いい加減来なさいよっ！！）

半ば強引に精神力をつぎ込む。そして鏡は現れ、彼がハルケギニアの土を踏む。

そしてついに、ルイズは使い魔を召喚できた。

青色のパーカーを着て、呆然とルイズを見つめる平凡そうな少年。
コルベールはそつとディレクトマジックをかけたが、少年はそこの
平民と同じで特殊な力など宿ってはいなかった。

「あんた、誰？」

「誰って……俺は平賀才人」

後にガンダールヴとなる少年が、正史の通りに召喚された。

二人が契約の為にキスを交わす。スザクと同じ左手には、同一の
ルーンが刻まれている。

コルベールはついに確信した。ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールは虚無の再来、虚無の担い手であると。
そして少年に刻まれたガンダールヴ。

物語は、もう一度進み始めた。

それは新しい使い魔で（後書き）

サイト召喚です。

感想でジンジャーさんがサイトとルルーシュたちの世界は同じなのかと仰っておりましたが、それは無いです。

そうしたらサイトも結構場馴れた兵士のような行動を取ってしまうでしょう。イレブンの弾圧がデフォだったルルーシュたちの世界とは別の世界から来た、あくまで普通の少年の立場です。

感想のほど、ありがとうございます。

それは新しい環境で（前書き）

ルルーシュ、ルイズの使い魔を辞めた。でも何とかなる。

編集します。

それは新しい環境で

トリステイン魔法学院を出てから、すでに四日が経とうとしていた。

元の服（血塗れ）から金の刺繍などを施したものを売り、ゼロの衣装も売り払い、今はトリスタニアでアルバイトをしていた。元々持っているものが高価なせいもあり、高い技術が認められてゲルマニア商人がいぶかしそうに見つめるトリステイン商人を押し退けて買い取った。

そのときついでにカーボンナノチューブも売ってしまった。技術的には卓越したスクエアなら錬金できるだろうが、そもそも服に付いた装飾に誰がディテクトマジックをかけるのか。それに作り出せるのは目に見えない糸。使い方と用途など思いつかないに違いない。

周りには奇異の視線を向けるものが多かったが、ルルーシュたちの元の世界の服はこの世界では再現できるかどうか分からないほど高度なものだ。それを見抜ける商人がゲルマニアにはいた。それだけのこと。

あの服が発端で技術革新にならないよう祈るしかない。

ゲルマニアという技術大国、ガリアという魔法技術大国、ロマリアという宗教国、アルビオンという空中国家。

金には困っていなかったが、情報は安くはない。足下をみられてたくさんぼったくられることもある。だから合法的に間接的にもつ

とも有効的な手段を打つ。酒場でのアルバイトだ。

「い・・・・・・・・いらっしやいませ」

「んゝもう！ まだぎこちないわよ、妖精さん！！ もっとお腹から！ 元気よく！ もう一度！」

「いらっしやいませっ！」

魅惑の妖精亭。

ルルーシュたちが隠れ蓑にしようとした平民の料理屋である。血だらけの衣装とフルフェイスの怪しさ爆発の二人を一晚でも泊めてやるうという宿屋は存在しなかった。スカロン店長はそんなルルーシュたちに宿を提供してくれた恩人である。

別に野宿でも構わないかと思っていたが、スカロンが不気味な話をしたために泊まらざるを得なくなった。トリスタニアで浮浪者は、男でも女でも構わずに犯す者がいると。

世間一般より高ランクの綺麗な顔をしているルルーシュと逞しさがある精悍な顔つきのスザクは身震いしながらお世話になった。

「精が出るね、ルルーシュ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

スザクが厨房から顔を見せる。コック帽をかぶり、調理補助に回っているらしい。もっとも女の職場で女にみられ続けるというものもなかなかに精神力を使うものだが、まだスザクの表情は明るかった。対してルルーシュの表情は悪い。いつもなら鋭い目つきで威嚇する彼の目には哀愁と諦め、恥辱が混じった色が出ている。

魅惑の妖精亭は酒場であり、女の子が接待するキャバクラのよう

な場所だ。無論、ホールに出ている以上、ルルーシュは女装を強いられた。カツラとウィッグ、あまり上質なものはなく、一時の間に合わせとして置いてあるストレートのカツラをかぶり、なぜか化粧技術が抜群に巧かったスカロン店長がルルーシュを見事『女』へと変貌させた。

まるで王女様、そう感想をもらすスカロンにスザクは苦笑する。

事実、見れば見るほど美しかった。皮肉なことに筋肉があまり出ていなかったのに加えて高身長だったためにかわいさよりも美しさを際立たせたルルーシュが誕生した。

スザクは筋肉があるために女物の衣装が手にはいらなかったためにコックになっている。軍に入ったことで一番幸いした出来事だった。

「……恥辱だ。屈辱ならまだ耐えられるが、この、恥ずかしい格好は、さすがにミレイ会長も手を出さなかったというのに」

「似合ったら似合ったで女の尊厳踏みにじるからじゃないかな。よく似合ってるよ、そのドレス」

「ふ、まさかスザクの皮肉を言われるとはな……まったくうれしくない」

黒いドレスは背中がぱっくりと開き、ルルーシュの肩甲骨から背中にかけての美しいラインを見せつける。胸の細工は少し膨らみをもたせてはいるが、そんなに大きくはない。

「ルルちゃあん！ ご指名よお！！」

スカロンの言葉に肩を落としてホールに向かうルルーシュは、心

底疲れた顔をした。貴族でも負けず劣らずの容姿のために店に来る貴族は彼女を気に入って指名するのだ。

指名料はルルーシュに五割、店に五割だ。

平民ではなかなか手が出せない価格設定のために指名といえ九割が貴族になる。

実質貴族は嫌いだが金のためにやるしかない。チェスで鍛えたポーカーフェイス、マオというギアス所持者に立ち向かったときの並列思考をもって接客に当たる。演技とはいえ、高度な作り笑いだ。太った貴族から巧く情報を引き出し、男としての線引きで触られそうになると不自然にならないように別の行動に促させる。声が低く、少しハスキーな感じだったので女性からの指名もたまにくる。その時はさすがのルルーシュでも対応に困っていた。

「次は……ゲルマニアか」

スザクはルルーシュの昨日の言葉を思い出した。

帝政国家ゲルマニア。アルブレヒト三世が統治する成り上がりの国。ルルーシュはそこまでの通行費が貯まったので近日中には出発すると言っていた。ギアスを用いて爵位を取り、地盤を固める心算だ。

さすがにこれはどうかと最初は思ったが、ここ、ハルケギニア大陸の徴税法の出鱈目さに同情も消し飛んだ。どんなに圧政でも六割ぐらいしか取らない。なぜなら暮らしに困るほどの圧政は民衆の反感を買い、国としては最悪な反政府勢力の弾頭を許してしまうからだ。アルビオンには『レコンキスタ』と呼ばれるそれらしい組織もできあがっている。

どの国も領主が税制を決めてしまったため、低くて四割、普通で五、六割酷くて八割だ。

ここまで好き勝手やってるのだから、奪われたとしても文句は言えないだろう。

そのなかでも特に酷かったのがゲルマニアのドートリツシュ侯爵の土地だ。数年前から豪遊に豪遊を重ね、国から見捨てられた土地なのだ。国へのバックアップが絶たれたことで不名誉印を押され、領主という権限を剥奪されたままであるにも関わらず税収を取り上げていたため、先日粛正された。

その跡地には貴族にとってお荷物にしかない土地だったのだ。借金返済義務、農地の荒れ、領民の確保。それらを、つまりドートリツシュ侯爵の負の遺産を継承するのだ。ゲルマニアのアルブレヒト三世は金さえあれば誰が取っても構わんと明言しているが、金を払ってまで押さえない領ではない。

その場所を押さえることで第一段階がクリアになる。つまり、王へ謁見できる。アルブレヒト三世にルルーシュとスザクのルーンを除いた情報を提示する。実力主義者の頂点に立つ人物であれば人の嘘を見抜く慧眼をもっていたとしてもおかしくない。

無理でもギアスをかけてバックアップをさせる。ドートリツシュは国の中央に近いため、他国からの侵入は少なく、資源は枯渇しているようだがルルーシュの覚えた練金魔法で兵力を作る。

いわゆる、僕たちの世界で動いていた人型自在戦闘装甲機、ナイトメアフレームを作成するらしい。

ユグドラシルドライブとコアルミナスの問題は風石と火石で出力にするらしい。水石で冷却、土石でランドスピナーを始めとする特殊機能の強度を確保する。ファクトスファイアは外した。情報分析を行うカメラだが、ナイトメアフレームに単身でかかってくるバカは居ないだろうと。

風石での再現は可能だが、コストがかかる。しかしここで問題になったのが、普通に買えば破綻する価格だと言うこと。一体作り上げるのにコアだけで一年単位の金がとぶ。兵力としては最高だが、

一体でもさらせば国に技術情報の提示を求められてしまう。

「可及的速やかに、ランスロットとガウエインを創作する」

ここまでが今決まっている道筋だ。動かせる専門知識があるのはルルーシュとスザクだけ。でも単純な動作だけならメイジがゴーレムと同じように操ることができてしまう。

まあ、今一番必要なことはお金を稼ぐことだけだけどね。

魅惑の妖精停近くの服屋。

服を全て売り払ったが、トリスタニアではなぜかルルーシュたちがいた世界の服を扱っている店があった。物珍しさで眺めているとアッシュフォード学園の男子制服が二着、置いてあった。

すぐさま買取、他の衣装もエキュー金貨で買った。

ルルーシュは女装から開放されると少なからず安堵していたが、スカロン店長は似合うから着せていただけでルルーシュが服を持っていないから女装させていたわけではない。

次の日もホールで女装をしていたルルーシュの顔は、盛大に引きつっていた。

それは新しい環境で（後書き）

ルルーシュ女装。何となく想像してくださったら多分それです。
だいたい合ってます。

それは少年の独白で（前書き）

ルルーシュバイトをするの巻。格好はシックな感じのドレスタイプ。着る人を選ぶ感じの。美形だから女装だけど、本人は乗り気じゃないから男の娘ではない。

編集します。少しスカロンの発言を変え、何となく違和感のない方向へと。……。まあ、元が違和感有りまくりな発言でしたね。

感想の欄でおかしいだろうと指摘を受けましたので編集させていただきます。

ジンジャーさんをはじめ、感想をくださった方にお礼を。

それは少年の独白で

「ルルーシュ・ランペルージが命じる……有り金をチップとしてよこせ！」

「仕方がない。恵んでやろうではないか」

ギアスを使つての荒稼ぎ。

偽りの記憶を入れてなぜ金がなくなったかという事実を作り上げる。貴族の相手をするときはなるべく金を筆記取るようにしている。まあバレたらバレたで報復とかありそうだが、報復時には自殺するようにギアスを設定している。

水魔法を扱えるようになり、ギアスを少し細かく設定できることが可能となった。

条件付けと結果を何個か追加できるようになったただけだが。

さすがに有り金筆つて自殺させれば貴族が魅惑の妖精亭に不信感をもち、最悪取りつぶされるかもしれない。

今までの客で一番の大物はリツシュモン。足繁く通うわけではないがそれなりに金払いがいい。比例して人間性とセクハラの悪さも一番だった。自分も接客時に触られたので、本気で殺そうか迷ったのは否定しない。

「今日もルルちゃんが一番ねえ」

「ありがとうございます。ミ・マドマゼル」

「でも明日でやめるんでしょう？ 寂しくなるわぁ」

「すみません。しかし、私とスザクはやらなければいけないことがあるのです。今日まで置いてもらったことには感謝しています」

「……ふう、わかったわ。あなただって妖精さんだものね。花の蜜を取りにくくために、巣から離れて行くときがきたということね……」

「はい」

ルルーシュは内心妖精さん云々などどうでもよく、後腐れなくここを離れたかった。

今までの世界のすべてが敵である環境があつたせいか、スカロンのように慈善で接してくれる者がいなかったために、ルルーシュはスカロンに苦手意識を持っていた。

ブリタニア本国でも日本でも黒の騎士団でも彼ほどの強烈なインパクトを持つ者はいないため、対応に困るのだ。逆に玉城などの単純な作業員の方が誘導しやすいため、ついついそちらに熱を注ぐともあつた。一番カレンが優秀で単純で従順だったために、彼女に何かと要求をしてきたが、どんな無茶でもやってのける彼女は一番優秀な部下だった。ゲルマニアで貴族に襲名するにしても、スザクと同等とまでは行かなくてもそれなりのパイロットを見つけないのは。

「じゃあ、明日が最後なのね。でも、我慢するわ。笑顔で送り出してあげたいもの！」

「ありがとうございます。スカロン店長」

「いいえ、スカロン店長ではないわ。ミ・マドマゼルよー!」

「はい、ミ・マドマゼル」

なにげに環境適応能力が高いルルーシュであった。

次の日、ルルーシュはいたについた女装姿で奔走していた。
感謝している相手には礼儀を尽くす。

しかし、敵対する相手には反撃の余地すらなく捻り潰す。

彼の行動方針は複雑なように見えて案外単純なのだ。

ようは敵か味方かが一番重要なのであって、腹に抱えた爆弾も野心も含めた上で利用してやるのだ。だが、魅惑の妖精亭は理由はあるけど思惑はない。あくまで善意に基づいて行動しているのだ。無論客に対してではなく従業員に対してだが。

「ルル! 一番に回って!」

「手開いてる人八番まで持って行って!」

「料理ができたわよお! 妖精さん達! 持って行ってちょうだい!」

この忙しさが、以外にも心地よいものだ。

生徒会のあの日常が幻視されるようで。

チェスが得意な一学生だったあのころ。

リヴァルとともに荒稼ぎしたり、ミレイ会長の積もり積もった仕事を生徒会総出で片づけたり、シャーリーが会長に文句を言いつつも仕事を片づけたり、ニーナが苦笑いしながらそれを眺めていた。

ゼロになって忘れかけていた、仲間との行動。

ここにはあのとときの輝きが残っているような気がして。

だからこそこの場の空気を壊す貴族というものに、今日ほど憤慨を覚えなかった日はない。

入り口から同伴に貴族を携えて来るリッシュモン。スカロンがいつも以上に丁寧に対応し、席まで案内する。ご丁寧にサイレントをかけてまで貴族と何かをはなしているところを見ると、国の国勢を左右する話かもしれない。

もっとも何も話さない方がいい方向へと向かうし、あの貴族が実は他国とつながっていて情報を流しているのなら国が潰れると言うだけだが。

ここからは注文に気をつけなければいけない。サイレントをかけているということは周りに聞かれたくない話なのだ。

あからさまに機嫌が悪くなれば注文は取りづらいし、ご機嫌なれば財布の紐を緩ませてどんどん頼むだろう。もっともこの交渉法は食事を相手に取らせて幾分か機嫌をよくしてから行う心理交渉術のはず。

明らかに平民向けの飲み屋でプライドの高い典型的なトリステイン貴族であるリッシュモンが相手を激昂させずに交渉を行うというものはいささか夢物語がすぎると言うこともあり。

ワインを運んできた新米の子からワインを受け取った交渉相手がリッシュモンにワインを引っかけるという大惨事が起こった。よほど腹に据えかねることを言われたのか、サイレントの対象外からでた相手は口汚くリッシュモンを罵りながら出て行ってしまった。

「……………その女。少し待て」

「え・・・・・・・・・・・・・・・・」

ワインが滴る太った男は、不満のはけ口を探した。ちょうど近かったのがワインを運ぶ途中だった女であり、それ以上でも以下でもないのだ。リツシュモンの言葉を徐々に理解し、女の顔は冷や汗と恐怖で青く染まっていく。

表ではどう評価されているかは知らないが、貴族の裏話が行われるほどの秘密厳守を守るこの魅惑の妖精邸。実際は言ったところで不敬だと見なされて不当に処罰されるため、噂として流すしかないだけだが。それでも貴族の隠したい傷の話が酔った勢いで話してくれる貴族もいる。

リツシュモンは汚職に賄賂にと、金が集まる役職を利用してここら一帯の店を取り仕切っている。つまり、ここでは国の治安維持がもみ消されやすいのだ。王都トリスタニアでこのようなことが起るとは誰が予想できようか。

少なくとも鳥の骨と揶揄されるマザリーニは知っていそうだがここまで手が回らないのだろう。偶然にも母と同じ名前のマリアンヌ皇太妃には一国を取り仕切るものとして落胆し、すべて娘のアンリエッタに任せるのもどうかと思う。

そのしわ寄せが貴族の調子を増長させているのだ。

「お客様、うちのものが不手際を働きました」

スカロンが間に入る。この際何がまずいかが問題ではなく、絡まれることが問題だ。責任の是非はこちらにはない。

「ああ、スカロン。この店はいつたという教育をしているのだ」

「申し訳ございません。なにぶん日が浅い新米でして、なにとぞご容赦のほどを……」

「何も貴様を責めているわけではない。そちらの店員に不満があるのだ」

「監督の責任は私にあります」

スカロンの一步も引かない低姿勢は続く。なによりハラハラさせられるが、ここではスカロンの行動が一番正しい。リツシュモンにもし女がつれて行かれると人間らしい尊厳すらない扱いをされるであらう。

女は涙を溜めて謝罪を何度も繰り返す。リツシュモンの自尊心を沈めるため、女はただひたすらに謝った。

「いいや、お前が教育できないのであれば私が教育してやろう」

リツシュモンは嫌らしい笑みで女をみた。まだルルーシュの認識では成人にも達さない少女。正確に言えばまだ十代だろう。金髪の、まだ別の将来が伺えるあどけない少女だ。

ここまで言われればさすがにスカロンも言い返せなくなる。彼にはジェシカという娘がいる。ここには行き場のない女が溢れている。娘と近い少女を、汚職にまみれた貴族に差し出せばどうなるかはわかるだろう。少なくとも慰みに夜の相手をさせられることは用意に思いつく。

「失礼ながら、お客様。ここは奴隷市ではなくただのレストランです。そのような発言はお控え下さいませんか？」

「……誰だ、お前は。コックが何のようだ？」

「同僚が理不尽な命令で連れて行かれようとしています。何を黙って見ているなどできませんようか」

リツシュモンは開いた口がふさがらなかった。周りの平民もコックを見る。

「き……貴様、貴族たる私に、意見をしようかと？」

「ええ。さらに口添えさせて頂きますと、貴族であるあなたが、何を平民が働く場所まできて威張っていられるのでしょうか？ 口がうまくなら外交に、力があるなら衛士隊に、貴族というものは平民を監視する立場ではありますが、威圧するものではありません」

スザクはリツシュモンを睨みつけながら朗々と語る。確かな眼孔に見竦められたか、一歩ずつ後ろに下がる。

スザクの威圧は、正直怖い。

「ええい、黙れ黙れ！！ その口うるさく喋る小鳥を何とかしろ！！」

しかし、誰も動かない。

平民はもちろん、偶然居合わせた魔法衛士隊も、誰も動かない。いや、動けなかった。スザクの放つ威圧感、圧倒的強者が放つそれであった。虎の前に竜の前に何の準備もなく置き去りにされたような恐怖。

動物に宿る本能が、スザクの威圧に竦められた。

「思い上がるなよ、平民」

リッシュモンが詠唱を始める。が、それより早くスザクは動いた。厨房からテーブルへ。ただリッシュモンだけを視界におきながら疾走する。

「……………ぐう、は……………!?……………」

「無駄だ。喉を強めに締めた。しばらくは喋れないだろう」

あまり素早い無力化だった。的確な行動だった。なぜならここにいる全員が理解する。魔法を封じたのだ。

貴族殺しの異名を持つ平民がいる。力を持つ貴族に平民の牙たる剣で真つ向から貴族を殺せる存在だ。スザクはそれをたやすく成し遂げたことから、メイジはスザクの行動を凝視する。

「僕は君たち貴族が嫌いだ。魔法という武器を持って横暴を働く。かつて僕が仕えた王族は、もっと誇り高かった。優しかった、そして心が強かった！魔法という力がなくても、彼女は平和を実現させようと実行した！！」

スザクの表情は険しかった。それこそ親の敵を見るかのごとく顔をゆがめる。肩を震わせ、今までの積念を吐露するがごとく、頭で考えなくても声に出た。

余りにも違う貴族。スザクがかつて仕えた王族の少女は、間違っている事には間違っていると、毅然とした態度で立ち向かっていた。その姿が、ユーフェミアの姿が、スザクにとって尊ぶべき貴族という存在だった。

貴族は国民のために剣を執る。しかし、ハルケギニアに来て見た貴族のあり方は、ユーフェミアの姿をあざ笑うかのごとく否定した。

「僕は君たちを見るごとに胸が締め付けられる。ここの貴族はどうして抑圧でしか統制を果たせないんだ！ 魔法という神秘を、なぜ人の役に立てようとは思えない！！ 僕には分らない、分らないんだ！！」

手段がない状態でスザクはナイトオブゼロまでたどり着いた。力がないから、力を欲したのだ。

究極の努力を費いた武人こそがスザクであり、それ故に簡単に手に入る魔法という武力に齒がゆさを感じている。

力は純粹に力である。それをいかに使うかは人間の力だ。

「ルルーシュ！ 君は言ったな。撃つていいのは、撃たれる覚悟のあるやつだけだと！！」

「ああ。力はどんな経緯で手に入れたものであれ、力には責任が宿る。人を殺すのなら殺される覚悟を。それが最低限の覚悟という奴だ」

「そうだ！ だが、貴族にはそれが無い！ 権力と金を盾に、覚悟を免れている！！ こんなことが、許されてたまるのか！！」

一方的な意見。スザクの意見は平民よりだ。

いくらかの平民は感銘を受けたかのような顔をしている。

しかし、それは封権制の場合では最悪の一手。

スザクの言う民主主義よりの思想はすべての国民は同じ立場で断罪されるべきだということ。文化も技術も発達していないこのハルケギニアでは貴族制を用いた方がより効率的なだけだ。全ての国民に教養を教えるどころか、文字すらも書けない者が多いから。

立場が違えば意見は変わる。

貴族はその是非を問わず知識人を要求される。

平民は煩わしいことに頭を抱えなくてすむが、労働を対価に国を支える。

ここに煩わしい魔法という明確な武力によって、いきすぎた経営を許してしまうのだ。

「確かに、貴族は愚かしい。国単位で間違えていることは確かだ」

だが、っとルルーシュは言葉をきる。

「権力も、知力も、労働力も。私はすべてを肯定しよう。魔法もしかりだ。立派な武力であり、畏怖的な力だ。だからこそその統制だ！」

「これは抑圧だ！ 誰もが幸せにできる方法があるなら……」

「

「それは傲慢だ。貴族は権力に付随する特権がなくては動かない。誰もが平等など、あり得ないのだ」

「あり得ないなんて間違っている！ 方法は必ずあるはずだ！」

「身を弁えろ！ 私たちが、何を成したか忘れたか！！ 今更、人を救うなど、世界を、社会を変えるなど、これ以上の重荷を背負うつもりか、スザク！！」

「僕は、目の前で苦しんでいる人がいるなら救いたい。それはいけないことなのか！！」

「そうじゃない！ ええい、この分からず屋が！」

二人の言い争いは続く。町中の酒場で話されるには高度な国の運営方針を巡っての言い争いだ。互いに意見と理由があり、互いに反発と理念がある。

武力によつて世界を変えた彼らには分かっていた。その被害が関係のない民に向くことも、思わない敵を作ること。

ルルーシュは力を容認する。力のない国は淘汰され、人が死ぬからだ。

スザクは力を容赦する。必要最低限であり、ましてや民に向けられることなどあつてはならない。圧倒的な暴力も、優しい説得も、どちらも人を殺す。

根底にあるものはどちらも同じことであるにも関わらずだ。

「この際だ、ルルーシュ。僕は君に聞きたかったことがある」

「何だ、スザク」

「君はナナリーの為の反逆を行ったと言つたな。それは、君の感情はどこにあつたんだい？」

「私は……常にナナリーのために役割を分けた。兄である自分、ゼロである自分。ペルソナを使い分けることによつて感情は捨てたさ。冷酷な機械になりきつて、感情という不確定要素など排除した」

「理論と理性が君を変えたんだ。そのような考えは……人間の考えじゃない。人は画面上に現れる数値じゃないんだよ」

「私にできるのはそれぐらいだったんだ。冷静に、鋭利に、狡猾に、卑怯に。利用できるものは何だつて使う。それが私の戦いだった」

「なぜ気がつかないんだ！ それでは人は変わらない、変わらないんだよ！ 君は世界の恨みを一身に浴びて、死ぬはずだった！ でも、今じゃ僕には分からないんだ！ 君がしようとしたこと、僕たちが起こしたことは、世界に余計な混乱をもたらただけじゃないか！！」

「それは追従する結果が全てだ！ 過程など、結果を成すための道程にすぎん」

「君にとつては、あれが全て道程であつて、予測の範疇にあつたというのか？」

「イレギュラーは多かった。しかし、それでも、流した血は裏切れない」

「君がその血を生み出したとしてもか？」

「だから私は墓標となる。世界の憎しみを背負つて死ぬために！！」

誰もが会話の内容を理解してはいなかっただろう。だが、誰もが理解したことがある。二人の想像もできない覚悟のことだ。過去に何があつたかは知らないが、たびたびこうしてぶつかることは容易に想像できた。

「…………ルルーシュ、いつか答えを聞かせてほしい。僕は、未だに君の親友のつもりだ。だけど、何が何だか分からないんだ。理不尽なことが多すぎて、僕の信じた道が先のない暗闇になっている気がするんだ」

「それでも我らは進むしかない。たとえその先が断頭台であろうと、希望は捨てることはできない」

「君は、君の答えは、いつも自分を犠牲にするんだね。それじゃあ、誰が君を認めるんだい？」

「知れたこと。自分自身だ」

「僕は、自分で自分を肯定できない。そこまで自分を信じることができないから」

長い激論は終わった。嵐が通り過ぎたかのごとく、店は騒然となった。二人の怒声は町中でも注目を集め、活気のあるトリスタニアはしばし、沈黙に包まれた。

人々の意識に貴族とは何なのかという項目が生まれた。貴族には少なからず、何を成すべきか模索する考えが生まれた。リツシュモンを倒したスザクはトリスタニアでしばし語られることとなった。

「お騒がせしてすみませんでした」

ようやく落ち着いたので、リツシュモンを捕縛してスカロンに謝るスザク。

スカロンは特に怒ることもなく、逆に従業員をかばったスザクに感謝しているという。自らの醜聞をリツシュモンが報告するかどうかは知らないが、魅惑の妖精亭から貴族の客足はしばらく停滞するだろう。

「スザク、あまり自分を責めるなよ。考えが違うが、私の考えが最

良ではない。お前は自分を信じた最善をめざせ」

「・・・・・・・・ああ。分かったよ、ルルーシュ」

店はもう閉まった。普段なら深夜まで経営を続けるのだが、さすがにリッシュモンが昼間に騒ぎ立てたためこれ以上は続けても無駄だと思い、スカロンが臨時休業にした。

リッシュモンは衛兵に引き渡したが、処罰されるのは騒いだ事と町中で平気に魔法を使おうとしたことを注意されるに留まるだけだ。トリステインは平民を軽視し過ぎているため、命すらもお金でやりとりされる。

「スカロン、ここで暮らすのは辛いのか？」

「・・・・・・・・辛くない、訳じゃないわ。貴族の顔を立てたら他のお客さんが遠のくし、今日みたいに女の子を庇えば生意気だと暴力を受けたこともある。でもね、私はここから逃げちゃいけないのよ。守るものがあるの。人としての譲れないプライドがあるのよ。それは、たとえば貴族が折り曲げようとしたって曲げられない道理。私の信念よ」

「守りたいものか。確かに守るものがあれば人は強くなれる。同時に弱くもなる」

「ええ。でも、手放せないもの」

「ああ。それはよく分かる。たとえば自分がどんな目にあつたとしても、本当に大切な人には生きてほしいものだからな」

「なに？ 恋人の話？」

「いや、そんなんじゃない」

少し興味がありそうにスカロンが聞くが、ルルーシュは応じない。

「そういえば、今度はゲルマニアにいくのよね？」

「ああ。そのつもりだが」

「今は止めときなさい。少しばかりごたごたしてるわよ」

「そうなのか？」

「ええ。でも、あまり他国に行くのもお勧めしないわよ？ ガリアかトリステインぐらいよ、落ち着いているのは。ゲルマニアでは貴族の小競り合いが在るし、アルビオンは戦争中だしねえ」

少しルルーシュは疑問に思った。

「アルビオンが戦争中なのか？」

「そうなのよ。お店にアルビオンの難民がよってくれて繁盛はしてるけれどね。国が二つに分かれているみたいね。現国王のジェームス一世側がかなり危険みたい」

「戦争か……………」

「あなたたち、アルビオンに行くの？ 傭兵にでも志願するのかしら？」

「傭兵ではないが、真似事ならできる。．．．．．アルビオン」

ルルーシュは考える。ゲルマニアは少し危ない。アルビオンは戦争中。一見みるだけでアルビオンの方が危ないのは目に見えている。傭兵ならばアルビオンでレコンキスタ側につき、ジエームズ一世側を駆逐するだけだ。それだけでお金が入る。

だが、レコンキスタとやらに組みする必要もない。正義の味方らしく、正しい側に味方してやろう。

「ふむ．．．．．チェスは得意な方だな。事実戦争にも参加したことはある。だが、アルビオンには何か特徴的なものでもないのか？」

「そうねえ．．．．．風石っていう、風の魔力を凝縮したマジックアイテムの鉱山がたくさんあるとは聞いたけど」

「風石か．．．．．」

いつか手に入れられると思っていたが、反政府勢力にアルビオンを独占されると風石の価格価値が跳ね上がるかも知れない。

それは困る。

ガウエインにもランスロットにも対空戦を考慮して設計しているため、風石のコアルミナス無しでは戦力になりづらいのだ。一番はじめに手に入れ、おそらく一番必要だと思っていた風石が押さえられるのはまずい。

「そうだな．．．．．よし、纏まった。ありがとうスカロン店長。私とスザクは一度アルビオンまで飛ぶ。世話になった」

「いいわよ、それぐらい。本当なら行かせたくは無いけど、私があ

なたたちを困らせるわけにはいかないわね。また困ったことがあったらいらっしやいね。可愛い子なら大歓迎よん」

「ああ、また来るかも知れない」

「生きて帰ってくるのよ」

次の日。スカロンと店の従業員に別れを告げ、飛行船のある街からニューカッスルに飛ぶ。トリスタニアから馬で五日かかったが、そこからさらに二日待つとアルビオンへ向かって船は飛んだ。

「あり得ないなんてあり得ない。それをまざまざと見せられるようだ」

ルルーシュは雲の間から見えてきたアルビオンを見上げ、素直に感想を述べた。なぜ浮いているのか、なぜ大陸並の大きさのアルビオンが空中まで浮かんではいるのか。思考すれども答えはでなかった。

「そういえばルルーシュ。魔法はどこまでできるようになったんだい？」

「難しいところだ。まだ対戦術用にまで纏まっていない。幸い、並列思考が使えるおかげで、一度に放てる魔法は29発までなのだが、威力は期待できないかもしれない」

「そうか……僕には接近戦しか手段がないから、はつきり言つて遠距離の攻撃には対処できなくて困ってるんだ。ルルーシュが後方支援をしてくれるなら助かるよ」

「一応剣を買ったが、刀か？」

「うん。これ、かなりの大業物だ。しかも、ここの国の魔法で固定化がかけられていたから錆はまだでていない」

「まあ、前の使い手の扱いが悪すぎたのか刀身と鐔が離れているがな」

目の前には金属部分と鐔の離れた刀が一振り。あまり高い値段ではなかったが、スザクに剣を買ってくれと言われて金を渡し、買ってきたのがこれだった。

「ここまで破損した剣をどうするつもりなのだ？」

「大丈夫。火炉を借りて刀身を鍛えなおしてから接合する。いい鉄だから再利用しないともったいない」

と押し切られた。そんな事を本当にできるか分らないが、スザクは何でもできそうな気がする。この男、一通りの物は平均以上の出来を納める事ができるのだ。

「最悪、風石を装備させて魔法剣にしてしまえ」

おそらく、コアルミナスと同じような内部構造の鐔を取り付け小さな風石でも取り付ければメイジの真似事でもできるかと思つた程度。うまく刀を扱えればウインドカッター並の斬撃を風に乗せて放つことも可能だろう。

事実そついうインテリジェンスソードも存在しているらしい。

「なるほど、その手があったか」

「優先順位はランスロットが先だぞ。刀は早く仕上げるのなら手伝ってやるがな」

「ありがとう、ルルーシュ」

船の上、これから戦場に行くというのにそのような重みは全くなかった。だからといって緊張しているわけではない。むしろ高揚していた。スザクは軍人でルルーシュは軍師。しばらく触れていなかった戦争に少しは思うところがある。

ハルケギニアの交わることのない双月は、二人を見下ろしていた。

それは少年の独白で（後書き）

次回はアルビオン。ルイズと鉢合わせは考えてるけど実行したくない。

ストックが切れたため、次の更新まで時間が掛かります。亀更新です。

それは一つの空中大陸で（前書き）

アルビオン編突入。

投稿してからみなさまの感想に一喜一憂。ビクビクしながら話を考えてます。

少し編集します。

それは一つの空中大陸で

白色に彩られたアルビオン。

特になんの問題もなく新天地に降り立つことができた。

普通なら地平線の向こうまで続く地面が途中からなくなり、何千メートルも離れた地面がミニチュアのように見えるだけだ。

「ここは高度が高い。あまり食物は期待しない方がいいな」

「冷害がきついのかな。育てている主食は、小麦、米など論外だろうね。できてジャガイモか」

「アルビオンは食事がクソまずいとスカロンが言っていた。調味料のないジャガイモはさすがに私も遠慮したい」

「きれいな水よりワインが安い世界だからね。貴族の子供があの年でワインを嗜むのもこういう事情があつたせいなのか」

来て早々、国の事情を次々に看破する。

確かにアルビオンは植物が育たないため、主食はジャガイモだ。

金と同価値の胡椒など当然ないし、塩も高級品にはいる。特に周辺に海がないアルビオンでは余計に高い料金がかかるだろう。

だからこそ他国との輸入が唯一の生命線なのだ。

アルビオンが他国に戦争を仕掛けられないのも、トリステインとの同盟を結びたいのも、結局どんな紆余曲折あれこの事情が含まれている。

トリステインは水の精霊の加護のおかげで作物がみずみずしく美味しい。

前国王がトリステインに婿養子として入ったのもアルビオンの食事情の改善が何番目かの理由には入っているだろう。

トリステインはアルビオンならと関税を安くし、商品を寄越してくれる。

完全に他国に依存した状態である。これでは攻められても受け身にしか回らないのもあるが、他国がどうしても取り込みたい国でもない。

空戦が得意なアルビオンを手中に収めればと考えているトリステインは先が見えていないのだ。

同盟を組むにしても国を統合するにしても、はっきり言って今までの国の運営費が二倍になる。

アルビオン側でもある程度の統治があるが、自国を保てるだけの力がない。

今ではトリステイン以外にもガリア、ロマリアからも空輸を頼っている現状だ。

国が割れるのも当然かも知れない。

限られた資源しかないこのアルビオンでは、今の制度体制では国が取り込まれるのに時間はかからないだろう。

「さて、馬を借りてとばすぞ。今日はサウスゴータ地方までだ」

「そこで宿を取ってからニューカッスル城へ行くんだね？ 戦争に参加するために」

「ああ。風石でこの戦争は勝利できる。敗戦の気配を感じ取った王は失う物しかないからな。私の戯れ言に飛びつくだろう」

「あくどいな」

「夢を見せてやっているだけだ」

馬はトリステインで買った。

移動にしか使っていないため、それもあるが、不衛生な環境で育てられているため馬刺にもできない。

食べるなら食べるで水魔法での浄化が必要になるが、それについてはルルーシュがいれば何とかなった。

「ちょっと待ってくれ」

スザクが馬の上からルルーシュに声をかける。

馬を引き返し、スザクの馬へと近づくと、なにやら森の方向を睨

んでいた。

「どうかしたのか？」

「・・・・・・・・あの森、何かいるんだ」

「森？」

確かに視線の先には森と形容しても大差ないものがある。

アルビオンという土地にたつせいか、地上ではまず見られない生態系の変化により、木々も少々変わっていた。

高度の高いところにあるから木々は育たないと思っていたが、逆だった。

むしろ太陽に近づくため、アルビオンは常に気温差が激しくなる。

昼は地上と比べ六 ほど温度が違うし、夜は急激に気温が下がる。空中を漂うため、季節など無いようなものだが、アルビオンを訪れた旅客は、この温度変化に戸惑い長居はできないらしい。

うつそつと茂る森。昼前とはいえ、不気味な気配を漂わせていた。

「・・・・・・・・オーク鬼がいる」

「確か、兵士五人でも倒せない強力な魔物だったな。集団で動く社会性はあるが言葉を話すほどの知性はない」

「僕とルルーシュなら、倒せる」

「しかし、わざわざ倒していく必要があるのか」

「僕たちがここで倒さなかったら、この後人が死ぬかもしれないじゃないか。放つてはおけないよ」

頑固に森に向かうスザクを追って、ルルーシュも渋々ついていく。

森の中は雑木林が生えていて間引きもされていないため馬は置いていくことになった。

スザクはヴィンダールブになったせいか、普段聞こえないような高音波や低周波を感じ取れるらしい。おそらく動物を操れるヴィンダールヴが変質したものかもしれない。

もともとのスザクにはギアスがかかっている状態だった。こちらで言うギアスは水のスクエア……高度な呪文らしい。

しかし、水の魔法は人体と密接に関わっていて、ルルーシュのギアスは体に何らかの進化をもたらしたのかもしれない。

場に適応するように、ギアスに影響を受けるかのようにルーンが変質した。

まさに『生きる』ために必要な危機察知能力が格段によくなっているのだ。こうなるとガンダールヴのルーンもなにかしら影響を受けているというのが妥当だろう。

「……………これは……………っ!」

森の先では確かにオーク鬼がいた。醜隈に歪んだ口元からは涎が垂れていた。オーク鬼の目線の先には、竜の子供がいた。羽が傷つき、皮膜も傷つけられ離脱をしたくてもできない。

目の前に迫る害悪に対して感じることはひとつだけだった。

圧倒的な恐怖だ。

「スザク、どうする？　オーク鬼単体なら倒せるが、数の暴力はきついぞ」

「僕の耳は、あの竜の声が聞こえるんだ」

「なら、助けるしかないだろう。私たちは常に、弱者を守ってきた」

ちょうどいいとばかりにルルーシュは笑う。

未だに満足のいく魔法行使を行えたことがないルルーシュにとって、早さとはかく大きいだけの的であるオーク鬼に、自分の魔法が効くのかどうか試したかった。

ハルケギニアの人間ではないルルーシュにとって魔法とは粘土のようなもの。

メイジにもエルフにも使えない、彼自身の魔法。

銃弾を装填する。

撃鉄を引き、トリガーに指を添える。

イメージはリボルバー銃。魔法は銃弾だ。

「クツクツク、私の魔法は優しくないぞ？」

悪魔がオーク鬼の首に鎌器を押し当てる。

最初、まるで元からそうであつたかのように、オーク鬼の胴体が二つに切れた。

次に、まるで狙つたかのように地面を走る炎がオーク鬼の肉を焼いた。

さらに、まるで自然現象の真似事みたいに地面が割れた。

最後に、まるで悪役のように高らかに笑う男が地割れに風魔法を放った。

その姿に、おそれを抱くのは当然かもしれない。

竜は未だに子供なのだ。例え300年以上の時を過ごしたとはいえ、知識はあつても経験は無かつた。

オーク鬼に対して明らかにオーバーキルを放つ平民風の男。

来ているものは質素だし、杖を持っているわけでもない。

ただ、彼の周りを楽しそうに精霊が回っていた。

「水はすごいの」

「火はあつい」

「土はかたい」

「風はめぐる」

普段なら聞こえない、精霊の声。

竜でもエルフでも使役できない、大量の精霊。

水も火も土も風も、彼の周りを巡り、踊るかのように力を貸していた。

水は圧縮され強靱な皮膚を持つオーク鬼を切り裂いた。

裂傷の断面がオーク鬼の骨まで切り結んだことを如実に物語る。

炎はそれ自体に意志があるかのごとく、地面を滑走する度に威力を上げ、オーク鬼を纖滅した。

土は地割れを起こし、風は大きな穿孔機となって肉を四散させる。

圧倒的な暴力。

しかし、竜である彼らには怖さは感じるもののルルーシュと追従するスザクからは温かいものを感じていた。

スザクからは、この人の為なら背に乘せて大空を羽ばたきたいというカリスマと憧れを。

ルルーシュからはまるで親に抱き抱えられたような安心感を感じた。

竜は理屈ではなく、感情で理解した。

この人間はただの人間ではないと。30匹近くのオーク鬼を倒す二人を見ながら今更ながらに思った。

血だらけの戦場。

立っているのは二人だけだった。

いまだ名前も知らない人間。

しかし、圧倒的な力を保有する人間。

「ミュルル……」

最早戦いとも呼べない虐殺にて、竜は生きながられた。

それは一つの空中大陸で（後書き）

スザク、竜を助ける。

彼らは常に弱者の味方です。

それは機械の構想で（前書き）

課題とレポートに忙殺されそうです。

まだ大学一年生なのに……。

編集です。

それは機械の構想で

「スザク、まずは私が動きを止める。だが、その前に、『鍊金』！
ルルーシュの足下から鉾石がめくり上がり形を削っていく。

スザクがかつて手にしていた実用性皆無の黄金剣と違い、純度90%以上のモース硬度7度のクォーツを鋭利に鍊金されていく。

黄金のモース硬度は2。

傷が付きやすい鉾石なのだ。

輝きならダイヤモンドとタメをはれるが。

ルイズが価値もわからずガラス玉と称したのは、このクォーツの原石だ。

磨かれる前なので輝きは発さないが、アメジストの中でも酸化鉄を多分に含んだ赤水晶の固まりを黄金剣の骨組みにし、強度を嵩ました。

ディテクトマジックでも使えればもっと値段が跳ね上がっていただろうが、今となってはどうでもいい。

さらに表面に接触すると火花がでる火打石、メノウを生成し加工する。

金属のように堅いオーク鬼。

打ち合うことに火花があがり、追加でダメージを与えてくれるだろう。

精霊魔法を扱う際、精神力はあまり減らなかった。

それこそ、難しいクォーツの錬金をたやすく行えてしまう程度には。

「いくぞ、まずは戦陣をきらせてもらおう！ 『水流を圧縮、袈裟切りでたたき込め』」

ルルーシュはハルケギニアでの詠唱を知らない。

ルーン文字を用いた魔法行使なのだが、精霊に直接命令した方が威力が上がるのだ。

ルルーシュの言葉を理解した精霊が水を生成し圧縮しようとする。空気中の水素が連結し、大きな水の塊と化した。

「やれ」

ルルーシュの言葉に精霊は飛んでいく。

オーク鬼をたやすく両断した水は、勢いが途切れることなく木々をなぎ倒す。

垂直に引かれた直線が、切られた物体を分離させる。

簡単なウォーターカッターが思い起こされる。

鉄ですら両断できる水のチェーンソウ。
一体のオーク鬼の胸を割り、血しぶきが水に紛れて辺りに散らばる。

「水は流動性に富む、となれば、形の形状を整えれば万物の兵器になる」

水はあって無いものだ。そこに『有る』のだけれど感触はほぼ『無い』。

空気中に霧散してそこに『有る』ものだが、人間の認識はそこまですぐしく読みとらない。

だが、水は原子の加速で火に追従する破壊をもたらす。

圧縮することで風よりも鋭くなる。

泥を纏えばそれは土と同じ硬度にも至れる。

「次は火だな。『錬金』さあ、燃やせ」

地面の土がルルーシュの錬金によりガソリンに変わる。

オーク鬼と竜をちょうど分ける形でガソリンが延び、そこに火の精霊を着火させる。

オーク鬼は地面を走るかのように迫る火に声を上げながら逃げる。だが、ガソリンの上を走る火に追いつかれ、次々に絶命を余儀なくされる。

「火は戦闘向けだが被害が大きい。対人というより対軍よりの魔法だな。拡散しても威力は変わらないが、味方がいる戦場では逆に足手まといだな」

冷静に分析を始める。

目の前の災禍はデータであり、これから先対人に使う予定が有るかもしれない戦力。

自分から戦力を分析しないというのは弾を込めずに打つ銃のようなものであり、打てたとしても打てなかったとしても無駄玉に終わるのは目に見えている。

ルルーシュの頭では火はあまり使えないが、水は使えそうだと判断した。

無形の武器で威力も他の魔法にも劣らない。

どこでも生成でき、使い方次第ではナイトメアフレーム内でも扱うことができる。

というのも土をのぞく他の魔法は、媒介が杖からでた先で精神力が精霊に作用して魔法となるものが多い。

杖の先からでしか効果を現さないなどあまり有用性が無い。

初めて見たルイズの爆発魔法。

あれは実をいうと羨ましかった。

制御さえできれば、どこでも爆発させることができる。

牽制、破壊、殺害、威嚇、射程。どれをとっても一級品の魔法だった。

「無い物ねだりしても仕方ないがな」

「どうかしたのかい？」

「いや、少しな。それよりスザク、行けるか？ 土魔法と風魔法でサポートしてやる。だから、死ぬなよ」

「僕は死ねないだろう？ でも、そうだね。死なない程度に頑張ってみるよ」

軽口を叩きながらもスザクは顔を引き締めた。
大きく深呼吸し、オーク鬼の元へと向かう。

もうすでに8体ものオーク鬼は死体へと変わっている。

スザクは一体つつ相手をし、クオーツの剣から火花を散らせた。

ガンダールヴのルーンもそうそうバカにできない力を発していた。

普段のスザクなら金属同士が触れあうような重い剣戟には長期的な戦闘はできなかった。

ナイトオブワンとの剣術勝負も受け流しを主軸にして隙を撃つ戦いしかできなかった。

それが、最適な剣の使い方を教えてくれる。

未来予知に近い直感を得た。

ビスマルクのような未来視のギアスではない。

視線に移るオーク鬼の姿はブレないし、逆に余計はつきりと写ってしまっている程だ。

だというのに相手の動きを解析し、寸分の狂い無く迎撃できた。

どこを撃てばいいのか、どこが弱点足り得るのか。

頭の中に演算処理に優れたスーパーコンピューターでも内蔵されていると言われてもおかしくないほどに、スザクの動きは洗練されていた。

無駄がないのではなく、無駄にならない攻撃しかない。

一合二合と剣をあわせ、三合目でオーク鬼の棍棒が折れた。

『ブフヒヒヒヒっ！』

豚のような鳴き声が辺りに響き、前後左右を囲まれる。

棍棒を持ったオーク鬼は三匹。

うち一体はルルーシュの火の魔法で皮膚が焼き爛れていた。

一步、二歩。三步で駆け出した。

後ろからはルルーシュが何かしたのか、大きな谷が形成されている。

谷に入らないように駆け、逆にオーク鬼を翻弄しながら包囲網を抜ける。

目線の先には竜に一番近い場所にいる一際大きいオーク鬼。どうやら群をなしている長らしい。

「殺生は好まないが、それは平和な時世での話だ。だから、ごめんよ。僕は君を殺すしかない」

ガンダールヴは神の盾。一千の敵を葬ることができるという。

スザクの深い色の双鉾はオーク鬼を見据えたまま剣を構え、オーク鬼も己が障害を排除すべく斧を掲げた。

斧には動物のものではない血が付着していて、赤黒くヌラヌラと光を照り返していた。

それは間違いなく、人の血だった。

鉄製の斧は振りかぶっただけで微かではあるが迅風を引き起こす。

土を巻き上げながら斧を振るうおかげで、土がまるで弾丸の様にスザクに迫る。

知能は低いと言うことだが、このオーク鬼は少し違うようだ。

経験から知識を作り上げたのだろう。

地割れが収まり、他のオーク鬼はルルーシュの魔法で捕まっている。

谷となった地面からオーク鬼の声が響き、特有の鉄臭いにおいが漏れだしていた。

足場が安定したことでオーク鬼は大木のように地面に足を張り、構える。

足を据えたことで力を溜め、でたらめな剣筋で振りかぶってきた。

「……………そこだ!!」

斧が、鉄が、凶器が降る中、一瞬の隙間に体をねじ込み、オーク鬼の懐に入り込む。

さすがにこれにはオーク鬼も驚いたようで、斧を降る手が少しゆるみ防御に回そうと身構えようとする。

しかし、それよりも早くスザクのクォーツの剣がオーク鬼の胸に吸い込まれるように入っていた。

耳をつんざくような悲鳴が聞こえ、断続的な息切れが続き、その後何も聞こえなくなった。

オーク鬼の心臓を正確に貫き——どうやら肺も巻き込んだらしいが——絶命を確認した。

「すべてを巻き込め。『風よ回れ』」

ルルーシュは谷のオーク鬼を風魔法で殺していた。

硬い皮膚を引き裂くほどの強力な魔法行使。

ミキサーの中身が谷の中で散乱していた。

腕や足、顔。

パーツはオーク鬼だが、どれも正確な形を為してはいない。

「これぐらいだな。『鍊金』」

谷を完全に元に戻し、臭いの元を埋め立てる。

先ほどまでの戦闘の痕跡は、スザクが倒した巨大なオーク鬼の死体と森に燃え移ったルルーシュの火魔法の名残だけだ。

「魔法は、使えるな」

「どこがドットレベルなんだい？」

「使っているものはすべてドットレベルだ。それを29回つつ放ったがな」

水のチェーンソウは水を操るドットスペルと回転をかける魔法とレビテーションの改良魔法を使っている。

これだけであり得ないトライアングルスペル並の力を有しているが、一度に使えないためルルーシュはドットだと判断した。

他も同じだ。精霊の力を多分に使っていたため、精霊魔法はメイジが使う魔法よりは強力だったのだろうと勝手に結論づけた。

ルルーシュは知らない。

スザクと同じように自分もルーンの変質が有ったことに。

ルルーシュのギアスは絶対遵守。

相手に命令を与えることでその通りに従わせるもの。

それは、果たして人間に限ったことではない。

精霊はルルーシュのギアスの影響を少なからず受けていた。

カラーコンタクトの下では常時発動するギアスが精神力に影響し、精霊の使役に役立っている。

エルフであろうともここまで精霊を使うことはできない。

「ここまで来て無視するわけにはいかないか」

竜は傷ついた体を寄せながらもこちらをじっと見つめている。

威圧や威嚇をしてこないだけ、まだ理性的に物事を理解できるよ
うだが油断はできない。

最強の幻想種たる竜を相手にできるなどとルルーシュたちは考えていない。

難儀なものだ。ルルーシュは内面でため息をつきたくなった。

スザクもルルーシュも訳が分からなかった。

竜はじつとこちらを見据えるだけだったのでルルーシュが傷を癒し、その場を後にした。

スザクはクォーツをオーク鬼の墓として突き刺したため、今は丸腰だ。

まあ、倫理観をかなぐり捨てたとしても子供の竜（約300歳）を乱暴なオーク鬼（40年も生きていない）から助けられたのだからいいでしょう。

森からでて野営の準備に入る。

アルビオンで動き回するにはオーク鬼との戦闘が祟ったようだ。

スザクは引き締まった体をしているが、それでもオーク鬼との撃ち合いで筋肉が疲労していた。

下手に魔法で直すと限界成長やら免疫機能の低下が起こるだろう。安易な治療は避けた。

そして遙か後方から二人をスニーキングしている竜がいた。

先ほどルルーシュたちに助けられた竜である。しかし追い付くことはなく離れることもない。

行動はスザクによってとづくに察知され、寝込みに食われるんじゃないかと警戒している。

「どうにかならないか？」

「………できない、と思う。鳴き声しか聞こえないから僕にはなんとも」

聞こえているが竜の言葉。真意を察することもできない。

「まあ、いいか。襲うなら対処すればいいだけのこと。それよりも帰還する方法と今後の見解だ」

「分かった。今はそちらの考えに集中する」

推論と憶測しか無いが、限りなく現実的に考える。

ルルーシュたちはこの世界で貴族制を垣間見た。

そのことから魔法を使える貴族はギアスを使わない限りは扱えない。

エルフもかりだ。

第一どこにいるのか情報が分からない。

魅惑の妖精亭で無理矢理聞き出した情報の中では聖地にいるとは言わなかった。

あとは汚職のあとや恨み辛みが出てきた。

そしてコモンスペルであるサモンサーヴァントは送還の呪文が無いことの言質も取れてしまった。

アカデミーの女性から聞きだした話ではサモンサーヴァントは規則性ではなく偶発性や感覚に左右されるという。

研究はどこから召還されるか、または何が召還されるかというよりもむしろ規則を見いだして目的の使い魔を呼び出すことに主軸がおかれている。

オスマン学院長の言うとおり、送還を試みた貴族がいないと言うことはそもそも送還魔法が無いことの裏付けとなる。

「つまり、俺たちが元の世界に帰るには小娘に召還されたのと同じくらいのイレギュラーでなくては無理だ。世界の壁を越える魔法・・・今考えれば果てしなくバカらしい。理解に苦しむな。そんな魔法、唱えられる奴の方がおかしい」

「あの子と同じデタラメを可能にできるほどの魔法使いか」

八方ふさがりだ。

希望を捨てた訳じゃないが、可能性などゼロに近い。

「．．．．．それと、あまり考えたくはなかったが、その女性からこのルーンについても聞いた」

「察するにあまり話にあげたくない内容かな」

神の盾・ガンダールヴ。

神の笛・ヴィンダールヴ。

神の本・ミヨズニトニルン。

そして記すことさえはばかられる使い魔。

かつてブリミル教の発端となった魔法使い、ブリミルが使役したのがこのルーンを持つ使い魔だった。

「盾、笛、本。要するに手があり口があり一定の知能を持つ者がブリミルの使い魔だった訳だ。ルーンの力は補助的なものとみていいだろう」

「それを扱える者が4人」

「つまりは人間であつた可能性は高い」

ルルーシュたちは自分のルーンを見る。

超人的な能力を保有できるルーン。

考えてみれば、かなりレアな部類に入るのではないか。

「そしてアルビオン、トリステイン、ロマリア、ガリアにはブリミルの弟子が建国している。ブリミルの魔法は失われたペンタゴンの一角と呼ばれ、虚無魔法とも呼ばれている。詳細は知らなかったようだが、小娘はトリステインの虚無であると見ていい。俺たちが呼び出され、実質ルーンはブリミルの物と一致している」

「それじゃあ、手がかりになりそうなものはほぼ無いのか……」

「……いや、一つはある」

ルルーシュは考えていた。

虚無の担い手は、全員が全員ルイズのようなデタラメな召還が行えると仮定してみる。

一般の魔法使いでは人間の召還は不可能。

4つの国に虚無の魔法。

4つの使い魔。

虚無魔法は正しい記述が残っており、詳細も不明だが。

そもそもが、あの召還こそが虚無の魔法だったのだとすれば。

あり得ない魔法行使。

あり得ない魔法効率。

あり得ない物質変換。

このハルケギニアにあふれる理不尽な魔法の大本はブリミルだ。

世界を越える召還魔法の発明も彼が先駆者だとする。

彼は魔法を扱う才能があったのか、作る才能があったのかはどうでもいい。

だが、そこまでの理不尽な輩が、自分の失敗をそのまま残しておくなどあり得ないのだ。

天才は凡人に恐怖する。故に完璧を求めて天才となる。

その完璧主義者な、ましてや系統魔法などと魔法の整理を行って貴族制の金字塔となり、6000年もの間信仰されている人物であるならば。

必ず存在しているはずなのだ。世界を渡る魔法というものが。

「じゃあ、僕たちが探さなければならないのは」

「虚無の担い手たちだ。つまり、人間を使い魔にしている奴ら。彼らならば、私たちの推測を覆す何か、もしくは肯定できる情報を所持しているといっても過言ではない」

「そしてアルビオンにもその使い手がいる………というわけだね」

「ああ。そして虚無もおそらく系統魔法と同じように詠唱が多岐にわたっているだろう。小娘の爆発魔法はそこから漏れたものである線が強い」

目的は決まった。

虚無の担い手を捜し、世界を渡る術がないか聞き出す。

これが最短のルート。

「だが、私たちの身分は限りなく平民に近い。ゲルマニアで貴族をする予定だったのは国の中枢に入り込んで情報を得るためだったが、アルビオンでもう事足りる。ましてやゲルマニアに虚無はいない」

「そうか。確かに成り上がりの国だったね」

「荷担するならアルビオンの方がいいと言うわけだ。もちろんジェームス一世陛下にな」

「レコンキスタに国勢を握られると、自由に動けなくなるからね」

「窮地を救った恩人でもなければ、貴族は味方にできないからな。ギアスでジェームス一世を操ったとしても部下は納得しないだろう」

「だからこそ負け戦で自分たちの力を見せつけられ」

「名実ともにアルビオンは我らを迎えてくれるだろう」

アルビオンの軍門に入ることはそもそもメリットはある。

一年を通して空を回るアルビオンから他国へ渡るには容易なのだ。

ジェームス一世にはルルーシュが有能であれば外交に使うだろう。

護衛としてスザクをもらえば、晴れて調査の名目で虚無探しを堂々で行える。

「さて、そこで私たちの駒として作るナイトメアフレームだが・・・
・・・構想はすでにあるのだ」

ルルーシュはラクシャータからガウエインの基本設定を書いた紙をもらって暗記していたし、諜報部員からランスロットに使われている技術はほぼ分かっていた。

だがラクシャータがロイド伯爵の技術を使うことに嫌悪感を表し

ていたし、性能特化のランスロットはパイロットの安全を度外視している。

カレンならいけたかもしれないが専用機があったし、藤堂でもランスロットの柔軟な行動性は会得できなかった。

「ランスロットの方はランスロット・アルビオンのエナジーウイングを搭載する。高機動型だ。サクラダイト合金繊維は作るが、さすがにロイド伯爵のようにはいかないと思ってくれ。ブレイズルミナス、ヴァリス、スラッシュハーケンも搭載させる」

「…………それはありがたいけど、どうやって作るんだい？」

「錬金と魔法で作り上げ、サクラダイトの代わりには風石を利用する」

「魔法って便利だね」

もちろんルルーシュ一人で作るには限界がある。
そこは時間をかければ何とかクリアできるが。

「そして私の専用機のカウエインだが、スザクのランスロットとは正反対だ。ドルイドシステムとハドロン砲。少しばかり蜃気楼の武装も利用するが、コンセプトは変わらない。絶対防御、ピンポイントバリア、高威力広範囲組織滅武装。ランスロットが戦場を駆け巡り、カウエインが本拠地の防御と遠距離からの砲撃を行う」

「なぜ蜃気楼をそのまま使わないんだい？」

「…………脱出用の装置が取り付けられないのだ。最悪蜃気楼

を棺桶代わりに使わねばならないかもしれない。だがそれでは私たちの負けだ。スザク、覚えておいてほしい。今回は相手に破壊される訳にはいかないが、万が一破壊された場合サクラライト合金の存在を解析されるわけにはいかない」

「まさか………自爆装置をつけるのか？」

「だからこそ脱出できない屋気楼はパスした」

特にガリアやゲルマニアに知られば模倣ナイトメアフレームが出現するかもしれない。その万が一が身を滅ぼすのだ。

「アルビオン、ニューカッスル城で風石などを貰い受けた後は制作に取りかかるぞ。いつ戦争が始まってもおかしくない。ランスロットとガウエインには新しい名前を付ける」

「新しい名前？」

「ランスロット・エクルベイジュとガウエイン・スレートグレイだ」

「エクルベイジュ………薄い赤混じりの灰色か」

「スレートグレイ………暗い灰色だ。我らの誓いは固いが、ここでは純白でも漆黒でもいられない。なにせ、どう言っても余所者だからな。ここでは正しくあるうなんてことはできない。むしろ私たちが争いの種となる」

「でも、それでも僕たちにはなすべきことがある」

「ああ。その通りだ」

いつの間にかたき火は消えていた。新しい薪に火をつけ、光を灯す。

「今日はもう寝ろ。3時間づつ交代で休眠だ」

「わかった。僕は先に寝てもいいかい？」

「ああ。そうしろ。何かあれば起こす」

それは機械の構想で（後書き）

詳しいことは受け流してください。

バリバリの文系に理数系の知識など期待してはいけません。

それは彼らの最愛で（前書き）

ニューカッスル城かハヴィランド宮殿か分らん。

ニューカッスルで統一します。

それは彼らの最愛で

スザクは微睡みの中でユーフェミアを見た気がした。

目に涙を浮かべ、スザクの手を握って必死に涙を浮かべていた。

これ以上罪を重ねるなと彼女はスザクを押し止めるように。

何度も何度も。

しかし、それでも止めるわけにはいかない。

罪を背負うことは慣れている。

あちらの世界で枢木スザクはもう社会的には死んでいる。

だが、ゼロという後がまの席がスザクを待っていた。

親友が死んでも残す平和の使者の道。

自分たちの世界を平和にするためにハルケギニアに戦争を起こす。

まるで資本論、経済論の分野の話だった。

自国を富ませるには他国から筆りとればいい。

戦争で反抗するきさえ起こさずに、徹底的にだ。

自国は富めば平和になり、侵略された国は貧しい生活を余儀なくされる。

幸せという物質は限界量が決まっていて、世界はそれを取り合っているんだ。

だから平和のために争いは絶えない。

天秤が片方に傾くとき、もう片方には幸せという物質はない。

誰もが幸せを求め、争いを行うという矛盾。

それは、なんて悲しい世界だろうか。

ルルーシュたちから離れたところで観察している竜は、取りあえずお礼として風石、火石、水石、土石を持っていけばいいと考えついていた。精霊魔法、先住魔法を扱う種族には作り方が知られている。

韻竜でないため発声器官がついていないが、それでも人間の言葉は精霊を介して理解できる。

ルルーシュは精霊を多分に扱っているので、精霊を呼んで聞いてみたのだ。

「魔力石がほしいの」

「風石なの」

「いっぱい必要なの」

取りあえず、魔力の宿った石を持っていけば恩返しになると踏んだ。

「ミュル……………」

石を探すために大空を滑空する。よくも悪くもまだ子供の幼竜。

しかし、問答無用でお礼がしたい相手がいる。

大いなる意志を受け継いだ人間。

ルルーシュのことだ。

言わずとした精霊王が、竜の幼竜である自分を助けたのだ。

竜は空に散っていく。

石を求めて。

「……………、居なくなっただか。まあ、竜がいたから狼などが襲ってこなくて助かったというべきか」

ルルーシュは魔法で強化した目で幼竜の立ち去った後を見送った。

警戒レベルを下げ、地面に腰を下ろしてため息をつく。

スザクが寝ているからこそ、漏れたため息。

「私は、何をなして何がしたかったのか。ただ、妹の……。ナナリーの安全を考えて行動したはずだ」

ルルーシュにはあるまじき弱音を吐く。

誰もそばにいないという事実が彼を安心させたのかもしれない。

原初の思いは肯定されるべき純粋な思いだった。

それが、国を相手取り、組織を作り、反逆したことで汚されていた。

二人で安全に暮らすことが夢だった。

V・Vが母を殺し、全ての貴族に疑心暗になった。

その母ですら、シャルル・ジ・ブリタニアと結託し、ルルーシュを捨てたのだ。

真意など今更聞きたくはない。

「結局、私の行動には矛盾しかなかった。ナナリーの幸せを守るために戦争を起こしたことも、母を殺した相手を捜すために兄弟を殺したのも、日本人を結託させるために平和を願っていたユーフェミアを殺したのも」

そうしなければならなかった訳じゃない。

それが一番効率的で、簡単で、単純な事だった。

危険だから相手を殺す。

利害が食い違ったから切り捨てる。

事故であつたとか、望んだことではなかったとしても、それは結果に帰依する。

スザクはルルーシュに言った。

機械じみた行動では人は変わらないと。

「確かに、その通りだった」

ナナリーは最後まで自らを貫き通した。

ゼロという仮面で自身を偽り続けたルルーシュと違って。

優しいからこそその無力だと、自身が守らねばならぬと信じていた。

しかし、ナナリーには確固たる意志があり、優しいからこそ強かった。

ダモクレスでナナリーが涙を流しながらルルーシュを非難したことは、今でもルルーシュを苦しめる。

守ると誓った。

妹だけは。

争いに巻き込むわけにはいかなかった。

なぜならナナリーは、他人の痛みを感じてしまうほど優しい女の子だったから。

「王の力は人を孤独にする。C・Cの言った通りだな。私にはもう味方はいない」

どんなに理解されなくても進むしかなかった。

後退など今更できるわけがなかった。

それは、あまりにも、死んでいった者に対して不誠実極まりなかったから。

もう今更後には引けない。

前を向いて生きるしかない。

ルルーシュがどんなに心中を吐露したところで意味はないのだ。

だからこの思いは棺桶の中まで持っていく。

土の中で、冷たい土の中で永遠の孤独にも耐えてやろう。

私の存在が世界に影響した全ての悪意を持っていこう。

そこには誰もいてはいけない。

優しい世界に、残酷な王が居てはいけない。

死者は黙しているしかない。

だからこそその平和。

罪悪全てを背負うことに対する、正当な報酬。

世界が、ほんの少しでも他人に優しくなれるナナリーが望んだ理想の世界。

それが壊されようと言うなら、ルルーシュは再び反逆する。

何度でも、何度でも。

たとえ自身が朽ち果てようとも、思いだけは譲れない。

だから、もとの世界に戻るしかない。

「ならば、私は反逆しよう。ハルケギニアで、自らの意志の元で」

ルルーシュは気付かない、気付きたくない。

ナナリーが望んだもの。

ナナリーが愛したもの。

その中にルルーシュとともに平和を謳歌するナナリーの姿。

そんなのは夢見てはいけない。

ほんの少し他人に優しくなれる世界の代償は、ナナリーが一番守りたかった兄という存在を殺す。

矛盾が生じるからだ。

平和にテロリストは必要ない。

テロリズムに和平など必要ない。

常に相反する事柄。

世界はどこまでいっても残酷で。

だけれど、誰に対しても平等で。

ルルーシュの内面など知ったことかとばかりに時間だけが過ぎていく。

明日が欲しかった。

希望が生まれる明日が。

だが、その明日に、ルルーシュは存在しない。

それは彼らの最愛で（後書き）

ユフィは夢の中で。ナナリーは思い出の中で登場。

会話すらない。

それは国王の謁見で（前書き）

アルビオン。白の国。ラピユタ。

それは国王の謁見で

アルビオンに到着して早7日たった。

地上3000メートルの空の孤島。

ロサイスからサウスゴータを經由し、首都であるロンディニウムに着いた。

戦争はすでに始まっている。

避難民はおそらく戦場になるであろうロンディニウムから我先に逃げ出している。

街を巡回しているのはアルビオンの兵と、残った民だけだ。

ただ、やはり旗色が悪いのか元氣は無いように見える。

やはりというべきか何というか、ルルーシュは王の人望のなさに愕然とした。

「やはり弟を殺したことが原因だな。それも理由も明かさず一方的に」

「民衆は独裁には着いていけないからね。王たる資格が欠如しているのかは知らないけど、それはあまり褒められた一手じゃない」

「モード太閤は人望の塊のような男だったらしいからな」

「それを肅正し殺したとあつては、次は自分かも知れないと言う危機感が募る。レコンキスタにアルビオンの貴族が参加したのはおそらくそれが原因だろうね」

王は国の象徴だ。

それが乱心したとあつては着いていきたがる貴族など少ない。

負けるべくして負ける戦争だった。

「さて、ニューカッスル城へ行くぞ。用件は志願だからな。試されることはあつても断ることは無いだろう」

王宮の中はトリステインなどとは一切違う質素なものだった。

民衆を逃がしたことで戦争で負けることは想像できているらしい。

続ける気なら武器の生産に民衆を投下する。

愚王とは行つても無能ではないようだ。

「さて、それで朕に会いに来た変わり者の平民とは貴様たちか？」

憔悴しきつた顔でジェームズ一世は声を出した。

敗戦の王は、どうやら自分たちが戦争に加わる事は好かないらし

い。

「どうせ死ぬのだ。ならば少しでも被害を出さないようするのが朕の役目。本当なら朕以外を国から追いだしてもよかったが、臣下は変わり者が多くてな。朕とともに討ち死にを覚悟している」

少し残念そうに、だが、少し誇らしそうにジェームズ一世は笑った。

この男はおそらく、王には向いていない。

ブリタニア第一皇子だったオデュッセウス・ウ・ブリタニアと被るのだ。

温厚で特殊な能力は無い、凡庸と表してもいい人物。

しかし、人を引っ張る才能は皆無だとしても部下に恵まれている。

オデュッセウスもシュナイゼルの画策で中華連邦の政略結婚に駆り出されていた。

そして利用され、ルルーシュのギアスで兵卒となり、国を追われた。

その後フレイヤ弾頭に巻き込まれ悲運の最期を遂げる。

ジェームス一世は立場も、気位も、性格も。

恐ろしいまでに情けないオデュッセウスと被っている。

「それで、単刀直入に聞こう。なぜ兵に志願などした？　よほどのバカでも朕が敗戦の王だというのは伝わっておる。悪いことは言わない。早く国をでるのだ。レコンキスタと争って死ぬなど、無駄死にでしかない」

「殿下。私は殿下の耳に入れなければならない情報がございます。よろしいですか？」

「……………よい、許す。申してみよ」

「では。私とこの者、スザクがいれば、レコンキスタなど灰塵の元とさらしましよう。それも、勝負は数日のうちに終わります」

「どんな妄言を吐くかと思えば、バカを言うな。平民風情が何ができる。相手はメイジが何千何万と存在するのだぞ。不愉快だ。去れ、愚か者よ。朕は敗戦の王とはいえ、道化になる気はない」

「私たちが、ブリミルの残した使い魔だとしてもですか？」

「……………何だと？」

ルルーシュたちは自分たちの有能性を見せつけるため。

始めに相手を激昂させた。

その上で冷や水をかぶせ、信憑性のある話を持ち上げて理解を得る。

「かつてほどのアルビオンの窮地が訪れた事はないでしょう。それは始祖すら予想だにしない出来事です。レコンキスタと呼ばれる

愚の輩はアルビオンを統治した後他国に攻めいるでしょう」

「バカな……………奴らは聖地の奪還が目的のはずでは……………」

「それは表向きでしょう。兵の食料、富、欲望。それら全てを叶えるには圧倒的な金銭が必要となります。財政を押してまで戦うアルビオンにその財力が存在しないとなれば、レコンキスタは他国に攻めいり暴虐の限りを尽くすでしょう」

「それは……………」

否定は出来ない。

想像に難くない。

王なら知っているべき常識だ。

人は自分に有益な者にしか取り入ろうとはしない。

王の為といい、危険な戦地に赴くのも裏では自分の名誉と恩賞が目当ての貴族もいる。

「さらに言えば、彼らはアルビオンの名を語り、利用する心算もあると思われます。それはアルビオンの国において避けなければならぬ出来事ではないですか？」

ジェームズ一世には息子がいる。

若く聡明だがまだ子供だ。

その子供に重責を向かわせる事は親としても王としても避けたいはず。

場が沈黙に支配される。

「……………朕に言ったな。レコンキスタを倒せるだけの力がある」と

「ええ。私たちは始祖の使い魔としてアルビオンの脅威を取り除く義務があります。盾と笛と本に誓って」

「ガンダールヴ、ヴィンダールヴ、ミヨズニトニルンか……………たしかに一平民ではブリミルの歌は知らないであろう」

「私たちが信じてもらえるので？」

「いや、朕はまだ信じた訳ではない。ただ、反旗を翻せる手があるなら是非とも欲しいと言っただけだ」

「そうですか。なら具体的な方法をお教えします」

ルルーシュはあくまで自衛の手段としてナイトメアフレームの製造を許可させるべく説明を開始した。

ジエームズ一世は魔法で作るとはいえ、巨大なゴーレムを扱うことにあまり積極的では無かった。

ここは風の国アルビオン。

土との総和性は低いのだ。

「人型の高性能高機動のゴーレムか。確かにそれならばレコンキスタの船を落とせるかもしれん。風石を巨大なエネルギー発生装置に見立て、ゴーレムに埋め込むなどどんな高名なメイジだとしても行わなかったであろう」

だからこそ効果は未知数。

すでに戦争は始まっている最中、飛行船を飛ばす風石を消費して
いられるかというのが正直な感想だった。

ナイトメアフレームというゴーレムに用いるというサクラダイト
とやらもジェームズ一世には理解できない。

正直な話。これは得策ではない気がした。

「残念ながらお断りする。朕はそんなことに風石を差し出した
くはない」

明確な拒絶。

ルルーシュは相手を読み間違えたと今更ながらに後悔する。

オデュッセウスは言葉に流されるままの自らが確立していない皇
子だった。

しかし、いくら彼とジェームズ一世が内面的に似ているとはいえ、
同じではないのだ。

そこは王になれなかったオデュッセウスとジェームズ一世の違いだ。

ジェームズ一世には真剣に話を聞き、自分で判断を下せれる能力があった。

魔法至上主義の元、そんな危険な賭にでるより民衆の安全を第一に考えたジェームズ一世は流石ともいえる。

だが、最後まで戦局がみれないのは愚かとも言える。

レコンキスタはアルビオンや他国の民衆の希望の的となるだろう。

貴族制の撤廃をすることを宣言しているのだから。

いくらここで民を逃がしてもアルビオン王家には返るものはない。

ならば、仕方がない。

ルルーシュはカラーコンタクトに手をかける。

ギアスをかけて強制させる。

どのみちジェームズ一世が目当てでこの国に来たわけではない。

地位と後ろ盾が目的だ。

その為に目の前の男を傀儡に仕立て上げ、自分の都合のいいように人格を変えてしまうことも視野に入れていた。

他の貴族が不信に思おうとも。

「少々待つてもらえないか、父上」

「ウェールズか。王の謁見に口出しするのはあまり褒められたものではない」

扉から金髪の少年が現れた。

ウェールズ・テューダー。

現アルビオン王ジェームズ一世の子供である。

なにを口出しするのかわかれば、とんでもないことを言った。

「私は彼の意見に賛成です。国を救える手が、ましてアルビオン王家の問題がトリステインを筆頭にした他国に及ぶのは避けたいのでね」

「しかし、避難民はどうするのだ。朕の民を逃がさねばならん」

「私が民衆をトリステインのラ・ロシエールまで避難させます。空賊の真似でもして資材と秘薬を秘密裏に運びましょう」

そのときジェームズ一世はあることを思いついた。

もし仮に、ウェールズが空賊としてトリステインで捕まったとすれば、どんなことになるうとも生きながらえることができる。

自分に似て頑固な息子は祖国を捨てて亡命するより祖国のために

死ぬと平気で考えていそうだった。

もちろん息子に空賊の真似事などさせることは許せないことだった。

しかし、ウェールズは戦局を十分理解した上で申し込んでいる。

息子の愛国心は相当なものだが、親としては許せない。

しかし、国を守る国王の立場からすれば諸手をあげて喜んでいる。

国に資材があれば戦えるかもしれない。

アルビオンの血はレコンキスタによって汚されようと、ウェールズが生きていればその血は代々続いていく。

王が国を作る訳じゃない。民が国を作るのだ。

ウェールズは平民への理解がある。

頭もいい。

次世代へ王を譲ることに安心していた。

しかし、レコンキスタの弾頭はウェールズの命さえも危ぶまれるほどに強力な一手だった。

ならばこそ、ウェールズには生きてもらいたい。国王としても親としても。

リスクはどのみち度外視だ。

ならば目の前の平民の手に乗ってやってもいいのではないか？

息子だけには生きていてほしい。

国の問題を後回しにしても、親として息子だけは。

幸いウェールズはトリステインのアンリエッタ姫に懸想している。

運命の女神が彼らに微笑みかけ、ウェールズを救ってくれるかも知れない。

そうなれば返答は早いものであった。

「………わかった。朕は最後まで手を尽くそう」

「では」

「ああ。ナイトメアフレームとやらのゴーレムを作るがいい。風石は用意させる」

「はは。了解いたしました」

ルルーシュはカラーコンタクトをはめながら内心笑い声を押さえることができなかった。

これでルルーシュとスザクのナイトメアフレームを開発できる。

技術者ではないが魔法は先端科学と同じくらい魅力的な力だ。

三者二様の思惑が交差する。

それは国王の謁見で（後書き）

飛空石。風石。ムス力。

特に意味はありません。

それは男の開発で（前書き）

ちよつとここから批判の意見が多くなると思います。

ぶつちやけ怖い・・・・・・。

それは男の開発で

開発はその日のうちに行われた。

効率が悪いが仕方なくルルーシュは風石の魔力循環の方向性を変え、ほかの石を作り上げる。ランスロット・エクルベイジユの開発が急務だ。精霊に命じて機体の開発と材料の生産を一度に行う。

「コアルミナスはいい。何とか形にはできた」

ルルーシュの前にはイビツな色のキューブがあった。
片方が赤く片方が緑。

風石と火石の同調率を操作しながら接合したランスロットのコアだ。コアに使われている風火石からルミナスブレイズやエナジーウイングの色は緑から赤よりになるだろう。

「問題はサクラダイトの代用品だな」

自爆する際に爆風がパイロット側に来ていいはずがない。また合金繊維としてランスロットとガウェインに大量に必要となるのだ。

伸縮性が効き、丈夫で、弾力がある金属など存在しない。カーボンナノチューブも考えてみたが、確かに条件はクリアできても帯電性と発電性が弱いためにサクラダイトと同じような出力は出せない。

「やはり水石と土石と風石を編み込んだ混合筋肉繊維しかあるまい。しかし、どうもそれを混ぜ合わせるのはな」

水石でオートリペア。土石で強度を保ち、風石で発電する。

それに電気を伝えやすい金属で加工し、一本一本筋肉繊維として編み込んでいけばいいだけの話である。

だが、実際にそれをするには労力が大きすぎた。29個の並列思考を駆使し作り上げるも、ランスロットの筋肉繊維で何万本と必要になる。時間もなしどころすればいいのかと考えていると妙案を思いついた。

「私のもう一人いれば問題はない。『精霊よ、我が半身の偏在をここに』」

偏在魔法を使い、ルルーシュがもう一人現れる。

自分のすべきことを熟知しているのか、すぐに作業に取りかかってくれた。

だが、並列思考の内の一つが偏在のほうに当てられたため、ルルーシュの効率は落ちた。

偏在はルルーシュより少し速いペースでサクラダイト合金繊維の代わりを作り出していく。

ルルーシュは思った。

偏在29人が、29個の並列思考を使えらしたら。

結果、ルルーシュは29個の偏在に指令をだす工場長へとなった。

それは男の開発で（後書き）

次はウェールズがスザクに説法。

批判は覚悟の上です。

それは男たちの苦悩で（前書き）

ウェールズがルルーシュの内面を切開。
スザク、君はなんてことをいいだすんだ。

編集 経験そく ↓ 経験則

三ノ丸さん、感想ありがとうございます。

それは男たちの苦悩で

スザクはアルビオンの中を歩いていた。というのもウエールズが年が近いと言うことで連れ出したのだが。

「ここはいい国だね」

スザクは本心でそう思っている。

逃げた国民も多いが、残った民もまた多かった。

王の一方的な弾圧を受けたモード太閤の事件を境に不安定になっていた国はまとまりを見せなかったが、ここにいる民のすべては現王ジェームズ一世を信頼して残っているのだ。

ウエールズは自国が褒められたことに満更でもなさそうに微笑む。

「そういつてもらえれば嬉しい限りだ。しかし、君たちも物好きな人たちだな。わざわざ使い魔としての立場を捨て、トリステインのヴァリエール公爵家の後ろ盾をなくしてまで戦場に来るなんて」

「自分たちには成さなければいけないことがある。他のことはすべて小事だよ」

「……はは。何とも剛胆な使い魔だろう。いや、君たちはもう使い魔ではないのだったな」

「いいよ。僕は後悔していない。あそこにおいても真に実りある生活を送ることはできなかっただろうしね」

主に食事的な意味で。それはトリステインを陥れる発言だと言うことで自重したが。

「君はすごいな。僕にはできそうもない」

「何も行動できるからこそすごい訳じゃないよ。ただ、実行できることに意味があるんだ」

「同じじゃないのかい？」

スザクの妙な言い回しにウェールズは眉を潜める。

「行動は誰にでもできる。でも実行は誰でもできる訳じゃない。がむしろに行動しても事態はいい方向には進まないんだ」

「そういうものかい？ まるで見えてきたような言い方だね」

「いや、実際は自分の経験則からかもしれないな。僕は行動したけど責任を果たせたかどうかは分からない。結局はそこに至る結論しかないのかもしれない。とある友人は『実行』を選んだけどね」

ルルーシュは貴族制の破壊を実行した。そしてそれを成した。

「責任か。その友人は『実行』して何かを得たのかい？」

「いや、何も得なかった」

「え？ なぜなんだい？」

「実行することは自分しか考えていない者の極論だからだよ。行動は常に責任を視野に入れ、動かなくてはならない。けれど実行する分には責任とは解離している。誰かを巻き込んででもやらなければならぬが、そこに人の生き死には勘定に入れていないんだ」

「……利己主義の塊のような言い草だね。でも、その友人は成し遂げたんだろう？」

「人の死を肯定してまで、成したい事があつたんだ」

他人にいくら言われても変えられない事実。ルルーシュは責任を果たそうとしていたが、そのために人が何人も死んだことに対しては仕方がないと思っっているだろう。

もちろんスザクも分かっていた。それは討論してもしようがないことだ。国の社会体制を根本から変える事に人が死なないなどあり得ない。

行動を軸とする軍ではそれはあり得ないことだ。人の死を前提に考えた作戦など、指揮官の手腕を全否定するものだ。それでも死んでしまう者はしょうがない。自分で志願したことを後悔するしかない。

実行を軸としたテロリズムを働いたルルーシュは、いくらか民間人を巻き込んだ。死に対する覚悟も、人を殺したことがない人たちですらもその手にかけた。

「なんだか報われない話だね。それで、その友人はどうなったんだい？」

「成したいことが終わった後は死ぬ覚悟を固めていた」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

まさに絶句。ウェールズは分からなかった。その友人が一体何を
したのかを。

「それは名誉のためかい、それとも、君の言う責任のためかい？」

「友人は平和を望んでいたんだ。そしてテロリズムの方法を用いて
国を改革しようとした。その道程で山ほど人が死んだ。彼らの墓標
となり新しい社会に自らは必要ないと、死ぬ覚悟をしたんだ」

結局、その覚悟もルイズに否定されてしまったが。

ウェールズは呆氣にとられた。どこの国の話であろうが、作り話
であろうが、スザクの顔には明らかな後悔が色よく写っていたから
だ。

「君は、その友人の事を後悔しているのか？」

「彼が行ったことは全否定しない。しかし、やり方が強引すぎた。
彼だけの世界じゃない。そこは確かにみんなの世界だったんだ」

「だとしたら、その友人が作ろうとした世界は、間違いだったとい
う事なのかい？」

「・・・・・・・・・・え？」

「彼は平和を望んだんだろう。そこに後悔はないはずさ。それに賛

同する者もいただろう。少なくとも彼が独断だけで行動していた訳ではないのだろうか？ それを全ての原因をその友人に押しつけ生き残るというのは、あまりにもその彼が可哀想じゃないか」

「可哀想？」

「誰からも認められず、誰からも理解されず、誰からも肯定されない。挙げ句の果てに死を選ぶしかかった孤独の王。彼には確固たる自分を殺してまで、それを実行したんだろう？ その過程がどうであれ、一番の被害者は彼だったのさ」

ルルーシュは確かに被害者だった。国により追い出され、子供時代にブリタニアの討伐をスザクに話すほどに。

では、一体ルルーシュはどこから自分を殺し始めたのだろうか。

ルルーシュの母が殺されたとき王族という地位を殺した。

日本に来てスザクと出会ったときにはナナリーの為に自分を殺していた。

ゼロをしているときは生徒会のルルーシュとしての立場を殺した。

皇帝となった暁にかつての友人であつた生徒会員との繋がりを殺した。

そして、自身の命をも殺し、彼は名誉すらも殺されることになっていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・っ!？」

スザクは唐突に理解できた。ルルーシュは機械じみていると偉そうに論じた自分に憤りを感じるほどに。

ルルーシュが変わったのではなかった。子供の頃、あの日、スザクと遊んだときから彼は何一つ変わっていなかったのだ。

常に冷静で、負けず嫌いで、大人ぶっていて。

ルルーシュは、とくに自分を形成するためにあらゆるものを殺してきた。

時間を、繋がり、楽しみを、娯楽を、後悔を、存在を。そうまでしてルルーシュには生きる意味があったのかは分からない。ただルルーシュに残ったのは怒りと国への反逆心だけだった。

そんなルルーシュは空っぽだった。ナナリーを守るというのは自らが自発的に行おうとした行動。ルルーシュの幸せはそこにあった。しかし、それ以外の幸せはとっくの昔に剥奪されていたのだ。

ルルーシュはナナリーの為の反逆を行った。そこにルルーシュの意志など、ナナリーを守るためという言葉で十分すぎるほどに表現することができる。そしてそんなナナリーですらルルーシュに敵対し、ダモクレス内で言い争いになった。

ルルーシュが変わったのはその時だったのかも知れない。世界にすでに見切りをつけたのか、それとも世界に絶望したのか。真意のほどは分からない。でも、ルルーシュは常に世界に裏切られていた。

彼が守りたいと思った者は、例外なく死んでしまった。シャーリィもロロも、そしてユフィも。

そして自身が、ルルーシュが親友だと言っていた自分ですら、枢

木神社でルルーシュの信頼を裏切っていた。

「あ……………ああ……………」

確かにルルーシュのしたことは許されることではない。

しかし、ルルーシュは一人の個として生きるだけの機能が欠如されていた。彼の身の内に溜まっていったのは絶望と悲しみと怒り、人間がおおよそ抱く負の感情でしかなかった。

そんなルルーシュを作ってしまった周りの人間に、どうしてルルーシュを責める言葉が出せるだろう。

それでは、それではあまりにも。

「彼は、どうして死を選んだのか。そこに僕のような部外者が踏みいっていいわけではないけど。ただ、君が彼を友人だと言うのなら

――

―― どうして君は友人を止めてやることができなかったんだい？――

言葉にしなくても分かった。軍にいたとか、敵だったとか、言い訳はいくつも浮かんでくる。

だが、それは真に正しい結論じゃなかった。

スザクには時間があつた。それも、ルルーシュが子供だったとき、一番ルルーシュの近くにいて彼の心情を理解できたのは自分だった。

皮肉そうに苦笑いを浮かべたり、嫌みを言ったり。ルルーシュの本当の笑顔などナナリーの前でしか見たことはなかった。ルルーシュにとってのナナリーは、彼の世界そのものだった。

ルルーシュはいくらでも変わった。たくさんのＩＦがあった。でも彼が歩んだのは常に最悪の道で、偶然にもギアスという力を手に入れただけだった。

ルルーシュは何かと優しいから、大抵のことは自分の内側で抱え込んで、結論を出して後悔している。

作る表情は常にルルーシュが使っていたものであった。彼の本当の感情など、顔には現れていなかった。

何をするにも、誰に会うときでも、ルルーシュはペルソナを付けていた。

まるで本当の自分を隠すように。他人には触れないでほしいというように。

事実、それは間違いではないだろう。最後、凱旋パレードでスザクはルルーシュの最後の顔を見ようとした。ルルーシュはそんなときでもペルソナで顔を偽っていたが、胸に宝剣が突き刺さったとき、ルルーシュのペルソナは瓦解していた。

顔に浮かんだのは恐怖でも痛みでもなく、心の底からの喜びだった。

ルルーシュは、自らを突き刺したスザクにまるで感謝をするように、微笑みを浮かべていた。自身を殺すのがお前でよかったと、まるで感謝をするみたいに。

誰よりも報われず、誰からも理解されず、誰より深い絶望をルルーシュは知っていた。

殺されることすら、彼にとっては世界からの解放であった。

ナナリーのいう理想の世界を、彼は自ら掴みとったのだ。

ナナリーに嫌われても、それでもルルーシュは実行しただろう。

彼は不器用だから、結局悲しみを表せる涙ですら、ペルソナで隠していたのだから。

それは、あまりにも報われない男の話だった。

「久しぶりに同年代の者と話ができたよ。よければ友達になつてくれ」

「・・・・・・ああ。分かったよ」

スザクはウェールズの言葉にルルーシュの内情を読みとれた。しかし、それは決してプラスに働いた訳じゃない。ルルーシュの思いは、決して非難されるべき物ではない。

スザクはこれまでの自分の行動を省みて、ルルーシュの矛盾にくづか気づいた。

一番大きかったのはシャーリーが死んだときだ。スザクはルルーシュがシャーリーにギアスのことがバレたから殺したのだと思っていた。目先の情報に頭の活動を持っていかれて、ルルーシュの不自

然な行動に気がつかなかった。

あるとき、自分はルルーシュを許したくないと言った。

そのすぐ後にギアス教団を襲撃しているのだ。ここまでくれば分かる。シャーリーは、ギアス関係者に殺されたんだ。そしてルルーシュは報復をした。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「やめてくれ。そんな落ち込んだ顔をさせるために君に意見した訳じゃない」

「・・・・・・・・しかし、自分は、友人を理解してあげることができなかった」

「理解する必要はないよ。ただ、間違えてあげたとき、道を見失ってあげたときに側にいてやるだけでいい」

それだけで大抵は救われるものだという。

スザクはウェールズと別れ、城外に設置されているルルーシュの工房へと向かった。縦に10メートル横幅に20メートルの大きな工房だ。元々は武器庫だったが、今ではほとんど空になっている。

「ルルーシュ」

「なんだ？ そんなに険しい顔をしてどうかしたか？」

「君は、今までのこと、後悔しているかい？」

「・・・・・・・・今までとは?」

突然のスザクの問いに、ルルーシュは戸惑った。

「ユフィと、ロロと・・・・・・・・シャーリーのことだ」

「っ!」

ルルーシュの顔が歪む。予想外の名前を挙げられて動揺を隠し切れていなかった。

「・・・・・・・・ああ。後悔はしている。彼らは死ぬべき運命ではなかった。私が巻き込んでしまった」

「シャーリーは、なぜ巻き込まれたんだ?」

「・・・・・・・・シャーリーは、私のことで巻き込まれた。それだけだ」

それだけだというのに、なぜルルーシュはそんなにも泣きそうな顔をしているのだろうか。

「もういいだろう。過ぎたことだ。私は彼らの墓標になるんだ。後悔はしても、この道に間違いなどない」

「ユフィも、シャーリーも、君が死ぬことを望んでいるとも言っのかい?」

「・・・・・・・・彼女たちは優しい、望まれてはいないだろう。しか

し、彼女たちに報いるものがないのだ」

報いるものすら、ルルーシュにはなかった。剥奪されていた。

「なぜそれが、君の死につながるんだ」

「スザク、今日のおまえは少しおかしいぞ。頭を冷やせ」

「いいや。僕は君に問わなければならない。今日でなくては意味がないんだ」

ウェールズに気づかされたルルーシュの破綻。

死を待つルルーシュは、どうしてそこまで元の世界に帰りたいのか。

簡単だ。

ルルーシュにとって死ぬことは何事にも変えられない自らの実行の結果であり、ルルーシュの目標に含まれ、なおかつナナリーの理想の世界を作り上げるために他ならない。

それが、自らを救済するものだと思えるしかないのだ。ルルーシュの救いは、ナナリーを救うことであって自らの救済ではない。

「シャーリーは、ギアスの関係者に殺されたな？」

「……ああ。俺に関わったせいだな」

「だからギアス教団をつぶしたのか？」

「否定はしない。だが、ギアス教団が邪魔だったのは事実だ」

「・・・・・・・・何を必死になってシャーリーを殺した人物を庇うんだ」

「庇ってなどいない！ 憶測と推察だけで人の心情を探るな！！」

ルルーシュはそれを可能にしている。が、されるのは初めてなのだ。シュナイゼルでさえルルーシュの手の内は読めても心情は読めなかった。

ルルーシュはスザクに心を探られることを怯えているかのように見えた。

「君と親しい者が、シャーリーを殺したのか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・やめろ。これ以上その話はするな」

「誰なんだ。C・C.か？ ジェレミア郷か？ いや、彼らには無理か。常に君の側にいた」

「・・・・・・・・頼む、やめてくれ・・・・・・・・」

「口口なのか？」

「ツツツ！！」

ルルーシュはスザクの襟元をつかんだ。ひ弱なルルーシュではスザクの体重を支えることはできない。だが、それでもルルーシュは動かざるを得なかった。

「スザクッ！ 死者をこれ以上冒瀆するな！！」

目をつり上げて感情の吐露が見えた。

ロロ・ランペルージ。

ルルーシュを黒の騎士団の裏切りから救った仮初めの弟。

ルルーシュの監視を行いつつC・Cの搜索を任されていたギアス能力者。彼とルルーシュはいつの間にか結託し、大いに監視の目を誤魔化したものだ。スザクがルルーシュの記憶が完璧に戻っているのかいないのかを見分ける際に真っ先に疑った存在はロロだった。

「ロロは関係ないだろう！ あいつは……たとえば仮初めでも、俺の『弟』だった！！」

「君と彼の間に何が起こったのかは聞かない。僕はロロを責めているわけでも、君を非難しているわけでもない。ただ事実を確認したいだけだ」

スザクを今にも呪い殺さんとはかりにルルーシュの目つきが鋭くなる。表面上での関係しかスザクは知らなかった。

監視者と当事者の関係以上にはなるはずはない。

しかし、それでもロロは死んでいたのだ。自らのギアスを使い続けたことによる心肺停止。ルルーシュを逃がすためにギアスを多用し、それが元で死んだのだった。

「私が、私が殺したようなものだった……シャーリーも、ロロも！」

「それは君がそう思いたいだけなんじゃないか？ ルルーシュ」

「スザク………ッ！ 貴様ッ！」

「甘えるなよルルーシュッ！！」

スザクはルルーシュの手を取って床に押し倒す。後ろ手に腕を捕まれ、ルルーシュは力が入らない。背中には膝を突き立てられ、行動を制限された。

「僕は前から、君のそういうところが嫌いだった。誰かを頼ることもなく、自分の中で勝手に結論づけて、すべて自分が悪いような口振りで………」

「その何が悪い！ 私という歯車がすべてを狂わせたのだ！ すべての終着、すべての責任、それらはすべて俺にある！」

「君は神にでもなった気かい？ それは一人の人間に余る責任だ」

「だとしてもだ！ 責任だと？ 笑わせるな！！ そんな簡単な言葉で、皆の死を肯定するな！」

「だったら君は！！ 死という簡単な言葉で彼らの思いを侮辱する気か！！」

ルルーシュの体が震えた。怒りにうちふるえて悶えているようだ。

「………今更、今更………今更っ！！ 俺に何を求めるんだっ！ スザク！！ お前は知っているだろう………俺はユーフェミアの敵だ！ お前も俺を殺すことに賛成し、ゼロレク

イエムを起こしたではないか！！ 今更、死ぬこと以外で、どうやって、彼らに詫びると・・・・・・・・死んでいったものに詫びると！ お前は言う気だ！！」

「生きるよ、ルルーシュ」

「ふざけるんじゃない！！ 生きろだと？ この俺に、生きろと言うのか！？ 俺の行動で、いったいくつの命が消えた？ 俺のせいで、いったいどれほどの明日がなくなった！？ なぜだスザク！ お前は俺を憎んでいたじゃないか！ 何がお前の憎悪を消した！」

「君の矛盾に気がついたただだ。それに、責任は僕にもあった」

「慰めのつもりか！？」

「違う。ただ、君が背負うにはあまりにも重すぎるんだ。それをひ弱な君が支えられる訳ないだろう」

グツとルルーシュは言葉に詰まった。意味合いがすり替えられているが、ひ弱と言われて嬉しいわけもない。スザクの真意をはかりそこね、一瞬言葉に詰まった。

「ナナリーの世界には、君は必要だ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・だが、世界は悪逆皇帝を許しはしない。死を以てつくなうしかない！」

「ギアスで世界を騙すんだろう？ ルルーシュ、だったら自らの幸せのために自分を偽装しろ」

「…………俺に幸せなど必要ない。それを甘受するにはあまりにも手を血で汚し続けた」

話は進まない。二人の意見は平行線をたどっていた。一度はルルーシュが納得した死の受け入れ。それを、一番の協力者が離反したのだ。

「…………もういい。出ていってくれ」

「話はまだ終わっていない」

「私は死ぬ。それは変わらない。…………今日はもうお前の顔を見たくない。出ていってくれ」

「……………分かった」

スザクはルルーシュの手を解放し、武器庫から出ていく。

スザクもウエルズに説得されて意見を変えた訳じゃない。決定打となったことは認めるが。

この世界にきて、ルルーシュと行動する時間が増え、少しずつ憎悪が氷解していったというのも確かにある。ルルーシュはあまり笑うことはなかった。いや、今に限ったことじゃなく、彼の笑顔は常にナナリーに向けられていた。

ユーフェミアを殺したゼロは憎い。ゼロであったルルーシュは憎い。敵をとれたかったし、ルルーシュに死でつぐなわせたかった。ルルーシュが起こした行動の結果が、自身の最愛の人の死亡であったのだから。

でもそれは、ユファイが望むことではない。そして、ルルーシュが唯一笑顔を向けているナナリーの望むことでも、かつてのルルーシュの弟であったロロに対してもシャーリーにしても、ルルーシュの死を喜んでくれるなどとはスザクは微塵も思っていない。

スザクは思う。彼らは全員、ルルーシュを赦しているのだ。そんな彼らの気持ちを踏みにじってまで、自らの自己満足で、ユファイの敵を討ったという確認で、ルルーシュを殺すことが本当に最善だったのかを。

救える命なら救いたい。それは今も変わらない思いだ。

だけど、罪はたとえ赦されたとしてもつくなうべきである。

後悔する前に結論を出したい。ここに来る前の自分であったなら、ルルーシュが望むとおりのスザクを演じられた。だが、それも揺らいでしまった。

ここに来てからのルルーシュは、本当に心から笑えたのかもしれないから。

しがらみも命を狙われる心配もなく、自身の存在を押しつけてくるものなどいない。たまにナナリーを心配して落ち込むこともあるが、それでも元の世界より幾分かルルーシュは過ごしやすいように見えた。

ハルケギニアに召還されたことは、最初はよく憤ったものだ。しかし、ここへの召還という時間さえなければ、ルルーシュはスザクの手で、あのとき、民衆の目の前で、浮かばれないままの悲運を遂げたであろう。

あまり快く思っていないが、その点に関してはルイズに感謝した。問題の先送りと言われようが、人の命に代わりはない。それに、ルルーシュには死以外の選択肢が必ず存在するはずなのだ。

そんな最後、認めない。世界が嫌ったルルーシュ・ヴィ・ブリタニアという存在を、歴史にまで刻んで殺すなど。

少し不器用で、誰よりも傷つきやすく、策略家で。そんな大切な友人を殺してまで得た平和の明日は、決して明るいものじゃない気がした。

スザクは思う。これ以上の悲劇を起こしてはいけない。なぜなら枢木スザクは、ユーフェミアの騎士でありながらもルルーシュの剣なのだから。

悪逆皇帝、ゼロ。その二つは光と影になる。二人同時に存在するなど不可能だ。

だが、ここには魔法がある。

あちらで成し遂げられない奇跡を、起こすことができる。

ルルーシュが起こした反逆。それによって死んだ人々。そしてユフィの敵。

しかし。それら悪感情を含めても、今のスザクは断言できる。

ルルーシュの明日にだけ憎しみに染まるのは間違っている。

だからスザクは、ルルーシュの明日を守る剣となることを誓った。

ルルーシュの内面は穏やかではない。スザクによる宣言は、ルルーシュの行動を否定したばかりか、自分がもつとも欲しくない言葉

だったからだ。

「今更……俺に生きろだと……」

それは、ルルーシュの心を抉った。ユーフェミアのことを許したわけでも、赦す訳でもない。

だが、スザクはルルーシュに生きろと言った。

「なぜだ、スザク……お前は、お前まで……私を……」

否定するのか。

もしくは、『生きる』というギアスをかけたルルーシュに対しての呪いか。壁をたたきつけ、拳が真っ赤になるまで手をふる。今では痛みですら心地よくなっていた。それが自分の存在を肯定するようで、場違いなほどうんざりしたが。

「もうこの手でナナリーを救うことなどできない。あるとき、ダメクレスで、もうナナリーとは共に歩けなくなった」

もう、この手で髪を梳いてやる事もできない。何より、ナナリーを守ると誓った自分自身がそれを否定している。

ギアスでナナリーからフレイヤの発射装置を奪うためとはいえ、仕方ないと思った自分がいた。なぜならそれはナナリーがフレイヤを使うことで死んでいった者を少しでも減らすことが、ナナリーを救うためだと信じたから。

だが、ナナリーの意志を奪ったのも事実。そして処刑場で、予定

調和とまで行かなくてもナナリーを見せしめにしたのも事実。

吐き気がした。何のために生きるのか。生きて何になるのか。まさか今更死んでいった者たちへの後悔を背負えということか。それとも介錯のつもりで長く生きながらえ、もつと苦しめという暗示なのか。

ナナリーだけじゃない。ロロも、シャーリーも、自分のせいで死んだのだ。俺さえ関わらなければという思いもある。

どこで間違えたか、何がいけなかったかと、後悔しない日々はない。ルルーシュは胸が痛かった。ディバルもミレイもカレンもニーナも。思えば贖罪ができずに裏切った形となった。カレンにも悪いことをした。結局、あのあと彼らが開放される確信を作ってあげるこゝとが出来たのかすらわからない。

また、約束を破ってしまった。

「俺は、私は、何がいけなかった……どこで道を違えてしまったんだ……。なぜあのとき、俺は死ねなかった！」

八つ当たりの思考でルイズの顔が頭をよぎる。これほどまでに人を憎いと思ったのはシャルル以外に無かった。

リーヴスラシルのルーンがルルーシュの怒りに呼応して少しずつ発光していた。ブリミルを殺したリーヴスラシルがルルーシュに宿ったのは宿命だともいうのだろうか。

「私は、ナナリーの為に死ぬ運命にある。それは誰であろうと、私であろうと覆すわけにはいかない」

—— ルルーシュ・ランペルージが命じる——。

アルビオン製の鏡がカラーコンタクトを外したルルーシュの眼を映し出す。

「私は、死ねない。永遠の苦痛を受けようとも！」

鏡に入った鳥の紋章はルルーシュの眼に入り、ギアスを発動させる。マオとの勝負で使われたギアスはジェレミアによって破壊されていた。

絶対遵守のギアス。それは孤独を手に入れる為に平穩を捨てた自分にふさわしい。もう日だまりの中を歩けるなど思っていない。

ルルーシュ・ランペルージの未来はエリア11で民衆の前で死ぬこと。

悪逆皇帝など平和な世には存在してはいけない。

「ああ、私に生きるなどと、言わないでくれ……。私は、どうやって生きていけばいいのか、もう分からないんだ」

ナナリーという主柱をなくし、ルルーシュは不安定になっていた。スザクは知らない。ルルーシュが自分自身にギアスをかけるほど追いつめられていたことなど。

「私はここで宣言しよう。ルルーシュ・ランペルージは、生きるべき男ではなかったという事を」

ニヒルな笑みなど全くなかった。そこにあるのはただただ顔をゆ

がませ、地面にうずくまる一人の男だった。

「私は……こんな時でも泣くことすら忘れてしまったのか・
……」

ああ、そうか。スザクの言っていた機械のような自分というものが唐突に理解できた。

曰く、ルルーシュという男の存在は、ひどく冷たい者だったという事か。

それは男たちの苦悩で（後書き）

ルルーシュを説得。

スザクを少しウザク的に書きたいと思ったところになった。

簡単に説得されすぎじゃね？　と思うかもしれませんが、別にスザクはルルーシュのことを許したわけでもありません。悪逆皇帝として殺すしかなかったけれど、魔法という奇跡を取り入れて生存も手なんじゃないかと思っただけです。

醜い言い訳ですが、何卒容赦を。

それはアルピオンの新しい翼で（前書き）

ランスロット・エクルベイジュの完成です。

性能的にはランスロット・アルピオンより機動性が落ちています
が、攻撃のヴァリエーションと破壊力はエクルベイジュの方が上と
いう設定です。

それはアルビオンの新しい翼で

アルビオンは緊張に包まれていた。それは、ウェールズ・テューダーが空賊の真似事をしていることでも、レコンキスタが首都近く of データルネスを占領したことでもない。

レコンキスタとの戦闘に使われるべきアルビオンの騎士、ランスロット・エクルベイジュが完成したのだ。

「さて、私たちの滞在を快く思っていないアルビオンの貴族の方も多いだろう」

始祖の使い魔を偽る男達。それがアルビオンでのルルーシュたちの風評だった。

王に取り入り摩訶不思議な研究を開始し、貴重な航空資源である風石を惜しげもなく消費する。そしてできあがったのは一体のゴーレムだという。

疫病神以外の何事でも無かった。

しかし、ウェールズは二人となにやら意見を交換したり頻繁に話を聞きに言ったりしているので表だって抗議することはできず、時間と共に『アルビオンで死線を共にする仲間』だと言ってくれる者もでてきた。

明らかに優勢であるレコンキスタ側ではなく劣勢なジェームズ一世側についたのがそう思う理由らしい。

しかし、レコンキスタの密偵ではないかとか、他国が情報をよこすために用いた諜報部員ではないかと、未だに思われてもいる。

「スザク、これがおまえの新しい翼だ」

「……ああ。わかったよ」

コックピットにレベーションで乗せる。あの日以来、何となくぎこちなくなってしまった。

ランスロット・エクルベイジュは高機動、高出力、高性能の本来の人間の限界を無視した設計の機体だった。脱出装置は一応つけたが、奪われたとしても特に問題はないのではないかとも思う。

たしかに構造を理解されるのはいいが、あれを模倣して作られたナイトメアフレームなど、そもそも搭乗者がいないからだ。

なぜなら、あれは人が乗るべき機体ではない。

ロイド伯爵の悪のりの結晶ともいえる。まず高機動になる際に普通の人間なら血管が切れて内出血を起こし、三半規管にGがかかり吐き気を催す。それを無視できる人間がスザクとカレンだった。

ガウエインは頭脳労働専門のため、高機動でも問題は無かったが、試運転でランスロット・エクルベイジュに搭乗したときにルルーシユは三分もかからずダウンしてしまった。

ガウエインのコンセプトはやはり防衛の方がいい。何より高機動に少しでも懂れていた自分を殴りたい。

「行くぞ、エナジーウィングを展開して上昇しろ」

【了解】

ランスロット・エクルベイジュのエネルギーウィングは赤く染まっている。ただのエネルギー弾ではなく、風石と火石を用いた。風石は電気をため込む性質があると分かったため、多分にランスロット内にいれ、魔力と電気のエネルギー効率を変換することで安定した出力と長時間の戦闘にも使えることができる。

正直、ミヨズニトニルンのルーンで解析しながら電気配線と電源を埋め込むのに苦労した。

ランスロット・エクルベイジュがエネルギーウィングで空を飛ぶと、貴族側から歓声が聞こえた。

「なんだあれは！」

「ゴーレムが空を飛んだぞ！」

「それに早い……風竜の何倍の速度だ！？」

自分が開発したもので驚かれるのは気分がいい。ロイド伯爵とラクシャータの狂気が移ってしまったかもしれない。

「スザク、可変型ヴァリスが内蔵されている。次はそれだ」

【可変型？】

「わざわざメーザーバイブレーションソードを仕込むのも手間だな。強度だけは以前のヴァリスよりも高い。風石を銃口時の内側に内蔵

している。剣の時はチェーンソウ、銃の時はレールガンがはなてるくらいには改造している」

【・・・・・・君は機体に帯電性があるかどうか確かめたのか？】

レールガンを使う際に発生する何億ボルトかも分からない電圧のことだろう。

風石には雷にも似た自然エネルギーが内蔵されている。それを何個も使ったのだ。もし帯電性がないのなら、発生したマイクロウェーブが機体内をオープンレンジがごとくチンされる。

カレンが使った輻射波動に近い現象だ。

「わざわざランスロット・エクルベージュを電気エネルギーで使えるように改良したのだぞ？　むろん、帯電性は高い」

【分かった。じゃあ、離れてくれ】

剣の状態のヴァリスが銃へと移行する。トリガーに指を引っかけ、スザクはガンダールヴのルーンで理解した可変型ヴァリスの性能に驚愕する。

以前使っていたランスロット・アルビオンのスーパーヴァリスより連射性に劣るが速射性が高い。

視認できる限界の速度で飛ぶだろう。

いや、ガンダールヴのルーンでやっと視認できるかどうかなのだから、実際は視認できないのかもしれない。

エネルギーの充填が終わり、コックピットに【OK】の文字が点滅する。

ヴアリスに電気を帯電させ、そのまま持つことでもランスロット・エクルベイジュの電力を回復できそうだ。

（これは………僕が使った最後の剣だ）

スザクはそれを確認する。あちらの世界で、またルルーシュとナナリーと一緒に平和に過ごせたらどんなにいいだろうか。偏在という魔法で悪逆皇帝を作り上げる。別にスキルニルでもいい。それが全部うまくいけば、また三人で笑える日々がいつか送れるはずだと信じて。

「撃てー！ スザクー！」

【おうー！】

ヴアリスから射出された風石のかけらを内蔵した銃弾は、おおよそ人が視認できない速さで飛んだ。貴族はいつ銃弾が発射されたのか分からない。

だが、遙か彼方。アルビオンにある山脈の一部が、向こう側が視認できるほどに抉られたのが分かった。

風石に内蔵されたエネルギーが小さな台風を形成したのだろうか。

それが音と光の境で風は熱を持ち、銃弾の外側を破壊した。そこには他の魔力石から出た欠片があり、今はなつたのは土石の欠片だった。

圧倒的質量の伴った音が聞こえた。たとえこの銃口を向ける相手がナイトメアフレームでも、パイロットの即死は容易に伺えた。

「すごい……………」

貴族の誰かがつぶやく。それは波紋となり、伝染するかのよう
に伝わっていった。半信半疑だった貴族も、友好的に接してくれた貴
族も、そしてジェームズ一世も感じたのだ。

レコンキスタを切り咲く一条の光が。

ランスロット・エクルベイジュが戦場を駆け抜ける姿が。

それはアルピオンの新しい翼で（後書き）

風石を無駄遣い。

戦争以外ではお荷物な機体。エクルベイジユです。

それは国家の希望で（前書き）

サイト、ルイズ、ワールドが登場。

そしてオリジナル設定が入ります。

それは国家の希望で

ルルーシュとスザクはもみくちやにされ、やっとの思いで解放された。今日明日死ぬかもしれない運命が変わったのだった。喜ばない訳がない。

「アルビオン万歳!!」

貴族は、平民は、今日ばかりは無礼講だとばかりにはしゃいだ。それこそ浴びるように酒を飲み、食糧難だというのに豪華な食事を作らせるほど。

「朕は貴殿を疑っていた。悪かった」

「いえ、僕たちはかまいません」

「余所者だという自覚はあるし、そこまで幅を利かせたくはない。ただ、死ぬ運命というのはいつの世も残酷だ。この国が滅ぶのはまだ早い」

ウェールズもいるのだしな、と小さく付け加えた。ぶつちやけ潰れるならトリステインの方が早い。

「おお、始祖よ……朕は、アルビオンは、あなた様のおかげで助かりましたぞ……」

ブリミル教でもないが、なぜか二人はジェームズ一世から礼をされた。

「いえ、まずはレコンキスタを一掃しましょう。僕たちは明日を希望でつなぐんだ」

「ああ。喜ぶのはいい。だが気を抜くのはまだだ」

「だが、今日ぐらい羽目を外して騒ごうじゃないか。始祖だって、この祝杯を見ているはずさ」

冗談めかしてスザクは言う。

アルビオンの兵が一気に指揮をあげる。

負け戦から勝ち戦に変わったのだ。負けられない。

「ああ、このことを朕は早くウェールズに伝えたい」

「ウェールズは今日はロサイス方面で活動だったな。いつもなら帰ってくる時間か……」

すると、廊下から今日の祝杯に参加できないとぼやいていた衛兵が駆けつけてきた。

「ジェームズ一世陛下、ウェールズ殿下とトリステインの大使殿が到着しました」

「ふむ、通せ。今日の祝杯は大勢の方が楽しいからな」

「はっ！」

すぐにトリステインの大使はきた。薄い桃色の頭髪を持つルイズを筆頭に黒髪の少年、長髪で羽帽子をかぶった貴族が。

「これは何の騒ぎだい？」

ウェールズが宴となった宴会を見てひきつる。すかさずバリーと呼ばれる老メイジがウェールズに耳打ちする。するとひきつっていた顔は驚きに変わり、大きな声で叫んだのだ。

「ルルーシュ！ スザク！ ついに完成したのか、アルビオンの翼が！！」

「アルビオンの翼？」

聞きなれない単語にジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルドは首をひねった。おかしい、そんな情報はなかったとぶつぶつ考え始めた。

「スザク？」

サイトはサイトでなんか四聖獣に出てくる南の炎の鳥を連想した。そしてウェールズが見る視線の先には、漆黒から紫に変わるような髪色を持つ美形と、明らかに僕日本人ですと主張している穏和な笑みを浮かべているスザクがいた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・おかしいわね、耳が悪くなったかしら」

ルイズはルルーシュのギアスにより二人の存在、声、名前を認識できない。

ウェールズは嬉しそうに二人に駆け寄り、話をしていた。ルイズは先にジエームズ一世の元に向かったが、サイトとワルドはウェー

ルズの後を追ってルルーシュたちのところへ急ぐ。

「おい！ あんた日本人か！？」

サイトは突つかからんばかりの勢いでスザクに問う。

「日本人か。うん。確かに僕は日本人だけど、名誉ブリタニア人でもあるよ？」

「名誉ブリ何たら？ いやいい、日本人だな！？ いやあ、俺も日本人なんだけども、同郷の人がいてよかった」

確かにスザクは目の前の少年がハルケギニアでも珍しい漆黒の髪であることに気づいた。しかし、まさか同じ日本人が、ここに召還されているというのも驚きだ。

「そうか、君も……サモンサーヴァントで拉致されたのか」

「そうなんだよ！ ちんちくりんの薄いピンクの髪の奴でさ、貴族貴族、だからうやまえていうとんでもねえ女の子なんだよ。犬扱いしてくるし、ムチで攻撃してくるし、高慢知己だし、気位がすごい高い奴！」

ここぞとばかりにルイズの悪口をあげる少年。それほどまでに不満があつたのかとスザクは内心引いていた。

しかし、その特徴にぴったいあてはまる元ご主人がいる身としては、乾いた笑いしか出せなかった。

「ところでルルーシュ。君の元マスターなんだろう？ ミス・ヴァリエールに挨拶しないのか？」

「元マスター？」

懐疑的な目でルイズを見つめ、スザクとルルーシュを見つめ、ウエルズを見つめる。

「僕はふつうに女の子が好きだよ」

真剣な顔でウエルズはサイトをホモ扱いした。

「俺だって男色の気はないって！ いや、使い魔って一生主に仕えるんじゃないのか？ ルイズが得意顔で説明してたんだけど」

「契約の矛盾を縫って使い魔の契約を誤魔化したんだ。死んだら新しいの召還できるって言ってた？」

「言ってた。というとか？ 俺は二人が逃げたから使い魔として拉致されたってことか？」

「うん。そういうことだね」

「俺代用品かよー!!」

嘘だろとか、あの契約はファーストじゃなくてサードだったのかとか。シエスタがべた褒めしてた元使い魔って……だとか。なにやら比較して、落ち込んでとおもしろい少年だった。

「っていつか使い魔って解約できるのかよー!!」

「一週間だけね」

「クーリングオフと同じ期間かよ……うわあ、俺、ここに来てもう一週間以上経っちまってる。いや、契約時の不履行を理由に突っぱねられるか？」

「無理だね」

「俺報われねえ!!」

本当のことをいいたくない故に適当に嘘をついた。

隣のウェールズは苦笑いしながら聞いていたが、ワルドにとっては気が気じゃない。ルイズに他の使い魔がいた。始祖の使い魔であるサイトは間抜けな少年であるため、出し抜くことは容易だ。

だが、これは予想外だった。一人は両手にガンダールヴとウィンダールヴのルーンを手にしていて、サイトが同じ紋章だとデルフとともに興奮していた。それはおいておき、もう一人の少年、彼の額にはミヨズニトニルンのルーンが刻まれている。

（あれはシェフィールド殿と同じルーン。何故だ！ 始祖の使い魔は四人だけのはずだ）

内面激しく聞きたいことがあった。だが、妙な情報収集をしていれば目立つ。ウェールズを殺害するためにはもう少し任務を優先させ、私情を抑える。

「……おい、その黒いの」

「誰が黒いのだ！ 俺にはサイトって名前があるんだ」

「そうか。すまんサイト。私はルルーシュでいい。お前怪我してるだろう。見せてみる」

「……………ん、まあ、怪我してるけどよ。別に大したことねえよ」

「バカかお前は。サイト、左手が炭素になりかけの一步手前の癖に意地張るな」

『本当かよ！？ 相棒！！』

デルフリンガーがそこまでひどいとは思わなかったのか声を張り上げる。

「インテリジェンスソードか。僕も持つてるんだ」

スザクが出したのは大業物、切れ味だけなら竜の鱗だって切れる優れ物だ。

ランスロット制作の折りに風石を鍔に加工していると、なにやら剣として一段階進化したのか、それともルルーシュが接合するとき、精霊に適当に指示していたせいかは分からないが、偶然の産物としてできた物だ。

「ただし、結構寡黙だけどね」

『……………有無』

「まあ、いい。ほら左腕をよこせ」

スザクの発言に締まらなくなったのか、ルルーシュがサイトを呼

ぶ。

「わ、わかった」

サイトも少し場の空気がおかしくなったのを感じ取り、素直に応じた。

「ひどいな．．．．．これは。電撃系の魔法でも食らわされたつてところか」

『兄ちゃんすげえな！ そんなことまで分かるのかよ！』

「ああ。この水膨れは火傷に近い感じだが、火傷だとこの傷のつき方はおかしいからな．．．．．最悪神経に影響してたかもしれない。そこは相手の力量が確かだったのだろう」

「．．．．．なんか、微妙な気分だ」

自分を殺しかけた相手を褒められるのは不愉快なのか、サイトは苦虫を噛み潰したかのような顔をする。ルルーシュは失言だったかと思ったが謝らない。事実であるからだ。

「さて、あまり動くなよ。『精霊よ、この者の傷を治してくれ』」

「ん？ おお！ おおおおー！！」

『驚いた！ こりゃあ、驚かされた！！ 兄ちゃんは精霊魔法が使えんのかー！！』

サイトとデルフはともに驚いた。ルルーシュが杖なしに、詠唱も

適当に行っているであろうはずなのに、傷の修復を行っていた。それも空気中から幾筋もの光がサイトの腕に集まり、その傷を癒していく。

「へえ、なんかタバサとかモンちゃんがやってくれる治療より格段にすごいな。ありがとうルルーシュ。助かったぜ」

腕をぶんぶん振り回し、修復具合を確かめるサイト。

「モンちゃん？」

「いや、学園によ、ギーシュつつ貴族がいてさ、ナルシスト全開の。前にすげ強い平民がいたせいで俺の扱い悪くてよ。週に二、三度水メイジの世話になってたんだよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・へえ、迷惑な話だね」

スザクは確信した。それは自分とルルーシュであると。

「でさ、モンちゃんはそのギーシュに何故か惚れているんだが。男だからあんたもギーシュの内面がどうなってるのか一緒に考えてっていわれてさ。いつまでもルイズに治療魔法の代金せびるのもイヤだったからモンちゃんの相談に乗ってたんだ。治療費浮かせるために」

なんか話の展開が読めてきたぞ・・・・・・・・とスザクは内心で思った。

「なにをトチ狂ったかモンちゃんと俺がつき合ってるつつ噂が流れてギーシュが決闘申し込んできたんだ。んで、まあ俺が勝ったん

「ただど……場の空気がすげえ悪くなっちまって」

「明らかに浮気を止めようとした男が勝つのが王道なのに、君が勝っちゃったら、ねえ？」

「いや、空気読もうとしたんだけど……」

そこまでギーシュは弱くなかったが、残念ながらデルフリンガーを手にした後での話だった。土くれのフーケと戦ったときの感じを思い出してゴーレムを裁いていくと、あっけなくギーシュに勝ってしまった。

「ま、モンちゃんがギーシュと演劇みたいなやり取りしてさ。よく分からないうちに仲直りしちゃったんだよ」

それで治療を受ける際はモンモランシーに優先的に頼むらしい。ただ、会話の内容が全部ギーシュとのノロケなので聞く方のサイトにとっては果てしなくどうでもいい内容だったが。

『でもよお、タバサつつう嬢ちゃんは治療が得意じゃないつっても曲がりなりにもトライアングルじゃねえか。兄ちゃん、あんた、系統と精霊、どっちも使えるだろ？』

「否定はしない」

『こりゃあますます驚いた！ ルースウェルの再来ってか！！』

「るーすつえる？」

『おうよ！ ブリミルがもっとも恐れた仲間だ。しかし、ルース

ウエルはよお、ブリミルに嫌われてるって思わないほど鈍感だよお・
．．．．．あり？　ブリミルって誰だ？』

「また度忘れかよ．．．．．」

『いやあ、悪いね相棒。なにより昔のことだしな。それよりも兄ちゃん、少し忠告しとくぜ？』

「なんだ」

『いや、悪いことはいわねえからよお、死ぬんじゃねえってことだけ伝えとくわ』

「．．．．．何なんだ？」

『ルースウエルは十字架にかけられてよう、「失われたルーン」を再現できる』

「失われたルーン？」

サイトとワルドは興味深い言葉を聞いた。

『ああ、いや、俺の思い違いかもしれねえ。だけどよ、29個のルーンにはそれぞれ意味がある。しかし、ルースウエルはそれをすべて凌駕するルーンを作ったことで十字架にかけられたような・
．．．』

「はつきりしないな」

『うっせいやい！　こちらら6000年も剣やってんだ！　いちい

ち覚えていられるか!』

「いいから、早く続き」

サイトに促され、納得できない風だがデルフリンガーは続きを物語った。

『あー、そうだそうだ! 死の否定、再誕だよ、相棒。思えばこれは虚無【ゼロ】を生み出した大本ともいえる。系統魔法も虚無魔法も、すべてブリミルが作った訳じゃない。歴史の影で無くなったルーンがある』

『30番目の失われたルーンの名前はバルドルだ。再誕の意味を持つはずなんだが』

うーんとデルフリンガーは無い頭を使って考える。

『わりい、これ以上は思い出せないわ』

全員がずっこけたのは無理もなかった。

「ボケかよ!?! あんだけ引っ張っておいてなんて鋭いキラーパスするんだよデルフー!!」

『ああー、相棒の声なんて聞こえないね。だって俺剣だもんよ』

「聞こえてんだろ、お前」

ルルーシュは剣と漫才を始めたサイトをみながら考える。自らが持つ知識と、ルーン文字、バルドル、ルースウェル。記憶の片隅、

それもビッグネームの息子だったようなと頭を転がしていると、唐突に思い出した。

（バルドル神のことか？ 確か、ルーン文字の秘密を知ったオーデイン神の息子ではないか！）

彼はもつとも美しく、もつとも賢く、もつとも慈悲深い神だった。しかし、兄弟によって亡きものとされ、ラグナレクの後復活する。そして、オーデイン神を磔にした十字架も、バルドル神が復活した十字架も『十字架の夢』と呼ばれている。

しかし、アングロ・サクソンにとって、十字架とは異境の処刑台だ。そして磔刑というイギリスのキリスト文化を理解するために制作した異教の十字架。

アングロ・サクソンが、ルーン文字を刻んだそれは、『ルースウエル十字架』と伝えられている。

おそらくデルフリンガーが知っているのは、この世界でラグナロクが起こったからかもしれない。それでは、ここにはアーカーシャの剣でもあるのかと思っただが、それはないと信じたい。

あれはCの世界につながる巨大な端末だ。そしてCの世界とは人の意思が集中したネットワーク。人の意思が達する終着点。あんなもの、この世界にあってなるものか。

ルルーシュの思考は加速していった。

それは敵の先兵で（前書き）

ルルーシュはルイズが嫌い。

そしてワルドが結婚式。しかし大きな誤算。

それは敵の先兵で

「ああ、諸君？　それでうやむやになってしまったが、アルビオンの翼とは何かね？　気になって仕方がないんだが」

「おお、ワルド郷。アルビオンの翼とは、ルルーシュとスザクが制作したゴーレムのことさ！」

「ゴーレム？」

ワルドはとたんに顔をしかめる。風の国で何故ゴーレムを？　とでも言いたげであった。

「まあ、レコンキスタとの戦力差をひっくり返すほどの物さ！」

「そ、そうですね……」

興奮してウェールズは話すが、ワルドの表情はひきつっていた。

さて、ここで現実的な話をと、ワルドは考える。たった一体のゴーレムで戦局差をひっくり返せるかどうか。

むろん、無理だ。精神力をいかほど使えるのかは知らないが、こちらは浮かれているが魔法を集中的に食らったゴーレムなど動くことなどできない。それに一体だけとは。ミヨズニトニルンが開発したとはいえ、せいぜい大型のガーゴイルか何かだろうと結論づけた。

（ふむ、どうやらアルビオン王国は戦局を読み間違えたらしいな。これで作戦は変更しなくてもいい。まったく、なにがアルビオンの

翼だ。大層な名前をつけよって)

嫌らしい笑みを浮かべ内心ほくそ笑んでいた。

「ウェールズ殿下、姫様より密書を預かっております。ご確認を」

「ああ。分かった。しかし、もしやこれは無駄になるかもしれないけどね」

「と、いうと?」

「なあに、簡単に負けてやるほど、アルビオンは安くないというとき」

「????」

ルイズでも分かる。入ってくる情報からアルビオンが危機的状況に陥っているのが。しかし、ここの兵たちは絶望していない。来る前にアンリエッタ姫様から渡された密書には、おそらく亡命が記されていた。それをジエームズ一世陛下に渡した際には『心配無用』と心強い返事をもらった。

そしてウェールズ皇太子の顔を見ても分かる。彼らには絶望が見えていなかった。

(どうしてなの? レコンキスタは、アルビオンの兵の何倍もいるんでしょ!?)

気でも狂ってしまったのかと失礼なことを考えながら、ルイズはウェールズの後についていく。サイトも、ワルドもだ。

「恥ずかしながら、宝物だね。こうして保管しておかないと落ち着かないんだ」

ウェールズはアンリエッタの手紙を出した。すでに何回と何十回と読まれた手紙だ。

手垢と擦り切れた紙がウェールズがどれほど大事にしていたかが伺いしれる。

ルイズは意を決してウェールズに意見する。

「殿下！ トリステインに亡命してください！ 手紙には亡命を勧めることが書かれていたはずです」

「……確かに、それを臭わせる旨の意味はあった」

「では！」

「だが、残念ながらお断りするよ」

「ど……どうしてですか！ 姫様はあなたの無事を何よりも心配しています！」

「それでもだ。それに、我らがここを引けば、トリステインも戦場になるかも知れない」

「そ、そんな……っ！」

「亡国の王子など戦争のきっかけになる。被害はもうここだけではない」

と、先日まではウェールズも考えていた。

「しかしね、ミス・ヴァリエール。僕たちには翼があるんだ」

誇らしげに、ウェールズはいった。

「レコンキスタに立ち向かうための、アルビオンの翼が」

また聞こえてくるアルビオンの翼という単語にワルドは顔をしかめた。

「なあ、ウェールズ」

「ちょー！？ あんた、ウェールズ殿下に失礼よ！！」

「ああ、いいよ。サイト君とはよき友人になれそうだ」

スザクと同じ身分で相手を見ない人物。ウェールズの周りでは希少な存在だった。スザクもルルーシュも、ウェールズにとってよき友人。そして、二人と仲良く話していたサイトとも仲良くになれるだろうと感覚的に思っていた。

「すみません、使い魔が」

「いや、いいよ。それでなにな、サイト君」

「はあ、いやまあ、何でこの人たちはあんなに楽しそうなんだ？

戦争・・・・・・・・なんだろ」

「楽しいのではなく嬉しいのだよ。実際、昨日までの私たちにはとうていレコンキスタに勝てるとは思わなかったがね」

「それで、なんで勝てると思ったんだ？」

「ルルーシュのおかげさ」

「ルルーシュの？」

「彼は言ったんだ。どんなに辛くとも希望が見える明日がほしいと。そんな彼が私たちに希望を見せてくれたのだ。アルビオンの明日は、決して暗くはならないだろう」

「ルルーシュが？ あの皮肉屋がねえ」

「彼は厳しいリアリストなだけさ。その実言ってることに間違いはない」

ズバズバと言われたことを思い出したのか、サイトの顔が少し微妙な顔になった。

「元々、拾った命だったのだ。だったら少なくとも死ぬかもしれないんじゃないかって勝つかも知らない戦の方がいいだろう？ まあ、気の持ちようなのは否めないが」

「それで勝つ算段は？」

「無いんじゃないかな」

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・」」」

「いや、誤解しないでくれ。別に負けるとは思っていないが、勝つとも思っていないだけだ」

それって泥沼じゃないかとサイトたちは思った。

その実ウェールズはルルーシュからランスロットとガウエインの性能を聞いていた。しかし、そんな絵空事を完成させるわけないと踏んでいたが、ルルーシュの制作段階を見て思ったのだ。

これは勝てるかも知れないと。

「ここの人たち、戦局がわかっていないんだわ！ もういい、失礼します！」

「あ、おい、ルイズ！」

サイトとルイズは部屋から出て行ってしまった。

「君はいいのかい、ワルド郷」

「え、ええ。失礼すると言いたいところですが、少し殿下に頼みごとがございます」

「頼みごと？」

「明日、僕とルイズの結婚式をここアルビオンで是非とも行いたく思います」

「ふむ、明日か。まあ、めでたき門出だ。景気付けにいいかもしれないな」

「はは。ありがとうございます」

「新婦はこのことを？」

「ええ、承知してくれますよ」

「では、明日に」

「ええ。お願いします」

ワルドは順調通りに進む展開に思わず笑いたくなった。

（これでアンリエッタの手紙とウェールズの死、ルイズを手にする事ができるぞ！ 僕はやってやるんだ、レコンキスタで、大きな成果を上げて、聖地に……）

ただ、これはワルドの勝手な妄想でしかなかったことは後に判明した。

「では、ワルド郷、新婦との永遠の愛を始祖に誓うか？」

なぜ、こんな事になっているのか。ワルドは内心冷や汗をかいていた。隣にはいきなり連れてこられ、困惑するルイズ。そして何故かワルドを親の敵のように睨むサイト。そして司祭役のウェールズ。

そう。

そもそも、ワルドは初歩的なミスを犯していた。

今は戦争中である。そして何故か先勝ムードのアルビオン。レコンキスタに絶望的なまでに追いつめられていた彼らなら、こんな子爵の結婚式に参加などしなかったであろう。

しかし、ワルドは視線を後ろに向けた。

何故か、そこにはサイト以外のたくさんのアルビオン兵がワルドの結婚を祝うために集まってきたのだ。

今は戦争中だ。それを、こつも簡単に人が集まるものだと考えていなかった。

ウェールズの向こうではルルーシュとスザクがジエームズ一世とともに着席し、微笑ましげな視線を向けている。ただしルルーシュとスザクはルイズが腰を落ち着ける生け贄になったのかとばかりにワルドへ同情のまなざしを送っていた。

「ワルド卿？」

「え、ああ、はい。始祖に誓います」

これでは、手紙の奪還はおろか、ウェールズに手を出すこともできない。しかも、始祖の使い魔のルルーシュがいるのだ。サイトにライトニング・クラウドで傷つけた傷を治せるほどの水メイジが。

おのれと、自らのミスとルルーシュを睨む。こんな筈じゃなかった。

「それでは新婦。ワルド卿を夫として認め、始祖へ永遠の愛を誓う

か？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「新婦？」

ルイズは何も言わない。ただ、座席のサイトを見て、そしてワルドをみた。

「大丈夫、大丈夫だ。緊張することはないよ」

自分にも言い聞かせるようにワルドは喋る。しかし、ルイズは首を振って拒絶を示した。

「ごめんなさい、ワルド様、ウェールズ殿下。私、この結婚には承諾できないわ」

ざわつくアルビオン兵。嬉しそうな顔をするサイト。何故だと言わんばかりにワルド卿への後押しを惜しみにくしたいルルーシュとスザク。

「どうして、君は」

「・・・・・・・・ごめんなさい。貴方のことは好きだったわ。でも、それは懂れだったのよ」

「・・・・・・・・そんな」

「私、まだ子供よ？ 魔法学院だって卒業してないし、魔法だってうまく使えない」

「それは君の魅力に関係ないじゃないか。君は才能あるメイジだ」

「嘘、そんなの嘘よ」

「嘘なんかじゃないよ。君は、きっと魔法使いとして大成する。世界だ。世界を変えるほど力を持っているんだよ！」

「私、そんなに魅力的じゃないもの！ ヒステリックだし、嫉妬深いし、暴力だつてすぐにふるうわ！」

「スザク」

「なんだい、ルルーシュ」

「あいつ、自覚あつたんだな」

「そうみたいだね」

スザクとルルーシュの会話は聞き取れない筈なのに、ルイズは何故か二人の周辺を睨みつけた。

「それも、君の魅力の一つだよ」

「ワルド様……」

二人の世界に入ってしまったのだが、周りは微妙な空気になった。子供で、ヒステリックで、嫉妬深くて、暴力的。それを魅力だと

断言したワルドに男性陣から惜しめない拍手が漏れた。いや、女性陣は微妙な顔をしている。ワルドのロリコン発言に少し引いているようだ。

「でもダメよ！ 私貴方とは結婚できないわ。違いすぎるもの」

「ルイズ、君はすばらしいメイジなんだよ。僕がそれを証明してあげるんだ」

「それは愛じゃないわ！ 私をそんな色眼鏡で見ないでよ！ 私、魔法が使えなくてバカにされているの！ それなのに、貴方の隣に立てるわけじゃないじゃない！！」

「君を僕は変えてみせる」

「それって今の私は魅力的じゃないって事？ なら、始祖に誓った想いは間違っているの？」

「君に誓った愛に嘘はない」

ああいえばこういう。ルルーシュは冷めた目つきでルイズを観察していた。ワルドも若干苛ついていた。

「あなた、私じゃなくってあるかも知れない魔法を見ているだけじゃない！！ そんな侮辱ってないわ！！」

「落ち着くんだ、ルイズ」

「落ち着けるわけじゃない！」

すっかり威嚇する猫のような状態になってしまったルイズ。ワルドもそこまで言われれば手を伸ばそうとした瞬間に固まったのも無理はなかった。

「あゝ、ワルド卿？ 新婦はこの結婚を望んでいないようだが・・・」

「・・・・・・違っ」

「違っ違っ違っ違っ違っ！！」

ワルドは突然発狂したかのようにルイズの肩をつかむ。恐ろしい握力なのか、ルイズの顔が苦痛にゆがんだ。

「子爵！？ いきなり何を！」

「うるさい！ 黙れ！！」

ワルドはルイズを睨みつけ、強引にその体を抱き寄せる。

「ワルド様・・・痛いわ・・・」

「ここまでいってもダメなんだね。僕のルイズ」

「私は、ありもしない魔法の才能で勝手に期待されて結婚するなんて、そんなのイヤよ！」

ルイズが暴れたため、ウェールズは杖を引き抜きワルドと対峙す

る。このままではルイズに当たってしまうが、何の装備もなく様子のおかしいワルドに近づくのは自殺行為だからだ。

ワルドは腰に差していた杖剣を引き抜き、ウェールズへと突きつける。

「……これは、何の冗談かな？　ワルド卿」

「知れたこと。こんな茶番にもうつき合わされたくないのだよ」

その場の全員が思った。茶番を見せられたのは自分たちだと。

「ウェールズ殿下になんたることを！　そこを動くな！」

「ふん、ウィンドカッター」

「な！　ばかな！　こんな室内で魔法だと！？」

「やめて、ワルド！　いったいどうしたって言うのよ！」

「ああ、ルイズ。僕のかわいいルイズ。僕はね、ある任務を任されていたんだ」

芝居がかった口調でワルドは話しかける。時には感情を出し、機械的に。トリスティンに詳しい貴族は彼らの演劇好きを知っているが、縁の薄いものはただのおかしい人物にしか見えていない。

「一つは君のポケットに入っているアンリエッタの手紙だ」

ルイズのポケットから手紙を抜き取る。

「やめて！ それは姫様の……」

「ゲルマニアとの同盟を阻害する証拠の手紙だろう？ さあ、後二つだ。まずは……」

ワルドがウェールズの胸に杖剣を突き立てようとする。しかし、ウェールズもただ傍観していたわけではない。杖にブレードをかけ、少し離れたところでワルドの剣に応戦した。

「ちい、僕のために死んでくれないか？」

「何をいうかと思えば！ 君はトリスティンの貴族だろう、ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルド！」

「かつてはな！ だが、今はレコンキスタのジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルドだ！」

ワルドの偏在がウェールズに襲いかかり、ウェールズは地面に倒れた。首もとに杖剣を押しつける。

「……なっ！？」「」

誰もが絶句した。今まさに戦争をしている相手の先兵が忍び込み、あまつさえウェールズを人質に取りながら威嚇しているのだ。

「僕はアンリエッタの手紙とウェールズの殺害、そしてルイズ、君が必要だった」

「なんで私なんかを……」

「君は虚無の担い手だ。われわれレコンキスタには、象徴となるべきシンボルが必要だ」

「それが私だっただけって事！？ ふざけないで！！」

「ほら、聞こえてくるだろう。この聖堂を囲むように進行するレコンキスタの足音が」

「残念ながら、それは無駄になるぞ？」

ルルーシュがワルドに近づいた。ジェームズ一世もウェールズの為に動きたかったが、病床で寝かせていた老人を急に活動させたのが原因か。今は軽い息切れを起こしていて役に立つ気配はなかった。

「これはこれは始祖の使い魔君。元主の危機に助けにきたのかね？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・え？」

何故かルイズはワルドの言葉に反応した。

「いや、おまえは状況を理解しているのか気になってな」

「状況？ はっ！ そんなものとづくに理解しているさ。君たちがあと数分も経たないうちに殺されるって事がね！！」

ワルドの威圧に負けたのか、ルイズは糸が切れた人形のように崩れ落ちる。気絶はしていないようだが膝がガクガクと震えていた。それをみたサイトは激情に駆られた。

「てんめえ、覚悟しろよ！」

デルフリンガーを抱えたサイトがワルドとルイズの間に割ってはいる。杖剣で応戦したが、偏在がウェールズを伴って後ろに下がる。ルイズの肩を掴んでいたワルドの手が離れたがウェールズはさすがにはなさなかったようで、今も杖剣をウェールズに向けている。

「何かね、現使い魔君」

「てめえ、よくもルイズを泣かせたな！！」

「サイト、やめろ。その小娘だけはやめておけ」

必死でルルーシュはサイトを説得する。しかし二人の話はどんどん進んでいった。

「叶わない恋に身を焦がされたか！ 愚かな使い魔だな、ガンダールヴ！」

「うつせえ！ 俺はてめえを許さねえ、許したくねえ！！」

「あの、バカ！ 状況を理解しているのか。最悪の一手だぞ」

「ドキドキすんだよ」

「ふ、何を言うかと思えば」

「新しい性癖に目覚めたのか……」

「ルルーシュ！！ さっきからうつせえぞ！」

場の空気を壊す発言しかしていなかったが、ルイズだけは話を理解できなかった。

「いいだろう。ならば花嫁を君が浚っていきたまえ。ただ、できたらの話だがな!!」

「いくぞ！ デルフ！ さあ、覚悟しろよワルド！」

『おおお!! 相棒の力が溢れてるぜ!!』

「君はこの『閃光』のワルドに勝てると思っているのかい？ そうだとしたら残念だな」

「俺はルイズの使い魔だ。だから、あいつの悲しむ顔など見たくねえんだよ。『閃光』だあ!？ そんなもん、何の自慢にもなりやしねえ！ 俺はあいつの………ゼロの使い魔だ!!」

「いいだろう。君には私が直接相手をしてやろう………だが、ほかのアルビオン兵に動かれるのはいささか都合が悪い」

—— ユビキタス・デル・ウインデ ——

「さあ、かかってきたまえよ。ゼロの使い魔君!!」

風の偏在を唱え、ワルドは幾人に分身する。何体かは控えていたアルビオン貴族。そして一体はウェールズを人質に取ったままだ。本体はサイトに向かい、もう一体はルルーシュに向かった。

「私は戦闘には向いていないのだがな」

「知っている。だから早めに始末したいのだ。始祖の使い魔は何体もいない。ミヨズニトニルンは、シェフィールド殿だけで十分だ」

聖堂から離れたロサイス、サウスゴータから攻めてくるレコンキスタ。その手には杖が握られていた。それだけで彼らがメイジという事はわかっただろう。

【止まれ】

そんな彼らの目の前に足ったのは一体のゴーレムだった。5メートル程しかない装飾華美なゴーレム。

スザクガルルーシュに言われて纖滅しにきたのだ。
ランスロット・エクルベイジュ。おそらく、竜種と戦っても負けは無いであろうアルビオンの翼。

（僕には、これ以外の方法はわからないから）

エナジーウイングが展開され、レコンキスタの前方で飛翔する。
ゴーレムが飛翔することに驚いて、レコンキスタは杖を構える。風、火の魔法が展開され、ランスロット・エクルベイジュに飛んでいった。

（だから、争いを争いで否定するしかないんだ）

エナジーウイングからメイジが放った魔法より、さらに強力な弾が飛来する。それは大きな風の塊だった。

地面が陥没し、メイジが吹き飛ぶ。遠征軍のようだが、今までの

アルビオン戦力なら過剰戦力ととられるだろう。

しかし、今回は相手が悪かった。

スラッシュハーケンが射出され、レコンキスタの軍勢は強化ワイヤーに道を阻まれた。スザクは飛翔したままスラッシュハーケンを大木に固定したのち、全速力でレコンキスタの周りを旋回する。スラッシュハーケンに絡めとられ、綺麗な円心上から人が消えていく。

人が雪崩のようになっていた。それも、重たい甲冑で身を包んだ騎士が大半だ。馬に乗っていた將軍はもつと酷いのかも知れない。それでも、未だに戦意を失わない。

元々、ランスロットはこのように人間相手に戦うように作られた機体じゃない。しかし、メイジにはナイトメアに匹敵する殺傷能力を持った魔法が存在する。だから殺さなくてはいけない。何度も敵を見逃せば、それだけアルビオンに被害がでる。

だから彼らがどういう存在でも、消し去るべきであった。

【ヴァリス装填、レールガン起動】

ランスロット・エクルベイジユの手に握られた銃が薄く発光し電気を帯びる。内蔵された風石が、一気に発動した。

銃口は聖堂に向かってくるレコンキスタの軍勢、ちょうど戦陣を仕切る部隊長のメイジに向けられる。

画面に装填準備の終わりを伝える表示が現れる。

【僕は、もう迷わない。この銃口で、未来を切り開く！】

圧倒的なエネルギーを纏った銃弾は、地面を抉りながら飛来し、部隊長以下数百名程を巻き込んで、ある程度のところで爆破した。

それは敵の先兵で（後書き）

衆人觀衆の中ふられるワルド。

ガンダールヴとして覚醒しつつあるサイト。

正直シェフィールドがミヨズニトニルンだってワルドが原作で分かっていたかどうか知らない。

ここではオリバー・クロムウェルがシェフィールドの紹介の際にそう口走って自身の株を上げようとしたため、シェフィールド＝ミヨズニトニルンの公式が成り立っているということ。

ダメですかね？

それは少年の力で（前書き）

ワールドVSサイト

短いです。

それは少年の力で

「許さねえ！ ルイズはお前のこと信用していたんだぞ！ 婚約者のお前を……幼い頃から憧れだったお前を！」

「信用には報いなければならぬ決まりなどない。どうしたガンダールヴ！ 伝説の使い魔とはお飾りの称号か！」

ウインドカッターがサイトの肩に迫り、デルフリンガーがそれをはじいた。

「デルフ？」

『そうだ、そうだよガンダールヴ！ やっと思いついたぜ！ 嬉しいねえ、そうこなくっちゃねえ！ また俺を使ってくれるのかよ。だったらこんなに嬉しいことはねえ！』

「どうしたんだよデルフ！」

『いやあ、長年剣をやっているとどうしても凡くらが俺っちを使うのに耐えられなくて、てめえでてめえの体を変えたんだった。安心しな相棒！ ちやちな魔法はこのデルフリンガー様が防いでやる。だから相棒は娘っこへの想いを、心を振るわせな！』

「なるほど、棧橋で僕のライトニング・クラウドを防いだのはその剣のせいかな」

「あの仮面やろう、お前だったのか！」

「なにぶんルイズが召還したのはガンダールヴだと聞いていたからな。実力の程を試したただけだ。もっとも、私が本気で相手をするには力不足だったようだかな」

「てめえ……っ！」

サイトはワルドの言葉に心が揺さぶられた。ルイズも、国も、ウエルズも、姫様も、すべての人間を裏切りやがった。そんな人間に一太刀加えることもできない自分にも腹が立った。

「やはり貴様、ルイズに恋でもしていたか？ 愚かだなガンダールヴ！ あの傲慢なルイズが君ごとき平民に振り向くわけないだろう！ ささやかな同情を思慕とでも勘違いしたか！」

「そんなんじゃない、ただ、俺は、あいつを守ってやりてえ。あいつの悲しむ顔がみたくねえ、そしてお前が気に食わねえ！！ 理由なんざ、それだけで十分だ！」

「愚か！ あまりにも愚がすぎるなガンダールヴ！ それだけで命を懸けるか！」

「それだけじゃねえ」

「なに？」

サイトは今しばらく考える。ルイズの行動はどれもこれも理不尽だった。人間扱いしない。ヒステリックで傲慢で、こっちの話なんて聞かないし一方的に鞭でたたいてくる。知識をひらけしてバカに

してくる。けど、ちゃんと教えてくれる。

ルイズはすげえ。あんなに小さな体で、今までどんな罵倒にも耐えてきた。

なんとルイズと離別を考えたかわからないが、この小さなご主人様は時たま花咲くような笑顔を俺に向けてくれた。

それが、どんな理不尽も上回るほど強烈で、最初の契約よりも鮮烈だった。

ただ。彼女を守りたい。どんな理不尽からも。その笑顔を守るためなら、別にこの体を盾にしてもいい。

「ドキドキすんだよ」

そう。たぶん、たったそれだけが理由だったのかもしれない。男が好きな女の子を守るなんて、これ以上の大役はほかにない。

あの召還の日、一目見たとき、俺はルイズに心を奪われた。

「だったら、やることなんざ決まってるじゃねえか」

だからルイズを守るんだ。恋なんて大層な感情じゃねえ。愛なんて壮大な想いじゃねえ。もっと人間くさくて、自分でも理解できなくて、強烈な感情がこの体をただ前へと進ませるんだ。

「俺はルイズの笑顔を守ってやりたい！！ だから俺は戦うんだ！！」

『おお！ 相棒、そうだ！ もつと心を振るわせる！ ガンダール
ヴは剣で戦うんじゃないやねえ！ 心を振るわせて戦うんだ！ 娘っこへ
の想いを爆発させれば、それがてめえの力になる！！』

「おおおおおおおおおおおおおッッッ！！」

サイトは吼える。ワルドの体を、その左側を通り抜ける。後ろに
いるルイズに、少しでも戦闘の余波がいかないように、デルフリ
ンガーをワルドの左腕に叩きつける。

鈍器から剣に変わったデルフの一撃は、申し訳程度にワルドがた
たき込んだ杖剣を破壊し、ワルドの左腕を容赦なく切り落とした。

「ぐぬ……………っ！！ く、まさか、この閃光のワルドが遅れ
を取るとは……………っ！！」

「さあて覚悟しやがれ！！」

「残念だがつきあう義理はない、さらばだガンダールヴ。次こそは
僕が貴様の首を取りに行こうではないか！！」

高笑いをしながらワルドはステンドグラスを突き破って逃走した。
サイトは未だ気絶したルイズの元へといく。

「へへ、守ったぜ、ご主人様よお……………」

『さすがだぜ相棒！ 俺っち今のお前さんに惚れそうだぜ！！』

「マルトーさんみたいなこと言うな、でも、へへ」

薄い笑みを浮かべた。大切なものを守りきった安心感からか膝が崩れる。

「ああ、なんか、体中がいてえけど、悪い気分じゃねえな」

横にはルイズがいる。ワルドに連れ去られることもなく、守り切れたのだ。

ガンダールヴのルーンは徐々に輝きを失い始め、サイトの意識は闇に落ちた。

それは少年の力で（後書き）

ストックがない。

近いうちに更新が滞るかもです。

それは敵の誤算で（前書き）

ルルーシュVSワルド

それは敵の誤算で

「さて、私は貴様のことなど全く以て知らんのだが？」

「僕は元トリステイン貴族のワルド子爵だ。今はレコンキスタに所属しているよミヨズニトニルン」

「貴様、このルーンを知っているのか？」

「調べたからね」

ルルーシュはワルド子爵の偏在を相手取り、互いに一触即発の空気を出していた。

ワルドの足下には人質にされたウェールズがいる。そしてワルドの杖剣はそちらに向けられているため、ルルーシュが攻撃を仕掛ければ受けるしかないだろう。

しかし、それではウェールズを見殺しにする。何か良い案がないかと考える。

「動くなよミヨズニトニルン。僕は君に聞きたいことがあるんだ」

「………なんだ？」

「それは君のことさ。一人の虚無の担い手に一人の使い魔。もう一人の彼には刻まれていたな、右と左に。さて、貴様はミヨズニトニルンと何を刻まれた？」

「記すことさえはばかられるんじゃないか？ 名前など知ったこと

か」

「くつくつく、そうだな。それを聞くのは、君の四肢を両断してからでも遅くはない」

「この状況でか？　にらみ合いが続くだけだぞワルド卿」

「なに、私にとっては時間稼ぎが目的だからな」

ルルーシュは冷や汗をかく。理論で人は殺せるが、理論で人は動かないからだ。

ワルドがルルーシュの行動に不審を持てば、自らの命を犠牲にしてもウェールズを殺すだろう。偏在という便利な魔法は、命を奪っても風に戻る。だが、不確定な要素にわざわざ相手取るより、ここに向かってくるレコンキスタの物量で殺した方が確実だからだろう。ワルドに動く気配はない。ウェールズに杖剣を突き立て、にやにやとこちらに目を向けるだけだ。

「そこでガンダールヴが無惨に殺される様を見ておけ」

「ちッ・・・・・・・・」

ルルーシュの目の前には寸分違わないワルドがいる。異常な光景ではあるものの、それを可能にするのは魔法なのだ。偏在魔法はルルーシュも使った。風の魔法で分身を作り出す程度にしか覚えていないが。

（相手は偏在を使わせたらあちらに分がある。っち、こうなることが分かればランスロットを作る際に対策を考えておくべきだった）

「手も足もでないか？ 僕は始祖の使い魔にも勝てるんだ。風のスクエアは最強なのさ」

（ギアスを使おうにも、相手は魔法で作られた分身体にすぎん・・・。そこにギアスの大元である「意志の力」が働いてくれるかどうか・・・・・）

（イヤ待て、相手は「魔法」なのだ。そこに何かしらの突破口がある。魔法だからこそギアスは使えない。ならば・・・・・）

ルルーシュは胸のルーンを見る。魔法を使えることができるようになったルーンだが、本当にそれだけなのか。

メイジの魔法より強力に使える。それは精霊との親和性が抜群によかったからだ。今でもワルドの偏在に絡め取られた幾多の風の精霊を視認することができる。

「諦めたか。いさぎのよいことだ」

「ルルーシュ！ こいつの言うことなんか聞かなくて良い！」

ウェールズがルルーシュの背中を押そうとするが、そうもいかない。例えウェールズが即死間近の傷を負ったとしたら、ルルーシュでは蘇生できない。あの水の秘薬がここにはないのだ。戦争時に使えるものはすべて使っている。

だからこそ踏みとどまる。外の敵は考えなくて良い。目の前のワルドにだけ集中すればいい。

自分に言い聞かせる。スザクなら恐らくうまくやってくれているだろう。

（何か………何かないのか！）

晴天の霹靂か、それは物質的質量を伴って現れた。

ルルーシュの視界に、轟音をたてて現れた物がある。いや、物と呼ぶには失礼かもしれない。大きな竜だ。それも最近どこかでどこぞの魔法学院的な場所で主人に殴られ続けてキュイキュイ泣いていた泣き虫な竜だ。

『痛いよね、痛いよね』

なぜか竜の言葉が分かった。しかし、状況的にはなにも変わらない。場をただ混乱させたただけだ。しかし、その竜の後からもう一体の竜が現れた。

先日オーク鬼から助けてやった竜である。

『怖いよね、恐ろしいよね！ 何で水の顕族たるリヴァイアサンが風の国なんかにいるのね！ キュイキュイ！ こんな危ないところ、もう恐ろしくて飛んでもいられないわ！』

『おい、その泣き虫』

『キュイ？』

精霊を呼び寄せ、竜とのパスを繋ぐ。最初はあたりを見回し戦場になりつつあるこの場を見て混乱しかかっていたが、ルルーシュの

姿を認めるととたんに騒ぎだした。

『まあ！ 何で人間が大いなる意志の顕族になっているのね！？
これは大ニユースよ！ 精霊の王が復活したのね！ キュイキュイ
！』

『それは置いておけ。話がしたい』

『大いなる意志がシルフィとお話したいって！』

ルルーシュの頭に響いてきた幼いイルカのような甲高い声に顔をしかめる。

『主はどうした？ あのちいさい青髪だ』

『お姉さまの事なのね！ このお城の周りで大きなゴーレムがレコンキスタに対して恐ろしく暴れてたのね！ だから金髪の男のジャイアントモールで地面から来るって言ってたのね！ お姉さまと赤い髪も一緒よ！ シルフィは待ってたんだけど、リヴァイアサンの幼竜に見つかって逃げたらここに突撃しちゃったのね』

金髪で男、まあギーシュしかルルーシュには思い浮かばなかった訳だが。土の中から来るというのはいいい情報だ。

『そのジャイアントモールを誘導できないか？』

『あの子は無類の宝石好きなのね』

ルルーシュは小さく鍊金を唱える。ワルド相手に隙を見せず、ま

た瞬時に行えるのはここ数日使いまくった錬金において他にない。
小さくワルドの後ろに地面に大粒のルビーを形成する。

「後ろの水竜はヴィンダーヴのものか？　だとしても動くなよ」

「無理を言うな。私にこの者達に対しての命令権などない」

「なら、動けないように攻撃したまえ。竜が二体も現れたのはレコンキスタにとって想定外だからな。しかも、その幼竜のマスターが近くに待機しているはずだ。僕と行動を共にしたトライアングルメイジがな」

『何でヒゲと戦ってるのね？』

『あいつはレコンキスタだ。敵のスパイだった』

『スパイ！　なんて恥知らずな奴なの！　シルフィ達も騙してたのね！　キュイキュイ！　ところでレコンキスタって何なのね？』

「さあて、死ぬ算段は決まったかいミヨズニトニルン。早く竜を殺すんだ。でなければウェールズを殺すぞ」

ワルドの偏在はウェールズの首に剣を当て、少しだけ動かす。
ウェールズの首筋からは血が流れた。

「僕はウェールズを殺さなくてはいけないのだがな。君というイレギュラーと正面から戦うほど愚かではない」

「臆病なことだ。足下をすくわれないよう気をつけろよ」

「君の皮肉が、今では心地よく耳朵を打つ。負け犬の遠吠えだな」

外ではまだレコンキスタの足音が聞こえてくる。だが、一向に近づいてはこない。

「何を手間取っているんだ？」

ワルドは未だにこないレコンキスタに若干いらだちを覚えている。そしてワルドは気がついた。ルルーシュのそばに先ほどまでいた人物がいないことに。

「……もう一人はどうした!？」

「さあな。もしかレコンキスタと勇敢に戦いを行っているのではないか？」

「ふん。それこそ血祭りに上げられているな。確かめるまでもないだろう」

『おい、大いなる意志とはこのルーンのことか?』

『るーん? 違うのね。精霊に愛され、精霊を使役することが可能なのは韻竜やエルフもできるのね』

『では、大いなる意志とは?』

『シルフィ、子供だから難しいことは分からないのね。でもねでもね、お父様は大いなる意志を精霊王と呼んでいたのね。あなたはシ

ルフィより精霊をうまく扱えているし、精霊も嬉しそうなのね。それこそ、メイジともシルフィたちとも異なった精霊の使い方なのね」

『最後に一つ、精霊は魔法となった後に支配率の変化は可能なのか？』

『？ 可能なのね』

よし。算段は整った。正直、あのいけ好かない金髪を頼りにするのはイヤだが。

そして、そのモグラは、予想通りにルビーに反応し、突進をかました。

「・・・・・・・・・・なっ!？」

足場がぐらつき、ウェールズは土に埋もれていく。ワルドはイレギュラーの対応に困ったが、その身は魔法。怪我を考慮する前にウェールズを殺そうと杖剣をのばす。

だが、それは少々遅かったのだ。

「何！ なぜだ、なぜ僕の剣が消える!？」

「簡単な話だワルド卿。君は偏在という魔法だ。それは揺るぎ無い事実だろう」

「・・・・・・・・・・僕の魔法を、偏在に干渉したのか・・・・・・・・・・」

「余裕を見せすぎだな。確かにサイトを殺すためにイレギュラーの私を拘束する。悪くはないが勝機を失ったな」

「ぐぬぬ……………」

ワルドは忌々しげに顔をゆがめた。シルフィードと共心していたのか、タバサはすぐにウェールズを確保し、傷を治療する。ルル―シユとウェールズに向かって小さく「貸し一つ」と呟いた。

「これは、一体なんだというのだヴェルダンディ！」

ギーシユが突然暴れて進路を変えたモグラを叱責している。しかしモグラの手には大粒のルビーがあり、それを離すまいと必死になつて掴んでいた。

「これは……………！ ルビーかい！ なんと純正度の高いルビーだ。ああ、ごめんよヴェルダンディ、君はそれが欲しかったんだね」

モグラと抱き合う金髪の男。

ルル―シユは視界に納めながらワルドと対峙する。最早ワルドの偏在魔法は顔を残して霧散していた。

「これほどまでとはな。始祖の使い魔は伊達では勤まらないか」

「ああ。さつさと主の元まで戻れ。ただし、戻れたらの話だがな」

「……………ふん。何を言っているのか分らんが、確かに分が悪い。杖もなければ、もう顔しか偏在できない。君の喉笛に噛み

つこうにも、足がなければ動けない。ああ認めよう。私は君に負けたのだ」

「サイトにもな」

目の先ではルイズを守りきって地面に寝転がるサイトがいる。そばにワルドのものとおぼしき左腕があり、不覚を取って撤退したようだった。

「覚えておけよミヨズニトニルン。僕は君を必ず殺す」

「止めておけ。どう考えてもレコンキスタにブレインはいないだろう。私とチエスを繰り広げるには力量不足だな」

最後に、罵倒をたたきながらワルドは消えていく。そして、その後、外にいるスザクがレールガンを放つ音が聞こえてきた。

それは敵の誤算で（後書き）

魔法に干渉。

それは少年の選択で（前書き）

原作ブレイクへの布石です。

それは少年の選択で

なんだこれは。

ワルドが見たのは錚々たる惨害だった。最強を自負していたレコンキスタ。一部隊だというのは分かるが、それが反撃も許されず駆逐されていく。

それも、白の国にふさわしい純白のゴーレム。いや、少しだけ赤くも見えるが、返り血と硝煙の煙が邪魔で判別がつかなかった。

「そうか、あれが……アルビオンの翼か」

ただのゴーレムなのだと思っていた。しかし、それにしては小さく、またそれにしては速かった。おおよそ人間の活動限界すれすれの動きですら再現している。大きな巨人に小人が群がっているようにも見える。

剣を携え、空を滑空する姿はアルビオンの騎竜兵よりも勇ましかった。

圧倒的な物量で、一対多を繰り広げる様は、武人として理想の形だった。

「バカな……一体のゴーレムが……ここまで戦場をひっくり返すのか」

分かるのだ。分かってしまった。あれを作ったのが忌々しいミョズニトニルンだと。おそらく未知の鉱石で作り上げたゴーレムで、

衝撃に耐性があり柔軟性に優れている。武装は一つ一つがスクエア並の惨状を引き起こし、それをさも苦もなく発動できる。

人間を真似た、騎士のゴーレム。機動兵器といっても過言ではない。

ガリアでも、ゲルマニアでもあんなものは作れない。

銃口がこちらに向く。機械的な目を通して術者はこちらを見据えているのだろうか。

銃が発光する。何度も自分の唱えた魔法と酷似した現象が起こる。発電、蓄電、放電。ライトニングクラウドに似た暴力の力。圧倒的な質量。

まるで神の前で、雷の槌『ミヨルニル』を振りかぶられているようだった。

「・・・・・・・・あ・・・・・・・・」

銃口から、雷が飛ぶ。僕を断罪せんとばかりに。

「認められるものか・・・・・・・・」

ワルドは自然に声がでた。

「こんな結末、認められるものか!!」

直後。アルビオンの翼はレールガンを発射し終え、ワルドの居た場所には誰もいなくなった。

レコンキスタは退けることができたが、突然の襲撃にアルビオンは打撃を受けた。風のスクエア、ワルドが残した傷跡は決してすぐ癒えるものではなく、ワルドの偏在で攻撃されたアルビオン兵は大小の違いはあれど負傷していた。

だが、唯一の希望であるランスロット・エクルベイジュは見事役割を果たした。

それにはレコンキスタに衝撃を走らせるとともにアルビオン兵に活力を見いだした。水メイジを総動員し、次々に戦力の建て直しを計る。

だが、もうニューカッスル城とロンディウム以外の領地はレコンキスタに取りられてしまった。

孤軍奮闘で頑張るしかない。

ワルドの襲撃はルイズに心の傷を負わせ、トリステインもレコンキスタが忍び込んでいるという証拠になった。すぐさま鷹便でアンリエッタ王女に知らせた。

すぐに大使を送り届けるのが筋だが、ルルーシュがランスロット・エクルベイジュ開発に使った風石がたり、船が飛ばなくなったのだ。

ガウエイン開発の風石を用いれば結果は変わるが、ランスロットだけではレコンキスタの数に負ける。ガウエインに搭載されているドリイドシステムと広範囲織滅用のハドラ砲の為にはどうしても

風石が必要だった。

「ねえ、私たちはいつ帰れるのかしら？」

「知らないわよ。あんたは勝手に来ただけでしょうが、キュルケ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「な、なあに、いざとなれば、こ、この「青銅」のギーシュが、君たちを守るさ」

魔法学院から来たキュルケたちも必然帰れなくなる。

シルフィードで帰ろうにも、シルフィードに何人も乗せながら長距離飛行させるなど危険極まり無い。ラ・ロシエールまでならいけそうだが、最悪なことにシルフィードはこの間からルルーシュにべったりとくつつき、タバサのことはまるつきり忘れていた。それに兵を回復させるためにタバサが治癒呪文をかけてくれと頼まれたり、アルビオンの気候やらでギーシュが体調を崩したり、サイトがワルドから受けた傷を癒すために時間がかかった。帰る機会を逃してしまったのだ。

「シルフィード・・・・・・・・・・後でお仕置き」

断じて寂しくなったからではない。そう、これは使い魔のお仕置きで賤なのだとタバサは自分に言い聞かせる。

レコンキスタがニューカッスルを攻めいつてはや4日経った。水

竜が風石以外の魔力石、主に水石を大量に持ってきたため、それをルルーシュが加工して足りない分を補充させる。

また、水石は竜自体が精霊を特定の魔力石に流し込むことで作り上げることが分かったため、ルルーシュはランスロットのエネルギーで使われた魔力石に精霊を入れると、すぐさま回復することを知った。

ガウエインに心配されていたエネルギー問題も解決したと内心ほくそ笑む。

というのもハドロン砲はエネルギーを大量に食らう。魔力石の消費もバカにできないため、サクラダイト鉱石の電気エネルギー変換以外にもエネルギー源が必要になる。

ランスロットのように動いていればサクラダイト合金は発電するが、基本ガウエインに動かせることはない。

「……………なあ、ルルーシュ。ちよつといいか？」

「サイトか、どうした？」

ルルーシュが居る武器庫にサイトが入ってきた。物珍しげに眺めつつ、ルルーシュが作業している隣の席までいく。

「いやあ……………よ。ここ数日見かけなかったから探してたんだよ。お前が治療してくれたんだろ？」

「治療？ ああ、ワールドにつけられた傷か。大したことではない。致命傷になりそうなものはなかったしな」

『そりゃあ、俺様が頑張って相棒を助けたんだもんよ。怪我なんてされちゃあたまらないぜ』

「大したことないっていうけど、お前が直してくれたんだろ？ その、わりいな。助かったよ。ありがとう」

「……まあ、ありがたきお礼の言葉は受け取っておくことにしよう」

素直じゃねえなと思いつつも、サイトはそれがルルーシュだということで納得した。

「やっぱ、戦争になるのか」

「だろうな。なに、心配するな。戦争前には船がでるだろう。レコンキスタが来る前には返してやる」

「俺たちは無事かもしれねえが、ウェールズとかルルーシュたちは……その、戦争に参加すんだろ？」

「ああ」

ルルーシュは躊躇いなく答える。、もともと、そのつもりでアルビオンに来たのだから。

「スザクにも聞いたけど、お前もサモンサーヴァントで連れてこられたんだろ。理不尽とか、怒りとか、絶望とか、感じないのか？ ましてや、アルビオンの戦争なんて俺たちには関わりのない面倒事なんだぜ？ 逃げようとか、生きたいとか、そんなことは思わねえ

のか？」

「ここに来る前には理不尽も怒りも絶望もすでに知っていた。私は少し特殊な出生でな。命の危険を感じることも、戦争というものも知っていた」

何せ父親が争うことを肯定した王位継承を行っていたのだ。兄弟から、またはマリアンヌを快く思わない派閥から何度か屋敷にも襲撃を受けたこともある。

「それは……お前になんて言葉をかけていいかわからねえな」

「安易に優しい言葉や分かったような口振りはしない方がいいぞ。私も手がでるかもしれん」

「こええな」

サイトは少し冗談めかして笑う。だが顔は苦笑いだ。

「だけども、知っていたからって別に自分の命はることもねえだろ。お前の人生はお前だけのものだ。誰かに左右されているもんじゃねえ」

「臆病者め」

「いつてろ。俺だつてな、ガンダールヴなんだぜ？ 一騎当千の神の盾なんて言われちまつてる。スザクがな、教えてくれた。その力で君は何かをなせるのかつてな」

「あいつなら、そういいそうだな」

その光景が思い浮かぶようだ。
望まない力を手に入れてしまったサイトには覚悟がない。

ワルドの左腕を両断した次の日から肉料理はもちろん、デルフリ
ンガーを握って素振りをしているときでも気分を悪くしていた。

平和な世界から人を殺すことさえ知らずに来たのだ。それも仕方
のないことだ。

その姿を見ていられなくなったのか、スザクは少々キツイ言い方
でも決心を促そうとしたのだろう。

ここでは覚悟の無い者は死んでいく。覚悟を自覚していない者が
多く、あまりにも人の死が軽い。

サイトは力を以て何かをなしても、相手を殺しきる覚悟はない。

物語のようにはいかないのだ。

赦した盗賊が、背を向けた瞬間にナイフで刺してくる。

食料を与えた孤児が、数時間後には殴り殺されて食料を奪われて
いる。

家族が食い扶持を減らす為、幼い自分の子を奴隷商人に売る。

そんな世界の中でガンダールヴには力があつた。

力で相手を屈服させることができる。それは貴族の魔法のような
もので、剣さえあれば最強の使い魔となる。

しかしてそれはサイトを争いに巻き込み、いずれサイトを殺すこ

とになるだろう。

「俺さ、怖えよ。人を殺すなんて考えたこともねえ。法律で禁止されてるし、殺すなんてニュースの向こうに非日常の世界なんだと思ってた。でも、俺はワルドを切ったんだ。その感触が、未だに手に残ってよ、怖えんだよ。自分が変わっちまいそうで、それで戦争なんて起きるんだろ？」

サイトの顔色は悪かった。

「ウェールズを助けてやりてえ。だってよ、俺たち友達になっちゃまったんだぜ？ そんな奴が死ぬかもしれねえのによ、安全地帯でみてるって、居たたまねえよ」

「気にするな。サイトにはたまたま力が宿っただけだ。お前は前でもいい。人を殺すことを覚えるんじゃない」

「俺だって、お前らと胸張って友人だっていいてえ。人殺しなんてなりたくねえ。でもな、人を殺さなきゃ、お前らは生きていけないし死ぬしかないんだろ？」

「戦争だからな。殺さなければ人は死ぬ。味方の為に敵を殺す。それだけだ」

「俺は割り切れねえんだ」

「だったら参加しなければいい。私たちは死に行く訳じゃない。ガウェインとランスロットは、アルビオンの盾と翼だ。死なせはしない。敵は殺すがな」

「…………今更無理だつて俺だつて思うけどよ、何で話し合いで解決しねえのかな。一番かわいそうなのは、そんな戦争に担ぎ出される兵とか、平民とかだろ」

「話で全てが決まるなら、そんな理想的な世界はない」

ナナリーが望んだ世界。それをサイトも望んでいる。理想だとは分かっていても今のあり方に苦悩している。

「ルルーシュ、俺がこんなこといえた義理じゃねえのは分かっているが、死ぬんじゃないぞ。今度あうのが墓の前なら、めいいっぱいお前を罵倒してやるぜ。レコンキスタが滅びればいいわけじゃねえが、お前等がレコンキスタに殺されたつて言うなら弔い合戦に参加してやる」

「それは怖いな。せいぜい私が守つてやるさ。誰も死なせない」

「本当か？ 本当だな！？ じゃあ、誰も死なせないでくれよ。俺はウェールズとルルーシュとスザクにまたあいてえからな？ 本当だからな。必ず生きてくれよ」

サイトはルルーシュの前から消えた。青臭い願いを背負ったものだ、不器用ながらに心配するサイトに少しだけ呆れたが、アルビオンをレコンキスタに渡さない。それだけは約束しようと胸に刻む。

「さて、盤石な布石を敷く。あいつには悪いが、私はレコンキスタを織滅する。今度こそ居場所を守つてみせるさ」

ルルーシュは再度作業に取りかかっていった。

それは少年の選択で（後書き）

サイトにフラグ。

悩むサイト。

それはトリスティンの貴族で（前書き）

サイトが考えた末に行動の第一歩を踏み出します。

それはトリステインの貴族で

『相棒、それくらいにしとけ。誰だって争いが好きなわけじゃねえ。いやあよ、好きな奴もたまにいるもんだが、誰だって平和を願って争うんだぜ?』

「デルフの言いたいことは何となく分かるんだけどよ。それでも人を殺すなんて、だめだ。ルルーシュに変なこといつちまったってことは知ってる。戦争だぜ? 殺すのが当たり前の世界だぜ? 実感なんてわかねえよ」

サイトは先ほどのやりとりを後悔していた。自分でも矛盾していると思う。戦争で人を殺すなど、自分の思いを一方的にルルーシュに押しつけた形となってしまった。

友人だから、守りたい。スザクもルルーシュもウェールズも。死なせたたくない。友人だから。

力がある。責任がある。スザクは俺にそういった。

「君が力を手にしてしまった。それは紛れもない事実だ。だから君には責任がある。その剣でこれからさき、君の前にたつ理不尽を切り開かなくてはいけない」

そのために、人を殺すことに責任を持て。それができないなら、剣を捨てろ。

「重いよなあ」

『でもよ相棒。あのやさ顔の兄ちゃんが言ってることも真理だぜ？相棒は俺を自衛で使う分には構わねえが、人を殺すのには使いたくねえってのはよ、無理な話だ』

「・・・・・・分かつてる。ワルドみてえな奴が相手にきたら、手加減なんてできねえし、俺には手加減できる技量はねえからな」

『だろ？ 人を殺したくねえってのはよ、別に無理な話じゃねえ。人を殺さない覚悟、それに付随する問題に対処できる覚悟。これさえあれば、覚悟がねえなんて言われねえよ。それができなきゃ戦いなんてやめればいい。簡単だろ？』

「それって人を殺す覚悟より難しいな」

『当たり前よ。相棒が守りてえ相手だつて危険に巻き込む。だが、相棒は心優しいガンダールヴだ。俺っちも無理に相棒を戦いに巻き込むのは好きじゃねえ。でもな、そうもいつてられんのも事実だぜ？ 娘っこを守るんだろう？ ダチを死なせたくねえんだろう？ だったら、相棒は盾になりな。ガンダールヴは、神の盾なんだぜ？』

「・・・・・・」

数ヶ月前まで、平和な時を生きていた。学校ではそれなりに友達もいたし、退屈ながらも生活には満足していた。

魔法が使えたらなとか、魔法つてすげえなとか、マンガをみてて思ったこともある。

でも、そんなの、ハルケギニアでは、魔法は人殺しのための道具だ。

兵器と同じだ。拳銃と同じだ。暴力と同じだ。

そんな理不尽、ファンタジーな魔法じゃねえ。

魔法で泣くご主人様をみた。魔法に陶醉する貴族どもをみた。魔法に恐怖する平民をみた。

くそつたれな現実はまだ見飽きた。魔法が全てを蹂躪する根元だつて言うなら、それから大切な人を守る力を得たい。どんな暴力からも、どんな理不尽からも、どんな魔法からも。

「だったら」

ただの暴力になりたくねえ。

「俺は決めたぜ、デルフ」

『言ってみな相棒。俺たちは聞いたいてやるよ』

「ありがとよ。……俺は盾になる。大切なもの、全部を守れるようになる。人は殺したくねえ。でも、人に大切な相手を殺させねえ。だったら俺は、覚悟を以てお前を振るうぜ」

『……後悔はしねえな？ 俺のガンダールヴ。それはとてもなく厳しい道だぜ？』

「覚悟は持った。後悔はしたくねえ。だから、俺についてきてくれないか？」

デルフはしばらく黙っていたが、やがてカタカタと刀身を振るわ

せる。

『分かったよ。相棒。決めたんなら仕方ねえな。俺っちは常にお前さんの味方だ。行きな。てめえの道だ。どこまでもついてってやるぜ』

「・・・・・・サンキュー、デルフ」

『いってことよ』

カタカタとデルフは笑う。つられてサイトも一緒になって笑った。みんな俺が守ってやる。サイトは新しい覚悟を決めた。

「というわけだ。ルイズ。俺はアルビオンの戦争に参加する」

「なにが、という訳なの？　きつちりしつかり明確な理由を話してくれないかしら？」

サイトは決めた。友を守る。そのためなら、人を殺さない覚悟を以て戦争に参加する。人を守る覚悟を以て戦争に参加する。

仲間を守る為に敵を退ける。矛盾した思い。矛盾した願い。だが、そんな願いもあってもいいかもしれない。

殺し、殺される。負の連鎖しかない戦争。だけれど、皆平和と改革の為に戦っている。それを否定する覚悟など無い。だから、戦争を破壊し、争いを一刻も早く止めることで人を守ることにした。

「あんだ、バカなの？」

「うつせえ。決めちまったんだ。自分の思いだ。覆すわけにはいかねえ」

「やめたまえよ。サイト。君は知っているのかい？ 確かにアルビオンには惚れ惚れするような強力なゴーレムがあつたけれどな、戦争はそんな単純なものじゃないよ。……それに、君はトリステインのヴァリエール家の使い魔だ。まかり間違つてもアルビオンの戦争に関与していいわけじゃない」

「そうよダーリン」

「………無謀」

ルイズを始め、きつい言い方で否定される。

「でもよ。レコンキスタつてアルビオンを征服したら、次は他国に攻めいるだろ？」

「なにをバカな。彼らは貴族の共和制と聖地の奪還を目的にした集団だ。他国に攻めいる武装集団じゃない」

ギーシュはサイトの言葉を瞬時に否定する。しかし、タバサだけはサイトの発言で少し考える仕草を見せた。

「………あり得ない訳じゃない。人を引き連れるにはお金がいる。財政の傾いたアルビオンで十分な金銭を得られない場合、その考えは間違いじゃない」

「うそよ！ 貴族がそんなこと……」

「でも、レコンキスタって国境を越えてつながっていったじゃない。戦争中に内乱とか起こされたら、どんな大国でも混乱するわよ」

「事実、ワルドはレコンキスタだった。トリスティンを裏切って、レコンキスタになってたんだ。ほかの貴族がレコンキスタに絶対に組みしてねえなんて言えない」

ワルドの名前を出すと、ルイズは顔を伏せた。あこがれたった人から剣を突きつけられ、裏切られたのだ。これで落ち込まないわけがない。

「俺たちだって傍観してる場合なのか？ 次は自分の身が危ないぜ？」

誰もが黙ってしまった。タバサもキュルケもギーシュも、ランスロットを見た。対城戦をも覆すことができるアルビオンの翼。そして今ルルーシュが制作している対軍戦のガウエイン。レコンキスタに奪われでもすれば、それこそ全ての国を相手どれるオーバーテクノロジー。

今の自分たちは関わりがないからルルーシュの開発を止めることなどできない。アルビオンの盾は、もうほとんど完成してしまっている。今更それをやめるなど言えない。ガウエインの完成は決まったも同然だった。……。そこにシルフィードも手伝っているのだし、完成が速まっているのもあるが。

「俺たちは他人面してれば、この戦争は勝手に決着がつくかもしれ

ねえ。でもな、その後はレコンキスタがどう転ぶのかもわかんねえ」

「姫様に送った鷹便はまだ帰ってきてないわ。……まあ鷹はここまでこれないから竜が来るかもしれないけど」

「そうだ。アンリエッタ姫殿下の返事を待つんだよ。僕たちは勝手に動けないんだ。明確な理由がなければ、戦争になんて参加できない。僕たちが原因で、トリステインが本当に戦争に巻き込まれるかもしれないじゃないか」

「そうよ。それに、私たちは大使よ？ あんたは私の使い魔なの。主の元にいることが正しいの。あんたの言ってることだって、憶測の域をでない推論でしかないわ。命を無駄になんてしないで」

ルイズは真剣な顔でサイトを見つめる。

「わりいな、自分でもこええんだけどよ、決めちまったんだ。俺は、ルイズを守る」

「それがなんで戦争に参加することになるのよ！」

ルイズにはサイトの考えがわからなかった。それこそ、自分を守ってくれるのなら側にいるのが結論ではないか。

「ルイズを守る。■■■■を守る。■■■を守る。ウェールズを守る。レコンキスタが俺たちの平和を脅かすっていうなら俺は戦うぜ。みんなを守る覚悟がある。全部守って笑ってやる。俺の友人もご主人も死なせはしねえ」

「サイト、あんたおかしいわ。私を守るのなら、側にいなさいよ・

「・・・」

『やめな娘っこ。相棒が自分で決めちまったんだ。ガンダールヴが盾になるっていつてんだ。お前さんが覚悟を濁してやるなよ。なあに、あのやさ顔の兄ちゃんもルースウエルみてえな兄ちゃんもお前さんの使い魔だろう？ 信じてやれよ。始祖の使い魔たちをよ』

デルフリンガーはサイトの擁護に回るが、今聞き捨てならないことを聞いた気がした。

『相棒だつて苦悩した上での結論だ。娘っこ、俺のガンダールヴが覚悟を「待ちなさい、鉄屑」・・・だれが鉄屑でい』

「サイト、あんた、この鉄屑が言つてたのは本当のことなの？」

「ああ。わりとマジだ。本当だ」

「・・・ダーリンが、始祖の使い魔？」

「・・・■■■■も、■■■■も？」

「なるほど、僕が彼らに勝てなかったのもそれなら納得できるな」

キュルケ、タバサ、ギーシュは懐疑的ながらも信じた。サイトの人間離れた戦闘や、平民が単身でスクエアたるワールドに深手を負わせたことも相まって信じざるを得なくなったのもある。

「神の左手・ガンダールヴ。勇猛果敢な神の盾。始祖ブリミルが用いた伝説の使い魔、それがあんただって言うの？」

「らしいな」

「それで？ コルベール先生が言ってた私の前の使い魔とやらがここにいて、そいつらも始祖の使い魔なのね？」

「盾と笛と本と記すことさえはばかられる使い魔らしい」

「始祖の使い魔が勢ぞろいじゃないか！！」

ギーシュは興奮したかのようにしゃべるが、ルイズはそれどころではなかった。

「まあ、前の使い魔とやらも気になるけど、あんた、自分がガンダールヴだっていつ気がついたの？」

「身体能力が格段に上がることはフーケのゴーレムと戦った時にはガンダールヴだって聞いたのは■■■からだ」

「■■■ね。確かにギーシュとの決闘で人間離れた行動をしてたわね。彼もガンダールヴなのかしら？」

「そうらしい。■■■は右手と左手にルーンがあつたから」

ルイズはキュルケとサイトの会話で聞こえない部分があることはわかっていた。コルベール先生が、詳しく前の使い魔のことを教えてくれていたからだ。どんな話かと思っていたが周りの揶揄で気がついた。

曰く、私は前に使い魔を召還していたが逃げられたらしい。しかも、その使い魔は私に強制の魔法らしきものをかけ、私に存在を知

覚できないようにして旅にでたという。

信じるしかない。おそらく聞こえない部分はその前の使い魔の名前か何かだろう。

「なんですぐに私に言わないのよ!!」

「言ったところで『始祖に対しての不敬だわ』とかいって鞭で叩くだろう?」

「否定しないわ。それでも、使い魔がなに主人に情報を隠してるのよ!!」

「理不尽だぞ! 俺にだってプライベートつつもんがある!!」

「うるさいうるさい、うるさーい!!」

ルイズは杖を掲げ、レビテーションを唱えた。瞬間、サイトの近くで爆発が起きる。

「やめろよ、おい! ルイズ!!」

「なによ! あんたは私の使い魔でしょう!? なんで私より周りにいる人間の方があんたのことに詳しいのよ!!」

「俺が知るかよ!? お前の爆発はこええんだって! ここ、アルビオン! 自室みたいに魔法を使うなよ! 死ぬ、死ぬって!!」

ルイズは結局認めてくれず、周りのギーシュたちもサイトの考えには賛成できなかった。

しかし、それも変わった。アンリエッタ姫殿下から、直々の返事が届いた。

『アルビオン軍に参加し、レコンキスタを討伐せよ。すぐにトリステインも軍隊を編成し、応援に向かう』

いや、姫様。俺がいうのも何だが、学生にこれは厳しいんじゃないかな？ ほら、ルイズもギーシュも顔がひきつってるぜ？

それはトリスティンの貴族で（後書き）

ルイズ、ギーシュ、アンリエッタに振り回される。

次回烈風的な母親が登場。

それは王女の独断で（前書き）

烈風さんが登場。

アンリエッタアンチかも。

編集

タグにアンチアンリエッタを追加します。

新月だってお月見ですさん、感想ありがとうございます。
ジョンさん、ご指摘ありがとうございます。

グリフォン↓マンティコア

それは王女の独断で

「すぐにレコンキスタを討つべきです。マザリーニ枢機卿」

「姫様、お待ちなさい。あれはアルビオンの戦争です。他国のトリステインが介入したとなれば、ロマリアもガリアもゲルマニアも黙ってはいませんぞ」

「始祖の系譜が途絶えるかも知れないのです。ロマリアにはそう返しなさい。私のお父様はアルビオンの王弟です。なにを不思議に思うことがありましょう」

マザリーニは驚愕している。

アルビオンの反乱、レコンキスタの登場はわかっている。ヴァリエール家の三女からの手紙でワルド子爵がレコンキスタのスパイだったことも知らされている。

だからこそ今は国の中を洗うべきだ。

軍隊を向かわせるのはアルビオンではなく自国。

今も責任のなすりつけあいをしている宮廷貴族や先日から他国の貴族と連絡を交わしているリッシュモンなど、怪しい貴族など掃いて捨てるほどトリステインには巣くっている。

自分が説得しなければならない。

「姫様、アルビオンはもうレコンキスタに9割ほども領地を征服されています。いまさら兵を送ったところでレコンキスタにアルビオ

ンが勝てるわけなどありません」

「ウェールズ様を見捨てると？」

「自国の為です。余計な争いは避けるべきです」

アンリエッタは冷めた目でマザリーニを睨む。

「ええい、世間も知らぬ小娘が戦争を語るべきではありませんねぞ！
あなたの勝手な行動で、トリステインは滅ぶかもしれませぬ！
まして軍を出動させるなど、他国やトリステインに進入しているか
も知れないレコンキスタにとって望外の機会です！！」

「聞く耳持ちません。私は正当なるトリステインの王女です」

「それは暴君の考えですぞ！ 頭を冷やして目を覚ましなさい」

「マザリーニ枢機卿、ラ・ヴァリエールやド・グラモンの子息を見
殺しにせよとも言つのですか？」

マザリーニは内心毒を吐きたかった。警備の目を盗み、彼らをアルビオンに送った張本人がなにを言うかと。

「偶然トリステインの名門家の子息がアルビオンで戦争に巻き込ま
れそうなのです。彼らを救うためには軍の派遣を行うべきではありませんか？」

「な………っ！？ 姫様！ あなたは本気で仰っているのですか！？」

今までお飾りの王女だった。やんわりとほほえみを浮かべ、手を振れば民衆は答えてくれる。宮廷貴族は御しやすい王女 of 存在を得て好き勝手に働き、先王からトリステインを見ているマザリー二にとっては、トリステインの荒れ模様を知っていた。

とてもじゃないが他国のために動かせる戦力など存在しなかった。先王がいてくれればと思わない日はない。

マリアン又后太妃が政治を仕切ってくれればと思わない日はない。すべてが手遅れだ。

「そろそろかしら」

アンリエッタが不可解なことをしゃべると、王城のガラスを破つて雄々しいマンティコアが現れた。桃色ブロンドの髪を振り乱し、現れた彼女は、マザリー二もよく知っている。

ヴァリエール婦人。カリーヌ・デジレ・ド・マイヤール。

有名な烈風の登場で場内は騒然となった。

あわや敵衆かと思えばトリステイン最強のメイジ。烈風はその名の通りすさまじい速度で王城に突っ込んできた。

「……姫殿下。私はあなたに自らの存在を明かしたことなどありませんが、マリアン又にでも聞きましたか？」

「ええ。お母様に聞きました。ヴァリエール婦人」

しっかりと受け答えをするアンリエッタに烈風は品のよい笑顔を

鉄火面の下で浮かべた。なにをいけしゃあしゃあと……と、小さく悪態をつく。

周りの銃士隊も烈風に銃を突きつけていいのか迷い、アンリエッタのそばで待機する。

「それを知った上で、こんなふざけた手紙をお出しになられたのなら、姫殿下の神経を疑いますわ」

カリーヌが取り出したのはトリステインの紋章が入った手紙。王宮からの勅状だった。

「ルイズが危険なのです。行っってはくれませんか？」

カリーヌの殺気が強くなる。アンリエッタはくじけそうになる心を律し、悠然と玉座に腰掛けている。

「……姫殿下の行動、女としてならかうじて納得いたします。けれど、あなたは国の代表です。娘を勝手に戦争中のアルビオンに送り、懸想しているウェールズ殿下を助けるために私を利用しようとする考えは母親として許容できるものではありませんね」

「私もこの手は使いたくはありませんでしたが、ルイズたちが帰ってこれないのです。迎えに行っただけでください、ヴァリエール婦人。ついでにレコンキスタを一掃してくれるとなお嬉しいのですが」

「……私も夫も、殿下の横暴に頭が沸騰しそうですわ。お転婆もいい加減卒業して、レディとして国王として、大成したらどうでしょう？」

「偶然が重なってしまっただけですわ。まさか、ルイズたちがアルビオンに居る間にレコンキスタがニューカッスル城を制圧しようとするだなんて、始祖ですら思い至らなかったでしょう。ああ、私の大切な友人を、どうか救ってくださいませ」

演技がかった芝居をするアンリエッタにマザリーニは寿命が縮んだ。

烈風相手に交渉を持ちかけるなど、烈風が離反した場合国は割れるとわかっていたからだ。有力貴族でトリステインの支柱。ヴァリエール公爵という存在の重み。

この姫は国を滅ぼす気でもあるのかと思ってしまう。
ヴァリエール公爵はアルビオンの戦争には参加しないだろう。
だが娘を引き合いに出されれば行くしかない。

トリステイン軍にも匹敵するヴァリエールの私軍をアルビオンに向かわせる。

悪くない。

しかし方法があるだろう。こんな娘を人質に使って脅迫紛いな命令などせずとも、王家からの密命をヴァリエールが行えばいいだけのこと。

しかし、それでは王城に呼び出す前にレコンキスタがアルビオンを征服してしまうかも知れない。

「これでルイズが傷の一つでも負っていれば、私も夫もこれからトリステインとどう歩むべきか迷ってしまいますわ」

「あらそう。存分に迷ってください。でも、お忘れではありませんわよね？ エレオノールさんは王立魔法研究所。次女のカトレアさ

んも、お気の毒にお体の調子がよくないとか」

「・・・・・・・・・・なにが仰りたいのですか？」

「私も公爵様が国から出ていってしまうのは忍びないですが、国を離反するということは貴族としての位を捨てる覚悟もありという事ですわよね？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・っ！」

カリー又は唇をかむ。アンリエッタは国を出ていくなら貴族の位を返上しろという。確かにトリストイン国ヴァリエール公爵家というのは他国でも通用する。しかし国を離反するとすると平民と同じ位になる。不名誉印を押されてしまえば貴族ではなくなってしまう。

ロマリアもガリアも、烈風のカリンを受け入れてくれる可能性は低い。何せ他国の最強を国に召し抱えるなど、服の下に爆弾を背負うようなものだ。

唯一残ったゲルマニアは評価はしてくるだろうが、始祖の血を少なからず受け継ぐヴァリエール家はアルブレヒト三世に吸収されるだろう。それにゲルマニアは合わない。貴族であることを誇りする自身が否定する。

アルビオンなど論外だ。王家が戦争に勝つ要素などない。

その中で、プライドと家名が頼りだったエレオノールは生きてはいけないうし、カトレアはそもそも安静にしていなければ命すら危うい。

「姫殿下、先ほどからおたわむれが過ぎますぞ。あなたは一人の女性という前に一国の王だ。私情に流されずに対局をしつかり見定めるべきです。今ヴアリエール家を国から追いだしたりすれば、それこそ国が割れますぞ」

マザリーニが仲介に入るが、アンリエッタは意に介さない。

「あなたが国を離反する分には貴族の位を返上してもらいましょう。エレオノールさん、カトレアさん、ルイズは個別に国に残るかどうかが決めてもらうのはいかがでしょうか？」

「子に、親との共存と地位の天秤を決めさせろと？」

「あなたがトリステインを裏切らなければいいだけのこと。そうです。残った相手は人質ということで。でも国の中枢は任せられませんが、貴族としては残るでしょう」

「……いいたいことは多々あります。しかし、ここで言い争っているのは本当にルイズが死んでしまう」

「ええ。だから早く助けに行きなさいな。私も親友との再会がお墓だなんてイヤですわ。彼女は自分から志願して私のお願いを聞いてくれたのですから」

烈風の足下が音を立てて粉碎される。本来はアンリエッタに向かう激情が魔法として現れたのか、城内は烈風を中心に風が渦巻いていた。

「……それでは、私は失礼します。……アンリエ

ツタ姫殿下・・・・・・・・つ！！」

マンティコアが嘶き、烈風が飛んでいく。

後を見上げマザリーニは冷や汗をかいた。

「私はウェールズ様が無事ならそれでいいのです。そのためなら、動かせるものは動かしますわ」

アンリエッタはそういうと玉座から離れ、自室へと向かった。

「・・・・・・・・陛下。私はどうすればいいのですかな・・・・・・・・」

恩ある人物の娘に忠誠を誓うのか、恩ある人物が守った国を支えるべきか。とりあえずはヴァリエール離反を視野に入れて動かなくては。

また瘦せそうだと鳥の骨はため息をついた。

それは王女の独断で（後書き）

アンチアンリエッタ。

カリーヌ婦人を脅迫。

それは使い魔の参戦で（前書き）

ハムカッタさん、感想をありがとうございます。

郷↓卿 は見つけ次第直したいと思います。

それと、みなさんに感想を返したいと思うのですが、私は現在大学に通っているのでパソコンからアクセス出来ない状態になります。

携帯で感想を返せたらいいのですが、バッテリーがエヴァンゲリヲンのケーブル並みに持たないので接続が難しいです。

なるべく週末にまとめて感想を返したいと思いますので、ご理解のほどよろしく願います。

それは使い魔の参戦で

「それで、雁首をそろえて何のようだ。トリステインの貴族諸君」

ルルーシュの自室としていっても過言ではないアルビオンの武器庫。かつては大砲や船が納められていたはずなのだが今はその面影すらなくがらんとしている。ルルーシュがここでランスロットの武器を作る際には一応それらしき形を保っていたが、今はまたがらんとしている。

「失礼ね。私とタバサはプライドだけで食べているトリステイン貴族じゃないわよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ん」

消極的な肯定。タバサもトリステイン貴族のことは少なからずそう思っているらしい。

「君たち、いくら何でも僕が居る前では言わないでほしいのだが・・・・・・・・」

ギーシュは少し傷ついているようだ。ルイズがこの場にいれば烈火の如く怒っただろう。

「それで、一体何のようだ？ 私は今忙しいのだが」

「それはあなたの後ろで働いてる偏在を見れば分かるんだけど」

「ルルーシュ、頼みがある」

サイトが決心を固めて前にでる。

「俺に、戦うための剣をくれ」

「却下」

一大決心だった。サイトが単純な脳味噌をフル稼働して考えた最良の答えだった。

「お前はなにを考えているんだ？ 死に慣れるな、サイト。お前はだいたい、アルビオンとの関わりなどない」

「そうはいっても、国を越えた連携組織なんて前代未聞だもの。これは少なからずアルビオンだけの問題じゃなくて、私たちの国も巻き込む戦争になるんじゃないかってダーリンがね」

「サイトが？ ……まあ、それが一番妥当だろう。アルビオンだけを制圧した組織がエルフを討伐できると思うか？ 雄志を募って大軍遠征。物量での侵略。まあサハラで大半は死ぬだろうがな」

一番妥当で一番可能性が高い。国に賛同できないからそんな組織までが立ち上がるのだ。そして特にゲルマニアでは多いのではないだろうか。エルフとの戦闘で万が一億が一成功すれば、戦利品としてエルフの技術が大量に手には入る。

「身も蓋もないわね」

「仕方ないさ。サイトもそうだけど、僕たちだって数日前まで戦争なんて考えていなかったからね。覚悟が足りないと言われてもね」

「その金髪の言うとおりだ」

ギーシュがルルーシュの言葉にむっとなる。

「君はなぜそうも僕の怒りに触れるんだい？　・・・・・・・・まあ、最初に会ったときは悪かった。僕も軽率だったし反省している。すまなかったね、あの件は一方的に僕が悪かった」

「ほう」

ルルーシュが驚きながらもギーシュを見た。プライドの高いトリステイン貴族が頭を下げるなど滅多にないからだ。

「改めて、僕はギーシュ。ギーシュ・ド・グラモンだ」

ギーシュはルルーシュに手を差し出す。少し顔が赤いが、おそらく合わす顔が無いとか決闘した相手に謝ることからくる羞恥か。だが、ルルーシュはギーシュの潔さに毒気を抜かれる。

「・・・・・・・・私はルルーシュ・ランペルージだ。改めて、今度はいい関係を結ぼう。ギーシュ・ド・グラモン」

「・・・・・・・・っ！　ああ！！　よろしく頼むよー！！」

ルルーシュとギーシュは堅く握手を結ぶ。

「これだから男って羨ましいわね」

「単純」

キウルケとタバサがなにやら言っているが、関係ない。

「改めて言うぞ。サイト、お前は平和な国から来たんだろう?」

「ああ。だけど、俺の力だけじゃ、何もできねえ。誰も守れねえ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・?」

ルルーシュは意外そうにサイトを見る。サイトは自らの力のなさを吐露するかにようにポツポツと話し出す。

「・・・・・・・・元々、俺不器用だからよ。なんで戦争するんだとか国の利益とか知んねえけどよ。戦争が終わるまで何も知らずにトリステインで暮らしてたらと思うと、それはそれで気が楽だったよ」

サイトの顔は苦渋に染められている。重い口を開き、はなす。

「・・・・・・・・お前らと知り合ったんだ。ダチが戦争なんて理不尽なもんに立ち向かってるんだ。俺はな、なんだか知らんが力を持つちまってる。力がねえとか、戦いたくねえとか、怖えとか、そんなもん後でも感じれるんだ。だがよ、俺は自分の意志を持つてるんだ。後でぜってえ後悔するような生き方したくねえ」

「・・・・・・・・そうか」

絞り出す言葉にルルーシュは反論をしなくなかった。

平和な世界で争いも知らない子供だった。偶然ハルケギニアに呼ばれ、親元から切り離され使い魔なんて奴隷のような生活を強いられている。それでも自分の人生に後悔はしたくない。自分の信念は曲げられない。

サイトの中に魂の輝きをルルーシュはみた。

「……今でも人を殺すのは怖え、覚悟だつて足りてねえ。笑っちゃうかもしれないけどよ、未だに手が震えるんだ。でもな、ダチが死ぬなんて、もつと怖えよ!!」

「俺だつてもう分かっちゃったよ！ これ以上、学生だとか、武器なんて持ったこと無かったとか、戦争なんて間違つてるとか！ そんなの何の言い訳にもならねえ！ ここはもう日本なんかじゃねえ！ ハルケギニアだつて異世界だ！」

サイトの独白が続く。ルルーシュを始め、全員が聞いていた。

平和な世界に住んでいた学生だった。少し特殊なルーンを刻まれた、ただの子供だった。フーケを撃退した。ワルドと引き分け切り結んだ。だが、それでもサイトの心は、人殺しを許容できる構造なとしていなかった。

「だったら、守るしかねえじゃねえか！ お前らはよ、あつて数日とか、そんな関係だよ。でもな、俺がこの世界に来て、一番大切に思えた友情だ。時間じゃねえ。ただ、お前らを失いたくねえ」

「だから、サイト、お前は剣を執るのか？」

「ああ。ダチを守るんだ。それでトリステインを戦争から守るんだ。

理由なんざ後からいくらでもつけりゃいい。この瞬間で感情に任せ
た方が、いいって事もある」

「後悔しないな？ お前が背負う責任に」

「しねえ。後悔するぐらいなら、最初からこんな事言わねえ」

「・・・・・・・・分かった」

サイトに刻まれたのはガンダールヴ。正直他の始祖の使い魔なら
できなかっただろう。

ガンダールヴは神の盾。いくつもの武器を操ったという。

だったら、使って見せる。ものにしろ。

「覚悟がお前にあるのなら、新しい剣を作ってやる」

「ああ。ぜってえ守るんだ。なにせ、俺は盾だからな」

にやつとルルーシュは笑う。

久しぶりに、底抜けのバカをみた。スザクのように理想を掲げる
訳でもなく、ルルーシュのように確たる目的も覚悟もない。

ただ、友の為に。

愚かしいと思う。だが、その思いは尊くもある。後悔しない生
き方をするというのは口で言うほど簡単なものじゃない。スザクも
ルルーシュも後悔の連続だ。気づいたときにはもう遅かった。

もしかしたら在りし日の自分をサイトに投影しているだけかもしれない。

こいつだけは迷ってくれるなと願望を押しつけているのかもしれない。

それでも剣を執り、守るとサイトは誓ったのだ。

我らが進んだ道は霸道。サイトが進む道は騎士道。

道は決して違えることなどしないだろう。その剣は常に民を守り、幾たびからの暴力からもサイトを守ってくれる。そんな彼の為の剣を作る。

ガンダールヴが使える、最優のナイトメアフレーム。ランスロット、ガウェインに続く新しい機体。アーサー・ジョンブリアン。有名な騎士王、アーサーの名を冠する白と黄色、純白と栄光の騎士を作ろうじゃないか。

「くつくつく、ああ、お前にあう最優を作ってやろう。その機体に偽りは許されない。最後まで、お前の守るという騎士道を貫いて見せろ！」

「ああ。もちろんだぜ、ルルーシュ」

サイトとルルーシュはしっかりと握手を交わす。もしやいずれ敵対するかもしれない相手。だが、今は手を合わせる仲間。それに、ルルーシュは言った。偽ることはできないと。

（機体の爆薬はお前の方が上だ。せいぜい俺の期待を裏切らないで

くれよ、サイト？)

敵対するなら、アーサー・ジヨンブリアンの機体を自爆させる。これはルルーシュはサイトを信頼してはいるが、会って間もないのも事実。トリスティンがサイトの機体を以て敵対をするというなら、機体ごとガンダールヴを殺す。

もしそうなくても恨むなよ、サイト？

お前が引き抜いた聖剣は、アルビオンの剣なのだから。

それは使い魔の参戦で（後書き）

サイト、専用機フラグ。

だってナイトメアあるのにサイトに使わないのはどうかと。
オリジナルナイトメアフレーム。
アーサー・ジョンブリアン。

ちなみに機体名の後ろにあるのは色の名前です。

F a t eとの関連は不明です。

それは新しい構想で（前書き）

そろそろ戦争に突入します。

それは新しい構想で

「それで、まだ何かいいそうだな？」

「ああ。ルイズのギアスってやつは、解けることはないのか？」

ギアスキャンセラーを持つジェレミアでもいれば変わったかもしれないが、ここにはギアスキャンセラーなどという便利なものはない。

「……解けるかどうかは分からないが、ギアスとは意志の力だ」

「曖昧だね」

「精神力で魔法を扱う貴族に言われたくはない」

どちらも奇跡の術なのだ。それに、ルルーシュに刻まれたのは絶対遵守のギアス。どんな強固な意志を持っていたとしても、逆らえるものではない。だが、今回は少し勝手が違う。

「……俺がルイズにかけたギアスは少々特殊だな。俺とスザクを認識できなくするものだ。はっきり言って曖昧な命令故に齟齬が起きているのかもしれない」

「齟齬？」

ワルドとの勝負の際。ルルーシュのことをワルド子爵はいろいろ暴露してくれた。元使い魔、ミヨズニトニルン。それらの情報はル

ル―シュの元からあつた情報ではなく、ルーンによって上書きされた称号でしかない。

ルイズに認識が不可能になっているものは名前と声、存在、ルル―シュとスザクの過去となっている。元使い魔のルル―シュの情報は果たしてそこに入っているのだろうか。

そこからギアスが瓦解するかもしれない。ギアスは魔法との連動性が高い。精神力と意志の力がイコールで結ばれているなら、ルイズの莫大な精神力でギアスが壊されることも無いとはいえない。

「人間の意志とは確実ではない。常に揺らぎ、新しく意志を形成する。だが、ギアス能力者は自らが持つもつとも強い意思を力として発現している」

ルル―シュが国に反逆するために王の力を求めたり。

マオが人の心が知りたいと心を読むギアスを発現させたり。

シャルルが嘘のない世界を作るために人の心を作り替えるギアスを持ったり。

すべては何事にも変えられない決意。揺らぐことのない意志。

「ルイズは私と使い魔としてのパスが微弱ながらつながっている。どんな手を使おうとも契約は切れなかった」

だから万が一でもギアスが解けることはある。しかもギアスキャンセラーで破壊する訳でもないから再度ギアスをかけることはできない。解ければやつかいになるのは目に見えていたが、コルベールや周りの生徒、ワルドから与えられた情報が倒錯しているため、ルル―シュたちの存在を認めてしまえばギアスは壊れる。

矛盾した命令と結果により、また曖昧な命令と強固な意志によって。

いつか破られるであろう。絶対遵守が。そう遠くない未来で。

「いいのかい、ルルーシュ。そんなに情報を与えて」

「スザクか。何、もうほとんどアルビオンに与えてしまったことだけだ。ルイズのギアスについてはオスマンにもバレている。整理して教えただけで現状が変わるわけでもない」

「……君のその油断が、首を絞めないようにね」

サイトたちが退出し、格納庫の奥でランスロットを整備していたスザクが顔をだす。

「それで、サイト君に作ってあげるのかい、アーサーを」

「私のガウエインは本日中にも完成する。サイトは言ったのだ。私のように反抗でもなく、スザクのように解放ではなく、ただ守りたいただけだな。その姿に少し憧れた。そして純粋にそれが言えるサイトに嫉妬したのかもしれない」

「そうか」

スザクはただ一言だけ肯定を示し、それ以上の追求はしなかった。

「基本コンセプトは？ 敵対したときには容赦なく切る。万が一爆薬を取り除かれたら、敵対するだろうしね」

「ランスロットは機動性、ガウエインは防御性。サイトはな、守ると言ったのだ。だったら、その騎士道を最後まで貫いてもらう。サイトの武装は剣一本だが、伝説の騎士王の名に恥じないものを作ろう」

「剣一本？」

「圧倒的な攻撃性だ。それ以外に必要なものなど不要。あいつに必要なのはチマチマとした戦争ではなく単身で最短で最速で終わらせられる暴力だ」

「それは、彼とアーサーを孤独にする。力はどうであれ人を畏怖させるものじゃないか」

「いい。サイトは自らを盾と言った。盾は傷つきながらも人を守るものだ」

もし、サイトが人を守ることができなくなった場合、彼は自らの絶望に悩むだろう。後悔と煩悶の感情に捕らわれるだろう。だが、それを乗り越えてもらわねばナイトメアなど使えない。ナイトメアフレームが、サイトの悪夢にならないように祈るしかないな。

「サイトの扱う剣の名はカリバーン。アーサー本体は7メートル。私たちの機体と比べ大型だが、本体は5メートルほどだ。それに最悪の欠陥がある」

「欠陥？」

「サイトは私たちと同じようにナイトメアを扱えない。スザクのようなGに耐えられる人間ではないし、私のようにキーボードで機体を操作できるわけでもない。いくらガンダールヴのルーンとはいえ、兵器として実感のないままでは満足に動かせないだろう」

だから、制約をかける。強力な力に振り回されないように。

「基本ナイトメアフレームは装甲を重ねることに瞬発力が下がるが、防御性は上がる。サイトに与えるナイトメアフレームは、操縦者の判断で機体をパリジできるようにする」

「パリジ………防御をかなぐり捨てて機動を確保するのか？」

「ああ。しかし、カリバーンは可変型ヴァリスと同じで発動時に火石をフル稼働させる。あまり機動に走り装甲をパリジし続けると、いくらナイトメアフレームに耐熱性があるうと操縦者の身を焼くだろう」

そうすることによって機動と防御の中間を見いだしてもらおう。一見ランスロットやガウエインより応用が効いていそうだが、良くも悪くも平凡な機体となる。

ランスロットと張り合うための機動を確保しようとするれば全装甲をパリジしなければならず、そうなるとはカリバーンは全力で扱えないただの剣へと成り下がる。

ガウエインの高出力攻撃を耐えるためには装甲を全装備しなければならぬが、カリバーンは剣に属する。いくら火石を搭載し、殲滅、破壊に特化しているとはいえ、遠距離相手に剣戟をたたき込めるほどではない。

「だが、剣は別だ。考えうる限り最高の破壊力を搭載させる。そうすることでサイトの機体は最優にはいたれるやもしれんが最強ではなくなる。器用貧乏な機体では最強を満足に振るえないからな」

諸刃の剣。そしてガンダールヴは武器の最適化を行えるとも言っても、状況で最適化がなされなければいい。

「それに、魔力石は私でなければ変換や補充などできない。つまり、ナイトメアフレームは現時点では私がいなければただの鉄くずだ。・・・そこに、いくらガリアやゲルマニアの魔法技術が加われば改造されるとは言っても改良はできないだろうな」

魔力石に変わるエネルギー媒体など、今のところ存在しない。つまり、まるどころそこが模倣できなければナイトメアフレームを作るなどできない。

「だが、スザクのランスロットは別だ」

「電気効率の変換とサクラダイトによる自家発電。ランスロットの攻撃のほとんどがエネルギー回復の手だてになってるしね。ナイトメアフレームに疑似的な永久機関を搭載させたとところかい？」

「永久機関などと大それたものではない。だが、そうはいつでも過信はするな。武器のヴァリスは外部補助だとしても、動かす際にかかるエネルギーは常に消費されている。生産より消費が大きいのだ」

だから永久に動くことなど不可能。

「サイトに渡す機体はランスロットのように白い。しかし、全体的

には黄色が勝っている。構想的には外観は機体をパージすることになる」

最初は重装備で外部装甲にはミサイルなどの殲滅兵器を持たせ、徐々に白黄の騎士となる。人型として稼働できるギリギリの段階までは球体のような機体になる。しかし、連結部分をパージさせることで人型に近づく。人型となったあとはカリバーンを引き抜いての戦闘が可能となり、殲滅を封じられて個別撃破となり、機動性をあげればあげるほど攻撃力が失われていく。

まあ、順々に最適を行える設定にはした。

重装備で敵の先兵を撃破し、人型となったあとは戦場を動き回る騎士となり、すべてをパージしたときは逃走用なのだ。

「それと、カリバーンの核にはデルフリンガーを用いる。あの魔法吸収能力を外部に展開し魔法攻撃が効かないナイトメアの完成だ。ランスロットは電気を併用できるが、ガウエインもアーサーも高機動を戦闘で用いることなどしない。吸収した魔力はカリバーン内のため込み、武器の性能を上げるとしよう」

どんどん決まっていくなーサー・ジョンブリアンの開発企画。スザクは途中からアーサーの性能は脅威足り得るものではないと感じ、警戒を下げる。

ランスロット・エクルベイジュは第九世代相当だ。アーサーは良く見積もっても機体性能は第六から第七世代。しかし、それを補うカリバーンの存在もある。レールガンでなら殺せる。

そこまで考えて、スザクはかぶりを振った。

「気をつける。捨て身でサイトがカリバーンを振るえば、いくら私たちの機体が堅くても破壊されるだろう。カリバーンのまえには防御など考えるな。機動性で逃げろ」

「ガウエインはどうするんだい？」

「……おそらくドルイドシステムでも防げはしない。だから、我々の機体をもう少しチューンアップする」

沈黙が場を支配する。

「最初から敵対すると決まった訳じゃない。シミュレートもした。だったら、最悪な展開になる前までは共闘する仲間だ。思考を落とせ……」

「……ああ。分かった。それにしても、僕たちの機体だけでは勝てないのか？」

「残念ながら私は防戦に徹したい。そうなれば四方から迫り来るレコンキスタにランスロットのみではきついと判断した。必要であれば私も行くが、あくまで動くのは取り逃がした敵の殲滅に集中したい」

「了解。彼もガンダールヴだ。すぐに慣れるさ」

スザクは息を吐く。緊張を霧散させて落ち着く。

もうすぐ戦争なのだ。城もここ数日、レコンキスタが周りの街を支配していつ攻撃に転じるか分からないため、ピリピリしている。

ガウエインは先ほど完成した。ランスロットも問題ない。アーサーも鋭意制作中だ。

今の問題ははっきり言って一つだけ。主の元に返らない部屋の隅で寝ているシルフィードをどうやってタバサの元に返すかに頭を悩ませた。

それは新しい構想で（後書き）

今気づいたのですが、殲滅ってこうですよね？
殲滅になっていました。

ポメラで書いているので変換が難しいです。

齟誤↓齟齬

修正しました

それは母の強さで（前書き）

烈風の母親の登場回。

それは母の強さで

白と黒、黄。三機が揃うと壮観な風景に見えた。

言わずとしたランスロット・エクルベイジュは戦闘に備えてヴァリスの点検を。

絶対防御壁であるガウエイン・スレートグレイはドルイドシステムとハドロン砲を。

球体のような形をした多角機能機体、アーサー・ジョンブリアンはサイトがガンダールヴで最終点検を。

本日、レコンキスタより正式な打診があった。

ニューカッスル城以外は敵地、前だけではなく後ろにすら気を配らなければならない。タバサとキュルケは二人だけならシルフィードで帰り、残っているのはガチガチ震えるギーシュと顔を青くするルイズだけだった。

「まずは諸君、ここまで来たことに礼を言おう。ありがとう。そしてすまなかった」

自分だけが人質として利用されてしまったふがいなさからウェールズが謝罪する。兵は一気に動揺した。

「ウェールズ、戦う前から不安になるような言葉を吐くな。生き残

「つてからでも遅くはない」

「そうだよ。僕たちは負けるつもりの戦に参加する訳じゃない。勝つんだ。そして平和を取り戻す」

「……ああ、そうだね。少し弱気になっていたかもしれない。でも、大丈夫だ。僕たちには、翼と盾と剣がある！」

アルビオンのニューカッスル城は歓声で埋まった。戦力差が何百何千であろうと不安ではない。誇り高きアルビオンが、たかだか何万の敵程度に遅れをとるわけにはいかない。全員の気持ちは一つだ。勝って明日笑うため。

「さあ、いくぞ。レコンキスタとの全面戦争だ！ 我らの、白きアルビオンを取り戻すぞ！！」

ニューカッスル城から外へとできれば、四方が敵で埋まっていた。旗を掲げ、騎士甲冑に身を包んだ元アルビオン兵やレコンキスタの構成員が杖を構えている。

だまし討ちもあり得たが、戦力差が彼らに余裕を与えたのだろうか。

「放て」

開戦宣言も無しに魔法が四方から飛んでくる。火、土、風、水。色を持った魔法がニューカッスルへと被弾する手前、赤い色の防御壁がピンポイントで展開される。

「全く、礼儀すら知らないのか」

つまらなそうにルルーシュが言い捨てた。ウェールズはそんな信頼できる彼に背中を預け、前だけを見つめる。

「頼むよ、スザク、ルルーシュ、サイト。総員！！ 戦闘開始！！」

正式に戦争は宣言された。

まずい、まずい、まずい。

烈風の頭をよぎるのは始まってしまった戦争とルイズの無事だけだった。

夫を説得し、ラ・ロシェールで船が一隻も出ずにいたので、時間が掛かりすぎてしまった。おど……。説得により何とか船を出してもらい、今し方ニューカッスルの付近にまで近づくことができた。

（周りにレコンキスタがいて、ニューカッスルまで飛べない……。っ！ 急いでいるというのに！）

グリフォンであの中を飛んでいけば、いくら烈風とはいえただではすまない。あの中に台風をつっこませるのも考えたが、それではニューカッスルにいる、もしくは戦場にたたされているルイズに万が一にも当たってしまうかもしれない。

（アンリエッタ、姫殿下……。っ！）

歯がギシリとなる。

娘を助けにいきたい。しかし、この身は最強といわれていても体は寄る年には逆らえない。全盛期でもいけるかどうかわからない万という大軍の中で娘を救い出せるのか不安で仕方ない。

グリフォンを操って飛ぶ。風の偏在を出して、その間に道を開ける。

『「カッタートルネード」』

二人分のカッタートルネード。レコンキスタはとばされ、鈍い金属音をならしながら騎士が地面に落ちていく。

（ルイズ………どうか、無事でいなさい………）

襲いくる敵兵を偏在が退ける。本体はただひたすら、最高スピードでニューカッスル城へと至るだけだ。

「邪魔!!」

ウインドカッターで人が飛ぶ。飛んでいく。

ただ娘を守るため。単身でアルビオンの地を駆け巡った。一対多を想定した訓練はよく積んだものだが、それはあくまで一個師団や軍の話。せいぜい多くとも五千ほど。だが、ここにはその何倍にも当たる敵がいる。

精神力が問題だ。いくら雑兵が募ろうとも、切り裂けばいい、飛ばせばいい、力を見せつけられればいい。

ただ前へ。娘の元へ。

「そこを………退きなさい!!」

母は強く、そして苛烈だった。

烈風は荒れ果てたアルビオンに吹く。一迅の風のように、戦場を駆け抜ける。

だが、レコンキスタではない障害が目に入り、足を止める。

「………っ、なんなのよ、アレ？」

ニユーカッスル城からできた、ゴーレム。それはレコンキスタを一掃していた。球体のゴーレムは魔法よりも強力な爆発を起こし、白銀のゴーレムは空を駆け回り敵を風ぎ払う。唯一動かない黒いゴーレムは城の守りを担っていた。

「………味方、なの？」

レコンキスタを相手取るからには味方なのだろう。圧倒的な力を振るうゴーレム。自身が最強を自負していた風よりもおそらく強い。赤色の粒子が飛び交い、レコンキスタを駆逐している。

そのとき、空を滑空するゴーレムが加速し、こちらに向かってきた。風圧で動けなくなる。精神力を使って風の流れを変えることが精一杯で、逃げるなどという選択肢はなかった。

「は、」

気づいた時には遅かった。何というスピードだろうか。何百メートルとある距離をものの数秒で埋めたのだ。今更逃げて遅い。

沈黙が場を支配した。烈風に向かっていったレコンキスタはゴーレムの風に吹き飛ばされ、一人残らず散っていた。圧倒的な恐怖が烈風を襲う。竜と敵対したときも、これほどまでに恐怖を感じることはなかった。

威圧されたのではない。徹底的に無感情でなにも読みとれないのだ。呼吸ですら許されているのか分からない。

【……もしや、ルイズ嬢の関係者か？】

ゴーレムから少年の声が聞こえた。ルイズ、そうだ、私はルイズの母親。

「……………ええ。そうだけれど、アルビオンの方かしら？」

まさか、中にいるのか？ ゴーレムの中に？ なんと危険なのだろうか。しかし、あれだけ高度な瞬発力をみれば、遠隔操作では無理なのだろうと思う。中にいても無理だろうが。

【ああ、そのピンクブロンドは滅多にいないからね。ここは危険だ。城まで案内する】

「戦争中ですが？」

【前線はサイトに任せても大丈夫そうだし、ルルーシュの防御は完璧だ。だから僕があなたを城に運ぶことは何ら問題はない、ただし、ルイズ嬢との関係性がはかれなかった場合、殺す】

「……わかりました。夫以外の男性から受けるのは初めてですが、エスコートしていただけるかしら、ミスタ？」

【もちろんですよ、レディ】

白銀のゴーレムはよく見ると少し赤色が混じっていた。翼をはやして滑空する。竜より早い。本当にゴーレムなのか疑いたくなる。

少し、興味本位でディテクトマジックをかける。

風石と火石、おおよそ風メイジである自分には理解できない言葉が読みとれる。サクラダイト、自爆装置、エナジーウイング、可変型ヴァリス。なにがどれなのか、またはどう使うものなのかも分からない。

（これはゴーレムというよりガーゴイルなどの魔法人形に近い。エネルギーに風石と火石を用いて、循環させるシステムね。なんと無茶な………一歩間違えれば爆発だわ）

ため息がでるほど緻密に計算されていたゴーレム。それも、見れば自爆ですら装置の一つとして組み込まれていたにすぎない。さすがの烈風とはいえ、未知の技術の奥までは読みとれなかった。

それは母の強さで（後書き）

スザク烈風と出会う。

それは嵐の予感で（前書き）

ギーシュとルイズの心中。主にルイズ。

だいたい丸くなってきた辺です。

それは嵐の予感で

「・・・・・・・・・・なあ、ルイズ」

「なによ、ギーシュ」

「僕はここで死ぬのかな」

「やめて。そんなの、今更考えさせないで」

目下戦闘中のアルビオンとレコンキスタ。勇猛果敢な神の盾は、すでに戦場で戦っていた。自分たちもと続きたいところだが、戦争を視野に入れて準備をしてきたわけでもない。

ルイズにしてみれば操れない爆発魔法のみ。ギーシュも的にしかないクリエイトゴーレムしかできない。

「・・・・・・・・僕は、無力だなあ」

ギーシュの呟きにルイズは返せない。アンリエッタ姫殿下からレコンキスタとの戦争に参加する旨は来た。しかし、自分たちが参加しても足手まといにしかない。

上空にはアルビオンの盾と称される黒色のゴーレム。城全体と味方をカバーするほどの絶対防御を広範囲に持つデタラメなもの。ギーシュはそのゴーレム達に少しあこがれを抱いているようだった。

「悔しい・・・・・・・・。姫様の期待に応えてあげられないなんて・

「……」

「そんなこといえば、僕だって同じさ。……ここは戦場なんだよ、ルイズ。学園で少し戦闘科目に芽があるからといって天狗になっていた。ここでは、実力がない者から死んでいくんだ」

「……分かってるわよ」

今さらウェールズ殿下のいうことが分かってきた。レコンキスタは数で勝り、アルビオンは戦力に勝る。消耗戦の泥沼にしかないのだ。

人の死が軽い。サイトはあの中で戦っている。

『俺は、ちよつくら戦ってくる。なに、ルイズの分もギーシュの分も、戦ってきてやる。俺の戦果は主人の物だ。だから、そんな心配するなよ、な?』

なにが、心配するな、よ。あいつ、ここ数日まともに寝てないじゃない。

ワルドとの戦闘だろう。それしか思いつかない。サイトは私がサモンサーヴァントで呼び出した。言っていることが事実なら、彼は争いのない世界から呼び出されている。

（私が、サイトを巻き込んだのね）

心臓が捕まれそうになる。サイトは、なぜ私に尽くしてくれるのだろうか。フーケだってそう、ワルドの時もそう。彼はボロボロの剣を片手に戦っていた。不平不満を言うときもあるが、それでも最

後には従ってくれる。

サイトの言うことも分かる。貴族だからって戦争に参加しなければいけない訳じゃない。ここにいるのもアンリエッタ姫殿下の命令だと言っているが、本当のところ違う。

ここで逃げても誰も非難できない。学生の身分で親の承認もなし、旅行先で戦争に巻き込まれたから参加するなど前代未聞なのだ。ふつつ逃げる。それも他国で自分に関係のない戦争ならなおさら。

でも、私だって使い魔を見捨てて逃げるなんて選択肢は初めからない。唯一残ったプライドを、本当の意味で虚無^{ゼロ}にしてしまいたくない。それに、それ以上に、サイトを放っておけない。

「サイト・・・・・・・・」

彼は、どんな気持ちで戦うのだろうか。重厚なゴーレムに包まれ、感情を押し殺してレコンキスタを殲滅している。サイト自身が望んだことではない。ただガンダールヴと言うルーンが刻まれただけ。それ以外は、本当に男の子で、子供だったのだ。

ちよつとエツチで、ふざけている使い魔。世間知らずでバカで犬。貴族を敬う精神も無い。

だが、そんな彼は、今戦っている。自らに返る名誉のためでも、自身の為でもなく。ただ私の為に。

アイツは私を守ると言った。ついでにトリステインを、そのついでにアルビオンを。バカじゃないの。ついの方が重要じゃない。私は、公爵家三女だけど、国には代えられない。戦争でそんな肩書

き、無意味なことよ。

「なによ、勝手にカッコつけて、ご主人様の意見も聞かないで・・・」

でも、サイトが一番に私を守ると言ってくれたとき、胸が高鳴った。純粹に彼の顔をもっと見ていたいと感じた。

「・・・・・・・・ルイズ、泣かないでくれよ」

「泣くわけ、無いじゃない」

「そうか、それでいい。君は毅然としてくれたまえ。じゃないと、僕は不安でくじけそうだよ」

「『青銅』が私を守ってくれるんじゃないの？」

「残念ながら、僕の青銅では悔しいけど自分の身も守れない」

「情けないわね」

「ああ、本当に情けないよ」

ギーシュは不安なのだろう。いつもの軽薄そうな顔は無かった。そのとき、ギーシュの胸にバラがないことに気がついた。

「惑わす蝶も花もないのだ。男相手にバラはふさわしくないだろう」

そうね。本当にそう。これが幻だったらどんなにいいか。自分が

夢に惑わされているならいつだって目を覚ましてやるのに。硝煙の香りが漂う。大砲がニューカッスル城に向かって飛ぶが、黒色のゴーレムが難なく防ぐ。

サイトがまるで魔法のような武器を用いて船を落とした。

喜ぶ暇さえなく、人が殺される。

「……………ん？ ルイズ、ランスロットが来るみたいだ」

「らんすろつと？ ああ、白銀の機体ね」

「誰か抱えているようだね」

「ほんと……………ね……………？」

あれ？ なにこの悪寒。あの私と同じピンクブロンドの髪の毛は、もしかしてもしかしなくてもそうなのかしら？

「え……………お母様……………？」

何でアルビオンにとか、勝手に学院休んでごめんなさいとか。その前に思った。

どうか、殺さないで。

らんすろつとお母様がなにやら会話を交わし、お母様がこちらを向く。

「ルイズ」

「は、はい！」

間違いない。お母様だ。人違いの可能性も潰えた。

うつむいて表情が読めないのが逆に怖い。肩を震わせ、ぶわっと視界にお母様の体が広がった。

叩かれる。そう思っていた。

「心配を……かけさせないで……」

ふわっと、お母様の髪の毛が頬を撫でた気がした。絶対に殺され
ると思ったが、私を抱きすくめている。

「あの……お母様、ごめんなさい」

いい香りが漂ってくる。お母様の髪の毛の匂い。

安堵したのか、少し耳を澄ませば嗚咽すら聞こえてきそう
で申し訳なく感じた。

「お母様、申し訳ありません。ルイズは悪い子です」

「ええ、本当に。親を心配させるなんて」

きゅっと胸が痛くなる。ドキドキして破裂しそうな感情ではなく、
締め付けられるような切ない感情。

「……お礼を、言いますわ。アルビオンの白き騎士殿」

「■■■■■。■■、■■■■■」

「ええ。あなたにブリミルの加護を祈っています」

らんするつとは飛んでいった。羽をはやして、その色が憎いツエルプストーと同じ色なのが気に食わないが。

「あの、ルイズ？　こちらの方はヴァリエール婦人かい？」

「ええ。お母様よ」

「このような場で失礼します。僕はトリステイン・グラモン家の四男、ギーシュと申します」

「……アンリエッタ姫殿下は、あなたたちに戦争に参加するようにと仰ったの？」

「……私は、姫様のお願いでここに。ギーシュは、その、偶然話を聞かれて同行という形ですわ」

お母様は渋い顔をして、私とギーシュに着いてくるように言った。

「はつきり言ってトリステインの軍は動きません。私はあなたたちの保護に来た立場という訳よ」

「え？　あの、お母様。姫様はトリステイン軍との共同でアルビオンに加わるようにと」

「レコンキスタの存在が分かれば、自国を洗うのは必須です。そこで国の警備を開けるなど、いくら王とはいえ許可できないのよ。だ

から……私が来たのよ、ルイズ」

歯切れの悪い言葉。何かお母様は様子がおかしい。

「さて、長居は無用です。急いでアルビオンをでますよ」

「お母様、あそこには、まだ使い魔がいます。私だけ逃げるなんてできません」

「使い魔？」

怪訝そうな顔をした後、戦場を見る。

「あの、球体のゴーレムに私の使い魔が乗っています」

「なぜ、ルイズの使い魔が積極的に戦争に参加しているのですか！」

「ひつ、ごめんなさい……………」

お母様は戦場に目を向け、思案する。

「いえ、今更ね。そんなのは。アンリエッタ姫殿下がアルビオンの戦争に参加を促したのは事実。遅いか早いかの違いだけ。感情的になってしまったけれど……………仕方ない。あのお方の思惑に乗るのはイヤだけれど……………」

あのお方？ お母様より位が高いなんて、王族しか考えられないのだけれど。

「ルイズ、あなたは自分で自分を守れますか？」

「・・・・・・・・はい。私だって、メイジです」

「よく言いました。ド・グラモンの四男、ギーシュ君だったわね」

「は、はい！」

「ルイズを頼みます。私は、これから一迅の風となり、アルビオンの助勢に向かいます」

お母様はフライで飛んでいった。あの服装は、昔の名残だろう。お父様がこっそり教えてくれた、お母様の秘密。

烈風のカリン。

かつてトリステイン最強と言われた風メイジ。それがお母様。カリーヌ・デジレ・ド・マイヤール。

加減を知らない、台風である。

それは嵐の予感で（後書き）

烈風が戦争に投入。

ヴァリエールの私軍は動きません。カリーンが先行してアルビオンにただけなので、ラ・ロシエールで大半が足止めを食らっています。

一部は竜籠で到着予定。

それはサイトの焦りで（前書き）

サイト視点の戦争。

それはサイトの焦りで

「くっそ、こいつら……………」

何でだよ。もういいだろ。立つんじゃねえよ。

ルルーシュが俺に託した騎士王の名を冠する機体は、とんでもねえじゃじゃ馬だ。ガンダールヴのルーンで理解できても操りきれねえ。そもそも、収集放火されちゃたまんねえよ。

「何とか、しないとな」

手が震える。スイッチと共にミサイルが射出され、火薬と共に爆発しレコンキスタにぶち当たる。信じられねえが、ミサイル一発で10人ほど吹き飛ぶ。それをスイッチ一つで飛ばせば上空で拡散して数十発の小型ミサイルとなり100人ほど巻き込むつてのに、レコンキスタの勢いは止まらない。

片手が炭になりながらも杖だけは手放さない。生きているのか、死んでいるのかも分からない。そんな奴相手にまたミサイルを放つ。

竜が近づけば機関銃で撃ち抜く。だんだん竜は減るつつうのに、レコンキスタは進行を止めない。なにが奴らをそこまでさせるんだ。なんで死ぬことすら構わない特攻なんてするんだ。

「狂ってやがる……………」

どうしてだよ。日本とアメリカだって核爆弾なんて取り出したか

ら戦争が終わったんだよな。被害を増やすだけの戦争なんて、なぜレコンキスタの代表は止めようとしやがらねえ。

俺とスザクが起動不可になってもルルーシユのガウエインだけは戦闘を続行できる。こんな戦争意味はない。いい加減分かれよ、諦めろって。

『相棒！ 後ろから騎竜だ！！』

「っ！？」

やば………なんで気がつかなかったんだよ！ 竜が口を開く。プレスか、やべえな。

『まったく、見てらんないぜ！！』

デルフが装甲をパージする。戦力眼が優れているデルフにルルーシユは装甲のパージの権力を委託している。

竜はパージされた装甲にプレスを吐くが、本体には何の支障もない。そして、デルフは外部装甲をすべてパージした。ミサイルはそろそろきれかかっていたし、フェイズアップにもちょうどいい。

輝かしい栄光が、敵前に姿を現した。

身の丈は他のナイトメアフレームとほぼ同じ。外部装甲をすべてパージしたので防御性が下がり機動性が増した。

腰には大振りの剣が鞘と共にある。すでにデルフを装着している、デルフの外部装甲のようになっている王の剣。

俺はカリバーンを引き抜く。

『……………相棒、いくぜ?』

「ああ。やるぞ、デルフ」

一振り、二振り剣を旋回させる。火石への回路はまだ繋がっていないため、カリバーンはただ切れ味のよい剣だ。

先ほどの竜がこっちをみた。剣を構え、敵を見据える。

構えは刺突。風石により多少の飛行能力があるものの、外部装甲に搭載されているものがほとんどなので、アーサー自体に空中戦は厳しい。だが、どうせ数分後には地面に落ちて兵の殲滅を行うのだ。最後に騎竜をひとめて華でも添えよう。

竜がブレスを吐こうとアギトを開く。竜騎兵はアーサーを足止めするために魔法を放つ。

だが、関係ない。

【魔法を、吸収!】

「ば、ばかな!？」

カリバーンは竜のアギトを貫き、竜騎兵を串刺しにする。先ほど吸収した分の魔法を火石で増幅し、剣に纏わせた。

機体越しても分かる熱気。竜の堅い鱗を燃やし、人を炭の塊に変える。

「・・・・・・・・やるせねえよ・・・・・・・・」

『ほら、次だぞ、相棒』

「・・・・・・・・ああ。分かった」

地面に降下する。アーサーの名を冠する栄光の機体。この剣に誓って約束を偽ることはできない。だから、俺はカリバーンを構え、敵の本陣に突入を開始した。

【死にてえ奴だけ、前にでろ！！】

もう偽りは許されない。俺は自分の意志で敵を殺す。一瞬、手の震えが収まった。不思議に思う間もなく、敵は魔法を展開する。

やらなきゃ、やられる。

魔法をカリバーンで吸収し、構えをとる。対軍に用いることが可能だという殲滅技。荒ぶる炎は破壊を意味し、緑豊かなアルビオンの土を焼くだろう。

「燃えろ、王の剣・・・・・・・・」

『了解だ、相棒。パスワードを受諾した。火石に炉を回すぜ』

カリバーンの刀身が赤く染まり、やがて熱した所から炎が巻き起こる。幾重にも施された耐熱装甲を今に破って身を焼きそうだ。機体内はサウナのような気温にまで達したかと思うと、髪の毛がジリジリと焼く音すら聞こえてきた。

諸刃といていたが、これはきつい。今にも干からびて死にそう
だぜ。

コックピットに施されている冷却装置も意味をなさない。機体に
搭載されている水石も吸熱作用が働くがそれでも精一杯だった。

『相棒、完了だぜ。いつでもいけら』

「ああ、俺はやってやる！！」

自らを奮い立たせるように、剣を振るった。

瞬間。

前方が大きな爆発を起こしてレコンキスタが四散する。いや、爆
発の原因は間違いなくカリバーンだった。土は隆起し、振りおろし
た剣の先には敵も大地も焦げていた。

勢いのついた剣はアーサーの手から放れ、敵に突き刺さる。周囲
を焼き、カリバーンの下敷きとなったレコンキスタ兵はゆっくりと
火葬されていく。急いで剣を引き抜き、構える。だがレコンキスタ
は物怖じもなし。

「いったい、どうやってたら終わるんだよ、この戦争！」

振りおろした先500メートルにわたって広がる大火災に、サイ
トは悪態をつくしかなかった。

それはサイトの焦りで（後書き）

サイトが殲滅したのは5000人ほど。

それは一人の男の終焉で（前書き）

更新が遅れてしまって申し訳ありません。

リアルで忙しかったので投稿する時間がありませんでした。

これからの展開は原作から大分離れていくので更新スピードは遅くなると思います。

それは一人の男の終焉で

「……………さあ、終わりにしよう」

ルイズの関係者を送った後、エナジーウィングで飛翔し、見つけた。

オリバー・クロムウェル。この戦争の立案者で原因。彼を殺せばレコンキスタは瓦解するはずだ。

「もうたくさんだ。人が死ぬのは」

可変型ヴァリスを使う。シングルアクションで囲っていた竜を操り、射程外の敵兵に向かわせる。騎竜がヴィンダーヴのルーンで従えられることは以前助けた水竜、ウェリリウにより実証されている。愛着持ってウェルと呼ばせてもらっている。今は城で負傷した兵士の回復に従事しているはずだ。

敵陣営に近づくにつれ、魔法攻撃が活発となる。しかしナイトメアフレームに魔法が効くのかと言われれば微妙な所だ。

ランスロットが可能な高速機動において、他と一線引く。地上からの攻撃は面に点を穿つような物で、大半は見当違いな方向へとそれていく。上空の竜騎士はヴィンダーヴの力で操り、竜を奪う。

事実、焦ったのかオリバー・クロムウェルは部下に指示を出すと、上空に竜が、地面からは大砲が用意されている。

だが、そんなもの、意味はない。

大砲をヴァリスで打ち抜く。爆発四散し、火薬にもうつったのか
予想以上に災禍を振りまく。

さすがに驚いたのか、それとも部下からナイトメアの情報を聞いて
いなかったのか、目を白黒させながらランスロットを見ている。

【降参しろ、これ以上、人死にを増やすんじゃない】

声が辺りに反響する。ゴーレムから響く声に心底驚いていた。

だが、答えは拒絶。部下からの魔法攻撃。

（なるほどね、分かった。これ以上アルビオンの人たちを殺させる
ことも忍びない。僕は、そのために、君を殺す）

コアルミナスからエネルギーの消費が著しく表示される。警告文
が展開されるが、無視。ヴァリスを起動、弾を装填。オリバー・ク
ロムウェルに向けて銃口を向ける。

【迷わないでくれ。せめて、一瞬で蒸発しろ】

三秒間の静寂の後、銃口から発射された弾は大気と摩擦を起こし、
耳障りな音とともにオリバー・クロムウェルの元へと向かう。途中
で起動が何かに変えられたのかは知らないが、見事オリバー・クロ
ムウェルの半身を奪い去る。

そのとき何かがオリバー・クロムウェルの手から離れた。小さな
指輪のようだが、確かめることもできない。

その時、レコンキスタの大半の兵士の動きが止まった。

「・・・・・・・・・・どういうことなんだ？」

そしてバタバタと地面に倒れていく。一番近くの敵兵の所にランスロットで駆けてみたが、動く気配はない。確実に死んでいた。

「・・・・・・・・・・死体を操るマジックアイテムでも使っていたのか？」

だけど、それを一人でここまで操るのが可能なのか？ いろいろ疑問が沸いてくるが、今は置いておく。

まだレコンキスタの半分は残っている。まだ闘志を以て攻撃する敵がいる。

だったらそれを破壊するまでだ。

「今更許されるなんて思っていない。だから僕は、自分にできる最善の選択で未来を切り開く」

レコンキスタは未だ頭を失っても一万人近くは存命し、アルビオン兵を殺そうと迫っている。レールガンによって発生した電力を取り込み、地面に降りる。正直空中戦はサクラダイト合金の電気発生を阻害している。

後は持久戦になるだろう。少しでも動ける方がいい。

ランドスピナーを降ろし、クラウチングスタートのような姿勢になる。懐かしい感じがした。ロイドさんがニヤニヤ笑いながらラン

スロットの性能を吟味し、セシルさんがオペレータを勤めていた、
軍での僕の日常。

「行こう、ランスロット・エクルベージュ」

残響を残しながら、ランスロットは軍の中に消えていった。

それは一人の男の終焉で（後書き）

スザク戦場でオリバー・クロムウェルを殺す。

しかし勢いはとどまることなくレコンキスタとの戦争は続きます。

それは女の打算で（前書き）

ふんふん。

それは女の打算で

圧倒的な数の暴力と、圧倒的な性能の暴虐。烈風の目に映るのはメイジである前に人としての恐れであった。

トリステインの重鎮たちは、まさかこうなることを予想できたわけでもないだろう。

事実烈風も死ぬ気はないが命がけで撤退する気概で突入したのだ。

大けがは視野に入れていたが逃げられないことなどないと、私軍をラ・ロシエールに取り残す形となったが、今ではその方がよいと確信している。

アルビオンのゴーレムは異常だ。

今までのメイジの価値観を壊す代物。しかも、ルイズの使い魔——おそらく同じ型のゴーレムに乗っていたのが少年だと言うことから人であると仮定しても——一人の人間で起こせる事象を越えていた。

烈風は確かに一人で国を追いつめる戦力とまで賞賛された。

だが、彼らのゴーレムは一体で国を滅ぼすことも可能なのだ。いったい何時の間にこのような技術を用いていたのか、非常に気になるが、今はそんな暇もない。

しかし、アルビオンならと考えてしまう。

アンリエッタ姫殿下はトリステインの王女でウェールズ王子を懸想している。トリステインのアンリエッタ姫の今回の処置が何らかの爪痕を残すというなら、一度ジエームズ一世閣下にお目通り願ひ、アルビオンに移り住むというのも手だ。

いくらアンリエッタ姫殿下がトリステインでは力を振るえるとはいつても、他国の貴族になった元トリステイン貴族をどう扱うかなど不可能。幸い、少なくともアルビオンの王は感情に走る愚か者ではない。

まあ、アンリエッタ姫殿下がアルビオンの王女としてウェールズ殿下と共にというシナリオも存在するが、トリステインのマザリーニがそれを阻止するだろう。どちらの国にも子孫を残そうと思えば子供さえ王位につけてしまえばいい。

老害どもが組みしやすい王を作る為に働くだろうが、アンリエッタ姫殿下にしてみればウェールズ殿下と共にいらればいいはず。可能性としては五分五分か。

このまま他国に危険をはらんで渡るより安全な気がする。

『だとすればここで何らかの功績を挙げねばならない』

戦争中だ。アルビオンの兵士も士気をあげているが、ゴーレムたちの隙について奇襲を仕掛けるレコンキスタ兵もいる。彼らの処理に当たっているのがアルビオンの兵だが数が数だ。

仕方ない。

今の精神力を考えれば大群をゴーレムに任せて味方の援護に回った方が得策だ。打算的な計算も確かにあるが、この場合適材適所に問題解決に向かう方が無難で最上。

巻き込まれることはないだろうが、用心していこう。

レイピアを引き抜く。かつて烈風として用いたものより草臥れたというより熟練された輝きを見せるそれ。幾分か手になじむ己の杖をしっかりと握りしめる。

「今一度の烈風となり、アルビオンに加勢する」

未だにこないヴェリエールの私軍だが、あと数時間のうちには姿を見せるだろう。もっとも、彼らの到着よりも前にアルビオンのゴーレムが片づけてしまいそうな気がするが。

家族を守るためだ。そのためなら、もう一度この手を血に染める。

「ユビキタス・デル・ウィンデ」

偏在の魔法を唱え、烈風はレコンキスタへと飛びたった。

それは女の打算で（後書き）

短いです。

それは歪んだ笑みで（前書き）

ルルーシュ敵を殲滅するの回。

それは歪んだ笑みで

「スザク、Pー1地点でアルビオン第二小隊が苦戦中だ。エネルギーウイングで牽制しながら逃がせ」

【了解】

「サイト、Aー3地点からBー3へ移動。大規模な魔法陣の準備中だ。阻止しろ」

【わ、わかった】

ガウエインの中はルルーシュの声が響きわたっていた。

サイトがAーM地点まで、スザクがNーZ地点までの敵の殲滅を担当している。ちょうどニューカッスル城の前方でサイトが、後方でスザクが活躍することとなる。

風の精霊がリアルタイム通信を可能とし、人の動きが絶え間なくルルーシュの頭に浮かび上がった。以前のガウエインに搭載されていたリーダーのようだ。

スザクとサイトの両翼をうまく扱いながら自らはドルイドシステムの展開を行う。C・Cがいればもう少し楽な作業なのだが、こんな高機能演算処理をアルビオン兵に補助させることもできず、一人で行っている。

兵が少ない分扱いが楽だ。もう5割方は殲滅をしておえた。スザク

を動かして頭を討伐し、降参を進める形にすればこちらの勝ちだ。

脆い。

ナイトメアなど存在しないからか、新宿ゲッターで行った最初の反逆より楽に終わる。

「スザク、ランスロットでオリバー・クロムウェルを。サイトは二ユーカッスルに一度戻れ」

【あ、ああ。わかった】

これ以上戦わせるのはマズいな。サイトの感覚が完全に麻痺しないうちに下げた方が無難だ。

「さあ、絶望を見せてやる」

引いていくナイトメアをみて好機と取ったか、レコンキスタは進軍を開始する。

以前のルルーシュなら地下に大量の地雷やらを敷き詰めていたが、今回は時間がナイトメアに費やしてしまったため仕掛けることができなかった。さらに全包围から囲まれるということは一カ所を崩壊するだけで全滅など望めない。

爆薬での奇襲はあまり有効とは言えなかった。

メイジがアーサーに魔法を放つがかき消え、ランスロットに火の魔法が飛ぶが当たらない。

いい感じで包囲網を狭め始め、戦力が分散化する。ちょうどニコラスル城を中心に円心状、数は減ったが、それでもレコンキスタは杖を手放さない。

「さて、私も動くか………」

スザクにすら話していなかったが、ルルーシュには一つ仮説を立てていた。

調べてみればオリバー・クロムウェルはただの司祭で、人に好かれる人徳者でもなければ人を率いる才能も無い凡百な男だった。

しかし、今はそのただの司祭が国を落とそうとまでしている。

ルルーシュが作り上げたナイトメアがなければ、ここまで戦力が拮抗する前にアルビオンは沈んでいただろう。

そのような業に見覚えというより、既視感を感じた。

ならば、その戦力はどのような力を持って集められたのか。

ルルーシュは目を瞼越しになぞる。あの時オスマン学院長はギアスを強制の魔法と言っていた。それは水のスクエアスペルで人の体内の水を操り、操り人形のようにしてしまう魔法。

熟練者がかければ性格の欠損はなく、通常通りに動けるのだが、未熟者がかければ命令内容の半分も遂行しない。

オリバー・クロムウェルは水のスクエアかと聞かれれば違うだろう。アルビオンの辺境で司祭を任されるなどという小規模な仕事が

それを物語っている。

では、だ。

仮に、オリバー・クロムウェルが人知を越える御業を手に入れているというなら。

もしくはそのようなマジックアイテムを確保しているというなら。

後者ならばまだいい。しかし、前者ならば見逃すことはできない。

この大陸にC・C・やV・V・のような輩がいないなどとはいえない。

何せ、ルルーシュ自体が本来あり得ない所から呼び出されたのだから、この世界に通じるものが、本当にごくわずかな可能性でこちらに召還されたのだとすれば。

洒落にならない。

だから不安の芽は早めにつみ取るに限る。

「先ほどスザクによって消されたのは……おそらくフェイク。スキルニルで模した人形だろう。前線に敵の頭がいるわけがない。いたとすれば単なる間抜けだ」

だから本当のオリバー・クロムウェルは安全地帯にいたがらも命令を出せる位置にいる。

高い所、もしくは完全に戦地から遠ざかった所。

見るだけならミョズニトニルンで無くても高価なマジックアイテムさえあれば事足りる。

それに敵将に軍人としての才能など恐らくない。

物量作戦など死ぬことを前提とした特攻と大差ない。

「……ワルドの物言いでは、なぜ私にミョズニトニルンのルーンが刻まれていたのかを聞こうとしていた」

ガンダールヴの方が、サイトという実物を見ている分ルーンが二つあるという異常をスザクに追求するのがふつうだった。それなのにワルドはスザクへの追求はお座なりだったが、ルルーシュのルーンに関してはしつこいくらいに聞いてきた。

もしやとも思うが、レコンキスタにはミョズニトニルンがいるのだろうか。

オリバー・クロムウェルは虚無の担い手だと自称しているとウェールズが言っていたが、もしや真実なのか？

「……アルビオンの虚無か。戦争中だが、確かめねばならない」

捕まえてギアスで操り人形にでもすれば、虚無について何か知っているかもしれない。

では、オリバー・クロムウェルはどこにいるのか。戦時中でも高所から戦局を伺える場所と言えば、一番後方に展開している飛行船

軍か？

【・・・・・・・・スザク、ニューカッスルにて防衛を頼む】

【ルルーシュ、君は？】

【ハドロン砲にて敵を焼く。その後空軍の船を落とす。頼んだ】

【了解。君のことだ、何か考えあつてのことだろう】

【勿論だ】

阿咩の呼吸とでも言うのだろうか。やはり、二人揃えばできないことなどないのだなとルルーシュは思う。

通信が切れる。さて、まずは地面の掃除だな。

【ニューカッスルから左方を一掃する。総員直ちに避難せよ】

言葉の意味をくみ取ったのかアルビオン兵は下がる。レコンキスタは異様な雰囲気を感じたのか、一カ所に固まって防御を固める。

エネルギーが充電される。ハドロン砲を放つ際に赤く発光する肩口から粒子が漏れる。

機体の画面に発射準備が完了した旨の表示が現れた。

「悪く思つな。いずれはこうなる運命だ」

アルビオンに勝っても長くは続かないだろう。

蹂躪されるくらいなら蹂躪する。支配などまっぴら御免だ。

散れ、せめて安らかに。

「発射！！」

ハドロン砲が地面に接触し地面の土ごと蒸発する。ハドロン砲には火石のエネルギーを内に展開し、外側に風石の風で膜と道を形成する。地面や何かに当たった瞬間均衡が崩れて勢いよく炎上し、あたりを巻き込む炎の台風となる。

炎の中で逃げ回る敵がいた。仲間を呼んでいる敵がいた。呆然と立ち尽くす敵がいた。

奇跡的に生き残ったのだろう。しかし、それも無駄に終わる。風石のエネルギーで空気が勢いよく燃え、酸素が吹き飛んだのだ。呼吸が苦しくなり、最終的に絶命する。

次だ。

ハドロン砲を放つ機体を傾け、レコンキスタ兵を焼く。見事に焼け野原となる地面と、黒い物体と化したナニカ。人が焼ける臭いがここまで臭ってきそうだ。

さあ、レコンキスタ諸君。そろそろ終わりにしようじゃないか。

ガウエインは炎の中で唯一絶対の存在感を放っていた。

それは歪んだ笑みで（後書き）

圧倒的な蹂躞を行うルルーシュ。

それは別の頭脳で（前書き）

彼女がログインしました。

それは別の頭脳で

最初は何かの間違いだと思った。なぜなら、コレは勝つべき戦争だったのだから。

「……………夢でも見ているのかしらね」

シェフィールド——ミョズニトニルンは忌々しそうに舌打ちをする。

戦場を駆け巡る三体のゴーレム。いや、ゴーレムではあのような機動性を持つことは不可能。どちらかと言えばガーゴイルに近い。

もっとも、ガーゴイルの何百倍の性能差があるだろうが。

これは誤算だ。

確かにアルビオンは以前からゴーレムの開発に着手をし始めたと連絡はあった。

もちろん、他国にも伝わっているだろう。

盛大に笑ったものだ。風の国が、ゴーレムの開発。ガリアでなら魔法技術大国でなら他国も警戒した。

しかし、戦争にゴーレムを投入するという考えは大いにアルビオンの勝機を下げる筈だった。

精神力を常時食らうゴーレムの操作など、戦場で行えるわけがない。土メイジがゴーレムを戦争で使わない理由はそこにある。

燃費が悪いなんてものじゃない。精神力の枯渇で死ぬかもしれない。

ジョセフ様だけは笑いながらも気をつけると仰っていた。

事実、その通りだった。過信しすぎていた。

ゲルマニアも漁夫の利を狙って軍を編成しているし、トリステインは予想通り恋に盲目な姫が戦争の準備を始めた。ロマリアは静観。ガリアはそもそもジョセフ様がアルビオンに仕掛けたゲームだ。騎士を派遣などとは考えていない。

アルビオンを落とし、傀儡として操っていたオリバー・クロムウェルを殺した後はガリアにアルビオンを吸収させ、ジョセフ様に献上する予定だった。

だが、それも、崩れてしまった。

「忌々しい……………」

レコンキスタが飛んでいく。魔法ではなく、物理的に。

一体のゴーレムは騎士のように雄々しく、滑走する。自然災害を彷彿とさせる。雷や台風のような理不尽な暴力。

一体のゴーレムは王のように勇ましく、駆け巡る。地面をまるで切り裂く様に、剣を振るっている。

一体のゴーレムは城のように堅牢で、泰然と構える。動きはないが他のゴーレムと劣るところは見当たらない。

一体だけでもややこしいというのに、三体がそれぞれ違うコンセプトで作られ、見事に制作者の意図を読みとるかのごとく動いている。あれは戦争の為に作られた兵器だということが分かる。

どれほどの技術を内包しているのか。

「しかし、あれを持ち帰ればジョセフ様も……」

あれはいい玩具だ。ジョセフ様も喜んでくれる。そう思うと是が非でも手に入れたくなった。

仕込みを終えたらすぐに帰るつもりだったが、ジョセフ様が子供のようにしゃいであのゴーレムを見て、そして自分を見ながら誉めてくれるという妄想に明け暮れる。

幸い、前線にでていたオリバー・クロムウェルは死んでしまった。

どうしても戦場に送り出さねば始末に手間がかかる。志気云々、指揮云々で誤魔化したのが、先ほどゴーレムの速射砲により死亡した。連絡用に用意したマジックアイテムが破壊されている。

だが、スキルニルで敵の目を欺くことなどできないだろうか。

そう、戦場で暴れていたゴーレムは不可能でも、城の防衛を担っていたゴーレムには機動性能が低いように見えた。そして攻撃手段は肩についた大型魔法兵器らしきもののみは確認している。

なら、狙う。

オリバー・クロムウェルから搾取した血と髪の毛からスキルニルを形成。特別に生前よりも行動や魔法を高ランクにまで使えるように特別に改良したものだ。

「待つてなさい。必ず手に入れてみせるわ」

黒いゴーレムに的を絞る。実験段階だが、少し特殊なガーゴイルを使おう。

圧倒的にこちらの大きさが勝る。捕獲して技術を吸い取ればいい。ミヨズニトニルンのルーンを用いて全力で解析してやる。

「ふふふ、面白くなってきたわね」

アルビオンを落とすなどよりよっぽどいい。身の程を弁えないオリバー・クロムウェルでイライラさせられた分のストレスでも発散させてもらおうか。

ちょうど白と黄は城まで下がったのを確認する。黒いゴーレムが動いた。肩口的大型魔法兵器が地面を焼いている。レコンキスタの雑兵を一方的に殺している。

全く持つてすばらしい。あれさえあれば、エルフとも戦えるのではないか。

しかも、悔しいが自身の持つ頭脳を用いてもあの攻撃は理解できなかった。赤い光が幾筋も集まり、巨大な光線を形成するもの。

まさか、この世に存在する極小の粒に干渉して熱波として放っているのか。

「・・・・・・・・いいわ。来なさい人形」

オリバー・クロムウェルのスキルニルの一体をそれらしい場所に放つ。

知恵比べだ。

どちらの戦術が上回っているか。

罠に罠を張り巡らせて互いの手を打ち取る。

帰ったらジョセフ様にチェスでも教えていただこうかしら。

「それもいいわね」

ああ、それも幸せな一時だ。こんな面倒な戦争を早く終わらせ、ジョセフ様のもとに帰りたい。

それは別の頭脳で（後書き）

ミヨズ姉さん登場回。

それは狂った男の戯言で（前書き）

どぞ。

それは狂った男の戯言で

オリバー・クロムウェルはすぐさま見つかった。

戦場から精霊が激流のように流れてくるために正確なものかスキルニルかは分らないが、どちらにせよ捕獲する。

現実的な答えとして、レコンキスタは勝利を確信しすぎている。

情報など手に入れることがいくら難しかろうと、スパイがいる可能性も視野に入れてはいたが、ルルーシュがナイトメアフレームの開発を行ってから国外に逃げようとしたものは検閲で引っかかっている。

怪しい怪しくない云々の前に、忠誠心のある者しか残っていなかったのだ。

今更どこかに逃げるとは考えにくいので少々強引だがギアスで吐いてもらった。

引っかかったのは八人。情報が外に漏れるにはトリスティンに送ったと思われるあの手紙にランスロットが書かれていたと見るのが妥当。

それがレコンキスタに伝わっているのなら、アルビオンのゴーレムがただのゴーレムではないことは知られてしまったか。

アルビオンから逃亡しようとした他はギリギリまで活動していた死の商人や領地に取り残されてしまった農民がやっとのことで国外

に行ける時だったりいろんな理由があった。

それでもレコンキスタは勝負を挑んできた。つまり、勝負に確実に勝つ方法が存在するということだ。

たとえば、他国の援助がある……だとか。

妥当なのはゲルマニアか。

トリティンがゲルマニアに同盟を結んではいるが、ルルーシュが作ったナイトメアフレームは工業大国であるゲルマニアを刺激しない。

アルブレヒト三世がどんな人物であれ、サンプルを取りたいと思えばレコンキスタに加担した方がよい。

次点でガリア、ロマリア。もっとも考えつかないのがトリステイン。

しかし、ルルーシュがナイトメアを開発した時期とレコンキスタがアルビオンを落としそうになったときは一致しない。

つい先日まではアルビオン軍ですら絶望していたからな。

後にレコンキスタとゲルマニアが同盟を結ぼうにも利益を取られないなどたまったものではない。レコンキスタが同盟に賛同しない可能性の方が大きい。

「どちらにせよ、やっかいだ」

まだまだ魔法という認識の範囲が狭いルルーシュでは、不測の事態に陥りやすい。自らの弱点を自覚している分だけに過剰にも及ぶ戦力を投入した。レコンキスタを滅ぼした後に、どこぞの国が乱入してくる可能性も捨てがたい。

勝ちを確信しているのならその隙を打つ。情報が伝わっていないか
ったであろう前線は今大きく混乱している。

オリバー・クロムウェルが死んだことに起因するのかわか
らないが、レコンキスタの兵士が何千人単位で地面に倒れた。スザ
クによると完全に死亡していて、水のマジックアイテムが何かで操
られていた可能性が多いという。

それがほぼ前線に投入されていた兵隊や指揮官だったのだから、
なるほど悪趣味にもほどがあると思った。

オリバー・クロムウェルは死者を冒瀆し、死後ですら体を弄んだ
のだ。さすがにこれには腹が立つ。ルルーシュも戦争中なら容赦な
く敵を殺してきたが、奇策の粋では測れない外策に胸がムカムカす
る。

「私も大概酷い男だと自覚してはいたが、さすがにな」

虚ろな目をした兵を吹き飛ばしてきた。

何度も彼らは起きあがった。

当然だ。

痛みもなく、すでに死んだ肉体を無理矢理酷使されていただけな

のだから。

「さて、見えてきた。覚悟を固めろよレコンキスタ」

雲がハドロン砲を構成する粒子の妨げになると踏んでできうる限り近づく。

機動性能は遅いガウエインに幾つもの砲撃、魔法が放たれるが、ドルイドシステムの前には前時代の武器など効かない。あっけなく阻まれ、地面に落ちていく。

ちょうど船が旋回し始めたあたりでハドロン砲を放つ。船体が赤い光で貫通し、煙を上げながら落ちていった。

単純な作業と化した破壊。船が逃げ、砲撃を放ち、メイジが魔法を放つ。だが。

「無駄だ」

ハドロン砲でそれを粉碎する。拡散したハドロン砲は船の船体に無数の穴を開け、時にはメイジの体を貫通し、時には大砲を爆発させていく。

地面に展開していたレコンキスタ兵は巻き添えを食らって全滅した。

「さあ、戦力は壊滅状態だ。どうでるレコンキスタ」

そのとき、船の船体から竜が一匹飛び立つ。

間違いない。オリバー・クロムウェルだ。スザクが近くにいないことで竜は何匹かはスザクの制御下から離れていた。

戻すべきではなかったが、ちょうどいい。

残った用済みの船を沈める。人の声が聞こえてくる。悲鳴が聞こえる。

敵の声だ。耳を貸すまでもない。

「ふん。今はオリバー・クロムウェルを優先させる」

サウスゴータ方面に逃げたオリバー・クロムウェルを追う。そしてこの目で確かめる。彼がギアスを所持しているのか、使い魔が虚無の使い魔なのか。

注意を怠って殺される前に。情報を得るために。そして、もう一度、自分たちの世界へと帰還するために。

そこは開けた平野と、視界いっぱい広がる木々がすくすくと育っていた。ガウエインで追跡した先には、かつてサウスゴータと呼ばれた貴族が執政を担っていたが、ジェームズ一世が肅正したと聞く。

「追いかけてこは終わりだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

アルビオン本隊からは幾分も離れてしまった。しかし、戦争はガ

ウェインを動かし、死体が死体に戻ったときには八割方終了していた。レコンキスタの生き残りは、圧倒的なゴーレムを見て降参したのだ。

ひと段落つき、今度はこちらの事情を優先させる。

「さて、少し相言にでもつき合ってはくれないか。オリバー・クロムウエル」

「……貴様がいたから、余は負けたのか」

「そうだ。愚かだな、オリバー・クロムウエル。貴様に人の上に立つことはできなかったということだ」

五メートルに及ぶ巨人の前で、オリバー・クロムウエルは無然と構えていた。生前の彼を知るものがここにいれば、少しは状況が変わったのかもしれない。

「さあ、話してもらうぞ。貴様は、虚無の担い手なのか？」

「……虚無？ ああ、そうだ。余は虚無の担い手である。アンドバリの指輪を用いて死者を動かし、奇跡を体現させた。このような力が虚無以外の何である」と

「アンドバリの指輪か」

おそらく、男の妄想である可能性が高まった。強力なマジックアイテムを用いたときに力に溺れでもしたか、もしくはかねてより身のうちに野心があったか。

相手の事情など知ったことではないが、万が一ということもある。連れ帰ってニューカッスル城に引き上げた後ギアスですべてを吐いてもらおう。

戦犯なのだから死刑は免れないな。

「貴様がいたから、ゴーレムさえいなければ余の勝ちであつた！貴様が、貴様さえいなければ！」

「そう口汚く罵られてもな。現に私はアルビオンに滞在していただけだ。自分の運でも呪うがいい」

「だいたい、ガリアはなにをしていたのだ！ アルビオンを共に挟撃させるはずではなかったのか！」

「……なに？ ガリアだと」

「ああそつだ！ ガリアだ！ 奴ら、始祖の使い魔である神の本を名乗る女が、私に囁いたのだ！ なにがシェフィールドだ、なにがミヨズニトニルンだ！」

この男、こうもペラペラと情報を喋ってくれるのか。味方であれば即殺すが、敵である分には望ましい。ギアスをかけなくても誘導尋問だけでこの戦争の裏が取れるのではないか？

「貴君は、ガリアのせいだと仰りたいのか？」

「ああそつだ。余はただ騙されていたにすぎん。ブリミルに唾吐く行為である！ 司祭である余を騙したとあつてはロマリアも黙ってはいまい！ 後悔しろ！ ジョセフめ！！」

なるほど。裏では無能王ジョセフの影か。情報をまとめるには早いが、ジョセフの近辺にシエフィールドというミョズニトニルンの女がいたようだな。ジョセフが虚無の担い手である可能性も高い。

「どうせ、戦争に用いたのは死体が大半だ！ いいではないか、もう死んでいるのだから――！」

ただ、その一言がルルーシュの理性に爪を食い込ませた。

「何だと？」

「死体を操っただけだ。なにが悪い。そもそもアルビオンも悪いのだ」

オリバー・クロムウェルは自身が悪いという思考回路を持ち合わせてはいなかった。

元々が司祭という小さな世界で動いてきた男が、力を手にしただけでみる世界が変わることもなかったのだ。国に蔓延る自分に都合の悪いことに不満を持ち、それを行った国に恨みを持つ。

個人ではなく、国に。子供の理論である。最悪の理念だった。

ここまで大規模な、または一国を落としかけた男がこうも無能であるとは甚だおかしい。部下に恵まれたか、時代に恵まれたかは知らないが、どう転んでもレコンキスタに未来はなかった。

いずれ瓦解する。

「ああ、貴様、余の元にこないか？　ここまでのゴーレムを操れるのだ。来い、今のアルビオンを妥当しようではないか」

オリバー・クロムウェルは目を疑う行動にでた。先ほどまで敵対していた国の兵器に近づいてきたのだ。その顔には愉悦しか浮かんでいない。精神が極限状態に達していて冷静な判断などできなかったのかもしれない。

情報をとらなければいけない。しかし、オリバー・クロムウェルはガウエインの足下にまで迫り、機体にふれようとしている。

やめろ。

部下に戦争を説いた口でルルーシュを説得する。

やめろ。

戦争を指揮した手でガウエインに触れる。

やめろ。

濁った目でルルーシュを見透かすように見ている。

それが、異様に不快で。まるで良くできた人形と会話しているみたいで。

「ガウエイン『私』に、触れるなああああ！！」

ガウエインのスラッシュハーケンで勢い良く、オリバー・クロムウェルは斬り裂かれた。

それは狂った男の戯言で（後書き）

クロムウェルが何回も死ぬ。

それは命の灯火で（前書き）

ふんふん。

それは命の灯火で

「な・・・・・・・・」

瞬間、オリバー・クロムウェル体から強力な悪寒を感じたが、遅かった。

人体が勢い良く爆発したのだ。

閃光が目を焼く。

地面が大きく陥没し、ガウエインのフロートシステムにも影響を与えたのか、飛行不可となった。

「なんだ、いったい」

何が起きているのか。

努めて冷静に対処するべく呼吸を整える。

なぜ、爆発した。

ガウエインにそんな装備はついていない。

では何か、オリバー・クロムウェルは体に爆弾でも巻いて戦争に参加していたとでもいうのか。

爆発後には、そこにはオリバー・クロムウェルの姿はなく。代わ

りにローブ姿の女が現れていた。しかし、ルルーシュは閃光に焼かれた目を押さえているため目を開くことができない。

「初めまして。アルビオンのミヨズニトニルン」

彼女は先ほどのオリバー・クロムウェルと違い、しっかりと声で話す。

女であった。声で判断する限りは。胡散臭さはC・C.と同じくらい怪しい女。

「どうかしら。全く分からなかったでしょう？ 彼がただのスキルニルだって」

「……魔法、人形か」

「正解。演目は決まっていなかったけれど、あんなにペラペラと情報を話すだなんてこちらでも予想外ですけどね。人格を強化した分、口が軽くなったのか」

女はそういいながら嘆いていた。いや、ため息をつきながら考えているようだった。

「と、いうことは貴様がガリアのミヨズニトニルンか？」

「ご明察。本来ならでてこない裏の黒幕の一人とでもいいましょうか？」

「くだらん。では、なぜ貴様が現れたのだ。もうすでにアルビオンとの戦争は終わっている。カーテンコールの後のサプライズにして

は、少々やりすぎではないか」

「本当なら、ここにはいなかったのだけれどね。興味を持たされたの。そのゴーレムに」

「ナイトメアフレームにか？」

「ナイトメア……悪夢、騎士、ね。なるほどいい得手妙だね。ゴーレムでもなくガーゴイルでもない。第三の人形」

「だが、ここで出会ったのは貴様の運の尽きだな。おとなしくガリアに戻っていればいいものを、むぎむぎでてくるから死ぬ羽目になる」

白い靄がかかったような視界を開ける。

ローブを着た女がいるということしか情報は入ってこない。だが、一人であるというなら始末は簡単だ。膝間接を曲げ、ハドロン砲の角度を女に向ける。フロートシステムで上空からの強襲を防がれたので仕方ない。

「あら、あなたに私が殺せるのかしら」

「傷痕ではすまないぞ」

「怖い怖い。でも、あなたも人を嘗めすぎではないかしら？ 私は単身で乗り込むような愚はしない。ほら、ね」

上空から大型のガーゴイルが二体飛来してきた。ハドロン砲を押さえつける形で両脇に取り付かれ、動きを押さえ込まれる。

所詮ガーゴイルだと思っていたが、その力は普通ではない。見れば額にミョズニトニルンのルーンが刻まれているほかに、両腕にもルーンが刻まれていた。

力のルーンだ。

「……ちつ、これはやられたな……」

曲げた膝関節のせいでうまく立ち上がることができない。飛来したガーゴイルはせいぜい4メートルほどの大きさ。それが二体重石になるだけで動けないのには理由がある。

ガウエインにはそもそも、このような状態は想定していない。

フロートシステムの負担を軽減させるため、極限までの軽量化、装甲の強化でまかなっている。特にハドロン砲やスラッシュハーケンの射出口は特別注意して作られている。

はつきり言つて、馬力がでない。圧倒的なまでに軽量化を図った機体と、元々重いもので作られているガーゴイル。一体だけなら結果は違つただろう。しかし、二体で均等に押さえつけられると脱出は困難になる。

圧倒的な力を手に入れて目先のことがうまく見れないとは、とルーシユは反省した。

といつてもここで反省したところで圧倒的な不利を覆せはしない。

ガウエインの中からミョズニトニルンに魔法を放つても、恐らく

無駄だ。身を守るガーゴイルが盾となり、決定打を与えることもなく簡単に殺される。

「…………ガウエインをどうするつもりだ？」

「捕獲するわ。でもあなたは知らない。危険なもの。殺しなさい」

ミヨズニトニルンが声を放つと、ガーゴイルは腕を振りあげる。押さえた手とは逆の手でコックピットハッチを無理矢理に開かれる。メキメキと音をあげ、ガーゴイルと対面する。

（まずい！ このままでは！）

ルルーシュの目の前には牛を模した悪魔のような顔を持つガーゴイルが二体。

重厚な金属で作られたソレは、ルルーシュを前にして嗤っているように見えた。あっけなく、何ともなしに放り投げられる。

軽く放り投げられたが、凄まじい衝撃とともに地面に激突し、息ができなくなる。

頭を打った。

クラクラと脳が揺らされたのか、目の前がぐにやりと歪む。

「へえ、案外簡単にいくもんじゃないか」

ミヨズニトニルンがガウエインに搭乗する。奪われたのが分かっているのだが、頭がしっかりと働いてくれない。

「それでは、さようなら」

ガーゴイルがルルーシュを押し潰す。重量がルルーシュを遅い、体に圧力がかかる。追いかけるわけにはいけない。ガウエインは私の盾、私の鎧。私という存在を押し込む使う予定のない棺桶だ。

貴様などに、ガリアなどにくれてやる物でもない。

背中から嫌な音が聞こえてくる。ミシミシと、メキメキと。先ほどのコックピットハッチを破壊されたときよりも大きく音を感じる。

死にたくない。死ぬわけにはいかない。

ルルーシュは自身にかけたギアスが発動するのが分かった。自らの意志だけでどうにかなるものでもないが、ギアスは賢明に生きようとするルルーシュの助けとなる。

しかし、検討空しく。意識は闇の中に落ちていった。

それは命の灯火で（後書き）

一変して危険な状況に。

次回はミヨズ姉え主体でさあ。

それは無能王の喜びで（前書き）

ガウエインを捕獲された。

それは無能王の喜びで

拍子抜けだ。

簡単に手に入れられた。

大型ガーゴイルのみで何とかなった。

ガリアのリユティス上空をガウエインとやらに乗りつつ、飛行機が損なわれたままなのでガーゴイルに運ばせる。ヴェルサルティル宮殿は目と鼻の先。ああ、こんなにうまくいくなんて。

「私が手に入れた。このガーゴイルを……………」

ジョセフ様はきつと喜んでくれる。

甘美なひとときを予想するだけでこんなにも幸せな気持ちになれる。あれだけ戦争で暴れたのだ。きつとこれを解析すれば量産が可能な手段も生まれるかもしれない。

「さて、ヴェルサルティル宮殿まであと少し。少し解析を始めましょうか」

額のルーンが輝き、ガウエインの内部構造を読みとっていく。しかし、予想外のことが起きた。

「……………私の進入が阻止された？」

何かにはじかれたような衝撃と共に、頭痛がやむ。表面だけでも読みとろうとするが、全く役に立たない。

「癪だけど、王宮のメイジに任せましょうか」

できないものは仕方ない。何せ、これがまだマジックアイテムであるというのは推測の域でもないもの。魔法具を操る事はできても魔法を使うことは私にはできない。

「……、アルビオンのレコンキスタは壊滅。オリバー・ク
ロムウェルは白銀のガーゴイルにより半身が吹き飛び即死。兵の大
半は虐殺され、降伏した兵も殺されるでしょうね」

ジョセフ様はこの結果をどう見るのだろうか。結果が狂わされた
ことに怒り狂うのか、それとも予想外のイレギュラーの乱入に歓喜
するのか。

「考えていても詮無きことね」

リュティスにガウエインというガーゴイルを降ろす。

「おお、おお、余のミューズよ！ コレは一体何なのだ？」

「ジョセフ様、これはアルビオンのレコンキスタを壊滅せしめたガ
ーゴイルですわ」

「なんと！ コレがそうか！ 何とも面白い！」

やはり子供のようににはしゃいでいる。ふっと頬が緩んだ。できれ
ばずっと、こうしていたいものだ。

・・・・・・。しばらく後に王宮勤めのメイジから報告があった。
ガウエインというガーゴイルにはあり得ない程の高威力の爆弾が
積まれている。今すぐ起動する事はないが、取り除いた方がいいと
いう。

なぜなら巻き込まれる範囲が400メートル。リュティスの一部を
たやすく壊す範囲であった。

それからは内部構造がどうなっているか聞いたが、要点の掴めな
い説明を辿々しく行われた。

何でも電力回路と魔法回路が存在し、二つのエネルギーを併用し
ながら操作するものだというのに、魔力回路が空っぽだという。

ほかにも新金属繊維の存在や、つい最近発見された粒子論を用い
た破壊兵器など、本来ならあり得ない技術の結晶が詰まっていると
語っている。

「わかったわ。私も調べる」

やはり自分の目でもう一度確かめなくては。幸いメイジの説明で
新たに分かったところから、ミヨズニトニルンでも理解できない範
囲に意識を向ける。そうすれば何らかのコンタクトをとることも可
能かもしれない。

「夜に見るものじゃないわね」

倉庫に納められた黒い機械人形。

メイジはここから取れるだけの技術を吸収しようとディテクトマジックをかけてガウエインを分解していた。それを帰らせた後、もう一度搭乗口から内部に入り、システムを確かめる。

「そういえば、私起動するの初めてね」

ミヨズニトニルンのルーンは何とか滑り込ませることで内容を理解できた。

もつとも頭痛がひどくてしばらくにも考えられなかったが。

読みとった内容確かめつつ、起動シークエンスを確認し、ガウエインを動かす。

「・・・・・・・・！？」

突然、コックピットハッチが固定された。いくら強制脱出を行おうとしても操作を受け付けない。

画面には時間の表示がなされ、三分もしないうちに爆発させる指示を表示させる。キャンセルをするために画面を操作するが、『指紋認証が失敗しました』と表示される。

このままではまずい。

何とかマニュアルを引っ張りだし、爆発の阻止を入力する。

しかし、パスワードは不規則に変わり、変化させられ、八秒間に配列がすべて入れ替わるという暗号化が施されていた。これを解く

には暗号の規則性と不規則性のリズムを見だし、さらに未来予測にも等しい演算を求められる。

そんなの、無理だ。神の頭脳でも無理だというのだ。あの青年もおそらく暗号を解かせるつもりなどないのだろう。

「く、…………油断したわ、あの坊や…………っ!」

悪態が口から出るが、こうなってはどうしようもない。

暗号を最初から入れていくが、入れて数秒後にはエラーが生まれる。数式を分解して別のアプローチを試みても、文字の配列を変えて別の文字を作るという暗号も、結果はエラー。

「ガーゴイル!」

すぐさまガーゴイルを呼び、コックピットハッチの切れ目に強引にねじ込む。

爆破まで時間はないが、最悪の結果だけは避けたかった。内部からの爆発を内部で受けるなど自殺行為も甚だしい。

せつかく手に入れた魔法人形…………いや、ナイトメアフレームを手放すのも惜しいが、命には代えられない。

「あと、30秒…………」

冷や汗が流れる。ガーゴイルはコックピットハッチを打ち開け、私はガーゴイルの肩によじ登る。

「おい、余のミューズよ。この騒ぎはなんだ？」

背筋が凍った。

なぜジョセフ様がこの場にいるのか、そして最悪のビジョンが頭を支配した。

爆発に、巻き込まれる。

誰が？

ジョセフ様が？

でも虚無の加速が……いや、詠唱を唱える暇もない。

何よりジョセフ様は状況の理解が追いついていない。

命には代えられない。

私なんかよりも、ジョセフ様を守らなければいけない。なら、やることは一つだ。

ミョズニトニルンはガーゴイルをガウエインに集中させ、数十体のガーゴイルをジョセフの前に置く。そして自ら火の魔法に対抗できるマジックアイテムを操作する。

「ミューズよ、これはどういうことだ！」

「申し訳ありません、ジョセフ様。ガウエインの起動には特定的人物以外が触れると自爆する装置が組みまれていたようです……」

「装置？　すると何か？　この状況はまずいのではないか？」

「いえ、私が、ジョセフ様をお守りしますわ」

この命に代えましても。

その日、グラントロワの格納庫が全焼した。

ジョセフは軽傷と火傷を負い、真っ黒に焼けた人型の物体を持って佇んでいたという。

辺りにはガーゴイルの腕やら顔やらの部分が衝撃の強さを物語るかのように散乱し、グラントロワも10分の1ほどの場所で爆風、瓦礫により死傷者が出た。

ナイトメア【悪夢】。ガウエインが引き起こしたのは、まさにその一言で事足りる惨劇だった。

それは無能王の喜びで（後書き）

転んでもただじゃ起きないのがルルーシュ。

ちなみにガウェインの自爆は生易しい方でサイトに組まれている
自爆装置はエンジンと繋がっているため、規模はトリステインの地
面を大幅に削り、首都であれば壊滅させることも可能。

恐ろしい。

それはアルピオンの関で（前書き）

ほったらかしにしていますすみません。

書き溜めた分を放出したいと思います。

治療行為に目を向けている。すると、ランスロットが僕の元にくいた。スザクだ。背中にある搭乗口から顔を出し、こちらに笑顔を向ける。

「アルビオンは、これで救われたかな？」

聞かなくても分かるだろう。苦笑しながら聞く彼に、当然だろうと顔を向ける。

「ああ。アルビオンは救われたんだ。君たちのおかげでね」

感謝してもしたりない。たった3人。しかし、最強の3人だった。しかし、これは少しまずいことになったかもしれない。

他国にも、おそらく時間をおかずにルルーシュ達のこととは伝わるだろう。これからの戦争に、ナイトメアフレームが有利に働くと知った国はすぐさま刺客を送ってくる。

特に、ゲルマニア。そしてロマリア。トリステインも同盟を盾に技術開示を求めてくるかもしれない。ガリアもあり。

戦争後の疲弊しきった国を再建させなければいけない。

でも時間がない。

こうなれば他国と不可侵条約を認めさせるか一時的に他国との同盟を取り付けて防衛に回ってもらわなければならない。だが、それは今までの戦争後の対応だ。

今後はルルーシュ達が争いの中心になる。

サイトはおそらくヴァリエールの後ろ盾がある分、ある意味大丈夫だ。

だが、ナイトメアはすでにアルビオンでの運用がルルーシュによって決められているため、トリステインに献上はできない。ヴァリエールが強硬にしようとも魔力石の条件はクリアできない。ルルーシュでしか詳細は分からないのだから。

アルビオンがダメだと分かれば、トリステインでもサイトを捕まえて尋問する輩がでてくる可能性は高い。

サイトは操縦の仕方は何となく分かるそうだが内部構造は読みとっていない。

あくまでガンダールヴとは武器の扱いに長けるだけで、武器が何であるかを理解する精度は低いそうだ。

もしかしたらナイトメアなどの複雑な機械をサイトの脳が無意識に拒否しているかもしれないが。

取り込むか？

しかし、それではヴァリエールを敵に回しはしないだろうか。

三女の使い魔をくださいというのは不義理だろう。

ましてやヴァリエール嬢はこの戦争の中アンリエッタの手紙を届けてくれた勇猛果敢な少女であるし、婦人については兵の防衛、レコンキスタの牽制に回ってくれた。

なんとしても、今後ルルーシュ達を守るのはアルビオンだ。彼らに救われた命を、レコンキスタによって殺された者の意志を僕は継がなくてはいけない。

決して裏切らない。そう心に決めた。

「ところで、ルルーシュは？」

「先ほどガウエインで地面の敵を一掃したあと、敵船艦を破壊していたよ。そのあとどこかに行ってしまったけど」

「……………そうか。いや、喜びを分かちあうには彼がいなければ始まらないからね。すぐ帰ってくれるだろう」

「ルルーシュは何か考えがあるはずさ。もっとも、誰にも話してくれないから誤解されることが多いけどね」

「あ、あれ、終わったのか……………よかった」

サイトは呆然と歓声を聞いた。未だに実感と現実感が湧かない。でも、今だけはせり上がってくる吐き気よりもやっと戦争が終わってくれたという安堵感の方が勝っている。

『おつかれさんだな、相棒』

「……………ああ。全く爽快感も喜びも湧かないけどな」

『戦争なんて終わっちまえば空しいもんさ。勝者も敗者もな』

そうかもしれないな……とサイトは思った。この戦争で両軍は失うことしかしなかった。アルビオンは国の大半を失いかけ、レコンキスタは兵の大半を失い組織は瓦解した。

アーサーは強大な力だ。サイトがルルーシュから託された剣だ。もしこれが敵の手に渡った時を思えば背筋が凍る。

トリスティンが災禍に包まれ、シエスタやマルトーさん、ルイズが殺される。考えただけでも胸くそ悪い。

『ほら、何辛気くさい顔してんだ。とつとと娘っこに無事な姿でも見せてきな』

「そ、そうだ、ルイズ！」

サイトはコックピットから外へと駆け出す。ルイズが無事かどうか確かめるためだ。やれやれとデルフリンガーはため息をつき、改めてアーサーの考察に入った。

『ふむ、まあ俺もこんな姿になるだなんて予想もしてなかったがよ、こんなもんエルフでも作れやしねえ。俺の能力を最大限利用できる構造だってんなら、ルースウェルの兄ちゃんにはバレちまったかね』

カリバーンの中に埋め込まれたデルフは身じろぎする。と同時にアーサーも動いた。

サイトという操縦者を失ってなお、アーサーは活動ができる。デルフリンガーという第二の核が、アーサーを操ることが可能なのだ。

『確かに俺は吸った魔法の分だけ担い手を動かすことができるが、誰も話しちゃいねはず。というよりさっきまで俺自身も忘れてたしよ。偶然か？ それともインテリジェンスソードの能力を見抜いて合わせてきたのか？』

そのとき、ルルーシュはミョズニルンでもあったことを思い出す。

『ガンダールヴとミョズニルン。確かに俺には両方の適正があるが、相棒より先に別の奴に能力を見透かされてるってのはイヤなもんだな』

怖え怖えとデルフは呟く。遠くの方でまた口喧嘩をし始めた担い手と虚無を見ながら。

「ルルーシュが、いない？」

スザクがその報告を聞いたのは戦争が終わってすぐだった。戦争中に確かにルルーシュはガウエインでどこかに行っていた。しかし、それは雑兵狩りや伏兵の心配などの、二次的被害を押さえるためだと思っていた。

スザクはいやな予感がした。ルルーシュが狙われるとすれば、戦争後だと思っていたから。

他国はナイトメアの存在を否定するか、取り込もうとするはずだ。戦争で疲弊しているアルビオンからルルーシュを浚いに刺客が送り

込まれる懸念はあった。

ロマリアなどはブリミル教を盾に糾弾するだろう。民衆を味方につけて。

わずかに残った民衆はナイトメアフレームが戦争で活躍してくれたおかげで助かっていると自覚がある分、取り込まれる心配はないけれど敬遠なブリミル教徒なら密告に走るかもしれないが。

「少し、探してくるよ」

ウエリリウを呼ぶ。水竜の割に飛行することが可能で、先ほどまで兵の治療に当たっていた。頭を撫でるとくすぐったそうに目を細め、キューキューとイルカのような甲高い鳴き声をあげる。

（いや、確定した訳じゃない。でも、ルルーシュがいつまでたっても帰ってこないなど……）

自分の考えを棄却する。あり得ないあり得ないと、必死に頭では否定する。

僕たちは決めたはずだ。必ず元の世界に帰ると、契約を交わしたんだ。

その思いに嘘はない。ルルーシュは死ぬことだけを考え、僕は生きていてほしいと思うが、元の世界に帰る、その一点に限ってはお互いに納得をしたはずだ。

トリスティンでも、アルビオンでもルルーシュに不信な点はなかった。昔のまま、僕の知るルルーシュだった。

矛盾はない。ルルーシュが行ってきた行動には一定の理念と理由があった。

（だったら、なにがこんなにも僕の心をかきむしる！！）

よぎったのはユフィとゼロの会談。そして銃を片手に、ギアスで操られて日本人を虐殺する彼女の姿。

信じたかったのに裏切られた、昔の苦い記憶。たとえルルーシュが意図しないといっても、結果ユフィが死んだことには変わりない。戦争という状況がフラッシュバックを起こしたのかもしれない。ルルーシュを憎む心を、ルルーシュが償うことで納得していた。そんな自分はルルーシュの決意を挫き、今はルルーシュを生かそうとしている。

余りに身勝手すぎやしないか？

枢木スザクという人間は、いったいなにがしたい？

ルルーシュを殺したい？ ユーフェミアの敵を討ちたい？ ナナリーの支えになりたい？

『自分に罰がほしいだけなんだろ』

かつて、マオというギアス能力者は僕に言った。自分に罰が欲しいだけ。思えば名誉ブリタニア人となり、日本人を解放したいと思うよりも以前。僕の心にあったのは誰かに罰せられたいという甘えだった。

死にたくないけど罰は受けたい。そうしなければ自分を赦されるとは思っていないから。

枢木スザクは別に勇敢な人間ではない。だが間違ったことに間違いだといえる勇氣はある。

しかし、どんなに正しいことを述べても手痛いしっぺ返しを食らうことが本能的に分かってしまった。

僕は空っぽな人間だ。父を殺したその日から、何かに突き動かされてここまで来た。

結果、愛する人も、親友も、自分すらも抹消されることとなる。

ルルーシュが死んだ後は、僕がゼロになる。枢木スザクという人間は公的には殺されていて墓の中だ。

それが僕の罪ならば。決してルルーシュが裏切らないなら。ナナリーを支えることに約束した。

僕が恐れているもの。僕と世界とのつながり。ルルーシュとの絆が、この世界での唯一の絆。

枢木スザクが恐れるもの？

ルルーシュを失うこと。もしくは、ルルーシュにもう一度裏切られること。

確かに怖い。けれど、そんなことあるわけない。ルルーシュは精

霊を扱える。ガウエインだってある。この世界はルルーシュにとつて万全で安全な準備がある。

ルルーシュが裏切るわけではない。何せ、ここには僕たちの縁はない。反逆する理由も裏切る理由もない。こんな可能性のない考えはすぐさま棄却すべきだ。

『キューイ!』

ウエリリウの鳴き声で思考の渦から解放される。モヤモヤとした嫌な感情だけが胸の内に蔓延り、汗もうつすらかいている。

周りは広野だった。もともと緑が豊富なアルビオンで突然広野が出現している。レコンキスタの駐屯場所にでもなっていたのか、キヤンプ跡も残されている。

「・・・・・・・・あ・・・・・・・・?」

最初、それが何であるか分からなかった。

ガーゴイルがナニ力をつぶしている。直感。ルルーシュはガーゴイルに潰されていると感じた。

あるわけないと否定する。でも、気がついたときにはインテリジエンスソードである刀を抜いていた。

力一杯『灰雲』を振ると、ガーゴイルは真つ二つに切れる。

インテリジエンスソード『灰雲』。魔法を吸収するデルフリンガーと違い、魔法で出来た物体を悉く叩ききれる。魔法を弾く効果が

ある。つまり人に対しては切れ味のいい刀だが、魔法具や魔法人形にとっては必殺の一撃となる。

動かなくなったガーゴイル。無理矢理に魔法効果を弾き出した結果、物言わぬ石像になり果てたそれをウェリリウにどかしてもらった、そこには誰もいなかった。

ただ、少量の血とルルーシュの服の切れ端らしきボロ切れ。だがルルーシュはそこにはいなかった。

この日、ルルーシュは行方不明扱いとなりガウエインはようとして見つからなかった。ただガリア方面で大きな爆発がおき、宮殿の一部を大きく損壊させたことを数日後に聞く。

ガウエインに用いられていたサクラダイト金属繊維と鉱石、あと魔力石の暴発を加えると似たような損壊を与えることは可能だ。

ルルーシュはガリアに連れ去られたのか。

真相は依然わからない。

ただレコンキスタの始末を終えたアルビオンに各国の代表が集まり、戦後対策を練ると決まったのはアルビオンが勝利してから三日後だった。

情報の伝達が早すぎる。やはりレコンキスタと繋がり、もしくは末端の構成員がいた国が多いという事か。

ルルーシュの死体は確認されていない。

そして特にガリアはガウエインを持ち去ったかもしれないという疑いがある。

アルビオン会谈できな臭い何かが起こるかもしれない。

ルルーシュを見つけたすまでアルビオンを離れるわけには行かない。

スザクは固く胸に誓った。誰にも気づかれないほどに顔をしかめ、必ずルルーシュを見つけたすと。

それはアルピオンの関で（後書き）

ルルーシュ行方不明に。

ここが物語の分岐点となります。

それは美しい少女で（前書き）

ルルーシュの行き着いた先。

修正 ティファ ↓ テファ

それは美しい少女で

ルルーシュは潰された左手の感覚を噛みしめながら未だに生きていた。目の前には緑の少女。金の髪と穏和そうな、緩やかな目を持つ少女だった。ただ耳が人間よりも長く、困惑したようにこちらを見ている。

「あの、大丈夫・・・・・・・・・・？」

心配そうに、何かに怯えるように、少女はルルーシュに話しかけた。

ルルーシュは痛みで混乱していた。状況はいまいち掴めず、ただ自分が助かったという事だけはわかった。どこか開拓された小さな村。目の前の彼女はなにか、神聖な物を感じさせる美しさだった。

ルルーシュは包帯を巻かれてベットに寝かされていた。

「ここは・・・・・・・・・・？」

「あ、えと、ここはウエストウッド村って言って、アルビオンの・・・・・・・・」

うまく説明できないのか、少女はあたふたと答えた。

アルビオン？ とルルーシュは首をひねる。

「その、アルビオンというのはどこなんだ？」

「空中に浮かんでいる国なんだけど」

「……………嘘だろう？」

「ほんとなの」

ルルーシュは混乱した。しかし、これは一時的な混乱だったが記憶の混濁は一時的なものではなかった。

「ごめんなさい！！」

目の前の少女は俺に深く頭を下げた。どうしていいものかと迷っている、少女の向こうにはこちらを伺うといった感じの少女やなぜかこちらを睨み付ける少年がいた。

状況が状況。少女はただ謝るだけで子供たちはこちらを伺うだけ。いったい俺は何をしたのかと頭を押さえる。

ふと気づいた。『俺』とは誰だ？

動く右腕と折れた左腕。簡素なベットに横たわった体には包帯でグルグル巻きにされている。ここまでの大けがを負ってよく生きているものだと自分の体ながらに感心した。

だが、ここまでの怪我を負った経緯がわからない。

自分が何者で、何をしていて、どうしてこういう経緯になったのかも思い出せない。

完全な忘却。自分の名前すら知れない。自分に関わること全てが

白いフィルターで上書きされて消されたように、何も思い出せない。

「私、お友達が欲しくて、あなたを呼んだのだけれど、その、怪我してて、動転してて、ほんとにごめんなさい！！」

深々と少女は頭を下げる。ベットの上で少女に目を向けるも、どうして謝っているのかが分からない。

「少し、教えてくれ。俺は、どうなったのだ？ 記憶が何も、思い出せない」

「……あなたを直そうと水の結晶石を使っただけで、なぜ拒絶されるの。だから、薬草とか、調合しようと思って、そのとき姉さんの真似をして杖を振ったら、その、もしかしたら出来るかなって思ってた……」

歯切れ悪いが要約すればこうなる。

彼女、名前はティファニアという。ここはウエストウッド村で俺は瀕死の状態でティファニアに召喚された。アルビオンは数日前まで戦争していて、自分はその兵士だったのかも知れない。

身体は悲惨な状態でなんとか持ち直したのはティファニアの処置が早かったことだけだ。なぜか自分には回復の宝石が効かず、やむなく薬草を代用し口移しで飲ませていた。

そのとき急に苦しみだして胸にルーンが刻まれたという。

元からあったというルーンは薄く、心臓の位置に刻まれていた。その対の位置、胸を中心に左右対称にしてもう一つのルーンが刻

まれたという。

ルースウェル。なぜかそう読めた。反対のルーンは所々が欠け、読めなくなっている。

そしてティファニアの魔法が薬草の調合していた入れ物ではなく、急に子供に話しかけられて驚いたティファニアが俺の身体に効果がかかったと。しかも魔法は使えないから格好だけ真似してたなんて恥ずかしくなってバタバタと手を動かしていた際に忘却の呪文がかかってしまったようだ。

「そういうことか？」

「……………そうですね。すみません」

またもやティファニアは頭を下げた。

しかし、話を聞く限りはむしろ助かったというべきだろう。記憶を消される以前に死に体だったらしい。感謝すれども糾弾するのはお門違いだ。

「……………まあ、とにかく助かった。ありがとう」

「私、あなたの記憶を消しちゃったのよ？ 名前も分からない。素性すら分からない状態にしてしまったわ」

「だが、それでもだ。俺が死にかけ、ティファニアが助けたんだ。結果だけを見れば俺が記憶を奪われたことになるが、それでもティファニアは命を助けてくれた。だから、ありがとう。君のおかげで助かったよ」

確かに不安はある。だが打算なしで目の前の少女にしっかりと礼がしたかった。

召喚やらは知識としては残っている。アルビオンというのも聞いたことがあるくらいには思い出してきた。

問題は思い出やらの方だ。俺は誰で、どんな奴で、誰といて、何をしていたのか。かけらも思い出せない。

大切な何かが抜け落ちたような、不安感にも刈られるが、なぜか同時に体は安堵していた。

「……あなたは、怖い感じはしないわ。優しい、そんな感じがするの」

「ああ、そうだったらいいな」

「きつとそうよ。だって、こんなにも優しいんだもの」

ティファニアは不安そうな顔を推して、俺に話しかける。ティファニアもきつと優しいのだろう。戦後すぐというのは物資が足りない。育ち盛りの年頃で、あんなに子供を養っているのに、新たな、しかも男の食い扶持が増えるというのは好ましくはない。

しかも外を見れば森の中。森は食材の宝庫というが、戦争に敏感に察知した獣は逃げ出すしかない。森には音がなかった。

だったら、どうなるのか。はつきり言ってこのままじゃ餓死だ。

「なあ、ティファニア」

「なあに？」

「俺は、ここにいていいのか？」

万感を込めた問いかけに、ティファニアは一瞬だけ顔を陰らせる。

「……………もちろん。私が何とかするから」

頼りなさげに、ティファニアは頷いて見せた。その姿が、何かと被った。依然、そう、記憶を失う以前にも、彼女のような人間を見たことがある。

誰だったか、思い出せないが。

慈愛に満ち、人を傷つけることを良しとしない心優しい女性だった。

そんな気がするだけかも知れないが。

急激に頭にノイズが走る。頭を固いハンマーで叩きつけられたかのような痛み。後頭部から広がっていく痛みが顔にでる。

ベットに再度体を預け、しばらくすると痛みは和らいできた。ティファニアが心配そうに声をかけるが、なにしろ耳が聞こえないくらい、ガンガン音が鳴っている。耳鳴りがひどく、彼女の声を聞き取することはできなかった。

しばらくして、急激に眠気がやってきた。

「ティファニア、少し、ねむ……」

ティファニアを心配させないように、ベットに背中を預け、寝た。今はただ何も思い出たくない。ベッドの柔らかさだけが、今の俺の世界だった。

いつの間にか。

つかの間。

俺は、眠っていたようだ。

「ティファニア？」

目の前には、なぜか同じベッドでティファニアが寝ていた。金紗羅の髪に長いまつげ。女性特有の甘い香り。豊満な胸が身じろぎする度に腕にあたり、なぜかティファニアは俺の側で眠っていた。

頭痛はない。額には濡れた布切れが置かれていて、遅くまで様子を看ていてくれたのだろう。

彼女の髪を、そっと梳いてみた。

穏やかな寝顔に、ふっと頬が緩む。

夜の帳が降りていた。虫の鳴き声すらない静寂。月明かりだけが

辺りを照らし、生物などどこにもいなかった。

子供の寝息、ティファニアの寝顔。世界はそれしかなく、それで満たされていた。

「・・・・・・戦争など、本当にあつたのだろうか」

つい、好奇心が疼いた。今の俺の世界はウエストウッドの村だけだ。戦争があつたという知識はある。しかし、それはアルビオンの戦争かと聞かれれば分からないのだ。

俺の知る戦争は、紙に書かれた略歴と概要だけ。実際の戦争は『思い出』に区分される。

アルビオン戦争などという項目は知識にはあるが概要がない。つまり俺はアルビオンの戦争に関わっていたがどういう形で関わっていたのかが分からない。

敵国の捕虜だったり。武器を売る商人だったり。謀反を起こした逆賊かも知れない。

今分かることはむやみにアルビオン王国に近づかないことだけだ。何せ、関与しているのがアルビオン王国ではなく敵国だった場合、問答無用で捕らえられて尋問、死刑だからな。

いやな考えしか頭を巡らない。気分転換でもしようか。

ティファニアを起こさないようにそっとベッドからでる。外気に触れた体は寒さを訴えたが、今の俺には心地いい冷たさだ。頭を冷やしたいからな。

ドアに手をかけ、ティファニアを振り返る。ベッドに寄りかかるように眠っていた彼女の肌は、少し冷たかった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ティファニアを持ち上げ、ベッドに横にさせる。貧弱なこの体では無理かと思っていたが、以外にも簡単に持ち上げることが出来た。少女に似つかわしくない胸だが、それ以外は少女に似つかわしいのだろう。

ベッドに運び、シーツを掛ける。そのような上質なものではないだろうが、ティファニアは暖かそうにくるまった。

「おやすみ、ティファニア・・・・・・・・」

キィっと、ドアが音を立てた。いったん子供たちの様子を見て、外にでる。

開けた場所に一人、月明かりだけが俺を照らしていた。

「・・・・・・・・ふう。さすがに、息が詰まる」

女の子。それも、命の恩人。邪な気分を抱く気はないが、俺だつて男だ。絶対はない。

子供とティファニアしかない世界。ウエストウッドは、外界とまた違った様相の世界だった。

この世界は、ティファニアの慈愛に満ちている。子供も笑うし、

ティファニアも笑う。戦争の爪痕が残る時に、たったそれだけのこととがどれほど難しいのかは、何となくは分かっている。

「何とかしなければ。せめて、自給自足くらいは……………」

といつても、俺に何が出来たのだろう。記憶が曖昧すぎて分からない。何か出来たような気もすれば、後悔ばかりしていたような気もする。

食料の確保は絶対だ。何か食べれる物を探さなくては、このまま餓死になる。

「戦争後か。物価は高いだろうな。ここに金はないだろうし。しかし、盗賊に身を賣すこともできない」

そんなことは、ティファニアを悲しませる。

「どうしたものか」

頭を悩ませていると、玄関のドアが開いた。キョロキョロと辺りを見回し、俺の姿を見つけては安堵したかのように近づいてくる。子犬を思わせるような動きだった。

「あの、どうかしたの？」

みれば、眠そうに目をこするティファニアがそこにいた。

「悪い。起こしてしまったか」

「いいえ、今起きたの……………」

尻すばみに声が小さくなる。

「あなたは怪我を早く直さなくちゃ」

「いや、しかし」

「ダメなの。ほら、風邪引いちゃうわ。中に入りましょう。ね？」

「……………ああ。分かった」

ティファニアは相当頑固なようだ。まあ、悪いことでもない。自分の意見をしっかりと伝えることは好印象か。

「なあ、ティファニア」

「テファ。テファでいいよ」

「……………テファ？」

「よろしい」

花咲く笑顔でそういわれては、今後もこの呼び名が定着してしまうのか。しかし、自分には名乗れる名前などない。文字通りの意味で無くしてしまっているのだ。

「ねえ、あなたの名前、みんなで考えましょう」

「急だな」

「だって、いつまでも『あなた』とか、呼びづらいわ。あなたも何か定着する名前がないと」

確かに。今も子供には『おまえ』。テファには『あなた』でしか呼ばれていない。不便だな。これでは。大きな瞳が俺の目を捕らえる。月明かりの中、わずかな光がティファを覆い、まるでおとぎ話の妖精のように見えた。

「わ、わかった」

「うん、素直ね。よしよし」

なにぶん、なぜか子供扱いされるのは何故だろうか。俺は目測でも成人した大人なのだが。

「ん」。あなたは確かに見た目は大人らしいけれど」

疑問を口にしたとたん、テファは考え込む。

「見てるとね、ほっとけないとか、危なっかしくて。今にも消えてしまいそうだから」

そうなのだろうか。真剣なテファの顔を見ながら思う。

「子供ってね、純粹なの。でもね、傷つきやすいし泣きやすいの。大人になって、いろんな物を目にして、成長する子も確かにいるわ」

でもね。と悲しそうにテファは言う。

「あなたはいつまでも泣いている子供みたい。それも、甘えること

も知らない、誰も信じていない目をした、そんな子供。私ね、結構
そういうの敏感なの。ここにいる子供たちは、最初そんな目をして
たから」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「甘える相手がないのは、悲しいことよ」

そういうと、テファは手招きし、俺はティファの家に戻る。甘え
られる相手が。考えたことがあつただろうか。

「ねえ、ちよつといい？」

「何だ？」

「やっぱり少し、起きるには早かったみたい」

「だろうな。月はまだ高い」

「だからね、もう一度寝なおしましょう」

「・・・・・・・・テファはベッドを使うのだろう？ 俺は、床にでも」

「ダメ。左腕、まだ直ってないんだから。大丈夫。ベッドは少し大
きいから、二人入ってもくつつけば寝られるよ」

「・・・・・・・・俺は男だぞ？」

「・・・・・・・・？ それがどうかしたの？」

「……………だから、俺は男で、テファは女性だ。床を共にするというのは問題があるのではないか」

「……………？ そうなの？」

まるでわかっていない様子。先ほどまでの包容力のある女性像は簡単に崩れてしまった。

「そうだ。だから俺は床で」

「ダメ」

結局、俺が折れるまでテファとの言い合いは続いた。頑固すぎるのも限度がある。そして世間と異性を知らなすぎる。

ウエストウッドは森に囲まれた土地で、子供しかいないので異性間のトラブルなど少なかったのだろう。そして貴族や傭兵、盗賊が来てもテファの忘却呪文で問答無用で返していたらしい。

結果、情報がここにはない。戦争についても姉に聞いたの一点張り、姉は今出かけていてしばらく帰ってこないそうだ。

いろんな意味で大丈夫だろうか。

それは美しい少女で（後書き）

ルルーシュは召喚されたのだ。

それは王女の一言で（前書き）

アンリエッタが登場。

それは王女の一言で

ウエストウッド村に来て4日経った。内3日は動けないことをいいことに子供の相手をさせられていたというか、子供、特に女の子がなぜか頻繁に話しかけてきた。

面白くないのか、男の子もたまに女の子と一緒にくる。テファは『仲良くなつて良かった』と言っているが、男の子の方からはなぜか嫉妬にも似た怨念を感じる。

俺がいつたいなにをした。

「さて、俺はなにをしようか……」

折れた腕を治すのにはまず動かさないことだとギプスを作った。それから薬草を食後に飲んだり、少しでも動けるために柔軟程度はやっているが、ものすごく体が堅い。

腕は激しい運動さえしなければ何とか動かすことはできる。激痛は走るが。

最初の食事はまだ簡素ですんでいたが、最近は通り越して質素になってきている。言わずもがな、食料が足りないのだ。

戦後の復興対策なら他国からの援助を受けるか、もしくはアルビオン王族が民のために配給制度なりを作るか。そうでなければ国に搾取されてきた人民は生きてなんていけない。

森の中にはもう果実もない。少しばかり残っていたものも食べて

しまつか保存食として残している。

こうなれば街に出るしかない。このままでは本気で餓死だ。子供も少なからず感じているのか、食事に関しての文句は言わない。

「テファ、やっぱり街で何か買おう。このままでは流石に、君の体が心配だ」

ここ数日でテファは何キロか痩せていた。ここの責任者たる自覚があるのか、一番に自分の食事を減らす。大丈夫大丈夫と気丈に振る舞っているが、逆に俺と子供たちは心配してしまう。

「大丈夫よ、ヴィオ。私なら、心配いらないわ」

俺はヴィオと呼ばれている。紫色に近い黒髪、それをティファが綺麗だと誉めてくれた。ヴィオレ『紫』からとってヴィオ。

トリスティンから来たことを話すと、じゃあヴィオレねといってそうなった。

どう見ても大丈夫そうに見えないテファ。

仕方ないため息をつく。

「ダメだ。テファ、このままでは体を壊すぞ。残念ながら子供達と俺は街で食材を買うことに賛成だ」

「で、でも……」

「今使わないでいつ使う？ テファが倒れてからでは遅いんだ」

今でもたまに立ちくらみが襲う身の上でなにを言っているのか。

姉と呼ばれる人からの仕送りは物価が高くなったとしても食材程度なら十分に買えるだけのお金がある。よほど大切にされているのだろう。平民の基本給を軽く越えている。

だからこそテファはあまり使いたがらないらしい。姉がどんな仕事でなにをしているのか。この仕送りを見て怖くなったそうだ。いつか姉が帰ってきたとき、ここで暮らせる程度には蓄えを残しておく。

姉がなにをしようとも姉だ。これがテファの決断。笑って迎えられるように、心配させないように。もしかしたら危険なことをしているのかもしれないし、貴族相手にお金を取るような商売に身を落としているのかもしれない。

でも、これはテファたちの為にやっていること。だから姉の思いを否定したくない。でもお金は使いたくない。

「な？ 分かってくれ」

「……私、聞き分けのない子供みたいな扱いされてないかしら？」

「事実、そうだろう」

頬を膨らませて抗議してくる。まあ、それだけ余力があるなら大丈夫だろう。

「俺と子供を一人。それで行ってくる。食材の目利きができそうな子はいるか？」

「・・・・・・私が行くよ？」

「だから、そういうのは顔をよくしてから言え」

しばらく考えた後、テファは一人の女の子の名前を口にした。

「ミルドは目利きが得意よ。あと、料理もできるからたまに手伝ってもらっているわ」

ミルド。確か、控えめな感じの女の子だ。いつも走り回る元気な子供達の中で唯一家庭的、牧歌的で、落ち着きを持っている。俺とも何度か言葉を交わしている。

焦っていたのか言葉にできていなかったので話とは言いがたかったが。

「ミルドか。分かった。俺はお金の使い方すら知らないからな。では、行ってくる」

「あ、あの、気をつけてね。一応ミルドも何度か街に行ってるから知ってる。怪我とかしないでね」

「気をつけよう。ではな」

「ええ、行つてらっしゃい」

ミルドを伴ってウエストウッドを出る。ここからならサウスゴー

タが近い。

だが、アルビオン内は無理だ。なら、他国の力を借りればいい。港町、ロサイスを直指そう。そこなら、おそらくトリスティンやガリアの行商人が主に食べ物売ってくれるだろう。

足下を見られなければ値切ることも可能だ。

くいくいと服の端を引っ張られる。ミルドは寝ぼけ眼と言ってもいいほど眠そうな目をしているがこれが平常時だ。無表情だが頬は朱に染まっている。

子供特有の新陳代謝だな。それとも村の外に出るのに興奮しているのかもしれない。

「どこに行くの？」

「そうだな。ロサイスだ。港町なら他国の食料を安く買えるかもしれない。少し遠くなるが、ロンディウムからロサイスに向かう馬車もあるかもしれない。運が良ければ便乗させてもらうさ」

「……………うん。分かった」

どうやら利になっていると判断されたようだ。

ロサイスか。無事につければ言うことはないな。

「スザク、ちょっとすまない」

「どうかしたのか、ウェールズ」

「いや、ランスロットを出してほしいんだ。今のアルビオンは他国からは来れるがアルビオンからは出られない。難民を恐れてね、他国が入国を禁止しているんだが」

ウェールズは手紙をすつと取り出した。見れば王室の花印が押されている。よほど大切な相手への手紙と言うことか。

「これを、トリステインのアンリエッタ姫まで届けてほしい。なに、トリステインには事前に知らせてあるから心配はいらないよ。まあ、ヴァリエールの護衛という名目でトリステインに行ってもらう」

「確かに、いつまでも他国の大貴族を抱えるのは危険をはらむね」

「ああ。まあ、『他国』という部分は変わるかもしれないがね」

含みのある言葉に首を捻る。少し疲れたような顔をしたウェールズにこれ以上の心労はかけるわけには行かないか。

「今アルビオンは壊滅寸前だ。スザクがルルーシュを探したいという気持ちは分かるが、頼む」

「……………ルルーシュは結局見つからなかった。戦争とともに消えてしまったのだ。ガウェインとランスロットはアルビオンの象徴ともなっている。今では翼と城壁が守り神のようになっている。

アーサーはアルビオンに残るが、使い手がない。サイトは乗れないことにホッとしていた。人殺しの道具でしかないものに乗れた

くないという気持ちはひしひしと伝わってきたので無理強いはいしな
い。

なのでアーサーは歴史の影に埋もれている。そのような『三番目』
はいないこととなり、代わりにヴァリエールの活躍が全面に出され
ることとなる。

非公式にはアルビオンの侯爵位を秘密裏に受け取っている。これ
はアルビオンに居る間は有効に働くため、全くの無駄ではない。

「分かったよ。引き受ける。帰りにロサイスで食料でも買つてこよ
う」

「頼んだよ」

僕は格納庫で鎮座するランスロットに乗り込む。ルイズ嬢と婦人
そしてサイトとギーシュ。四人は竜籠に乗るため、空中の警備はウ
ェリリウとランスロットに一任されている。

電気と魔力のハイブリット燃料がコアルミナスを動かし、ランス
ロットのエナジーウイングを展開し、風石に炉を灯す。

「ランスロット・エクルベイジュ。発進する」

格納庫から飛び出すと、ウェリリウは気持ちよさそうに舞ってい
る。竜籠の竜はアルビオン王室のものだ。大人しく、知識が豊富だ
が韻竜ではない。戦争時には先住魔法を用いて守りに回っていた。

ランスロットにも警戒はしていない。国王になんとも説得されて
いるようだ。

エナジーウイングの風は起こらないので竜達の皮膜に余計な風を送らない。

「不思議なものね……………」

風に乗って聞こえた音を拾うと、烈風殿はこちらをじっくりと観察している。しかし、こちらの声を拡散させるまでもなかった。

慎重だがゆつくりとトリステインに向かっている。

アルビオンの地表が突然なくなり、眼下はガリアの領土だった。ちょうど爆発の大きかったリユティス付近。そこから竜の進度に合わせ、まずはトリスタニアの王城に元に向かう。そこからルイズ嬢は魔法学院に。

烈風殿……………あまりトリスタニアでは言うなと言うことからカリーヌ殿は長女の様子を見てから帰るためにトリスタニアで降りるという。

とりあえず向かう先はトリスタニアの王城。悪いが全員ご同行願いたい。

「なあ、スザク」

突然、サイトが話しかけてくる。連絡用のトランシーバーからだ。風に紛れてあまり多くは聞き取れない。改良が必要だな。

「何かな？」

「ルルーシュは、見つかったのか？」

ルルーシュの扱いは賛否両論ある。突然降ってきた天才で、アルビオン王国の恩人。しかし、名声と共に良くない噂も流れるものだ。

曰く、ルルーシュはこの戦争を知りすぎているのでは？

何万もの敵を打ち倒したガウエインとランスロット。それだけの技術が今まで聞いたこともない。それを、実質一人で作り上げていたルルーシュに疑惑が向けられている。

それに、最悪なことに弊害が起きた。僕とサイト、ルルーシュの連携だ。

個人通信機器としてトランシーバーに似たものを内蔵した結果、離れた場所でも通信が可能となった。戦時中、大抵の指示は拡張音声を使って戦場に声を轟かせていたが、ナイトメアだけには作戦もあるため采配をルルーシュが直接指示を行っていた。

その指示が的確すぎたのだ。

そこでルルーシュは、実際にはレコンキスタとの繋がりを疑われている。だがウェールズが何とか騒ぎを抑えているため、それほどではなかったがルルーシュが帰ってこないと見るや否や噂は加速度的に広まっている。

「いや、まだだ」

国民も、そして僕たちも混乱している。噂はもともとアルビオンの極一部の人が流しているだけだ。

「そうか・・・・・・・・。あり得ないよな、そんなこと」

「ああ、絶対に・・・・・・・・。」

・・・・・・・・、無いとは、いえなかった。

実質、戦争の終了と共に戦犯であるクロムウェル、そして黒髪の女が消えている。レコンキスタの大本が見つかっていないのだ。それをルルーシュは追っていた。

最悪、万が一。ルルーシュが独断専行に走ってギアスをかけて手駒としたかもしれない。その二人はアルビオンの怨敵だし、連れ帰ることもできない。

確かに元の世界に帰るためには情報が必要だ。一組織が国とまでやり合えたことから、どちらかに人材を確保する術があったのかもしれない。特に黒髪の女、そいつが怪しい。

ルルーシュは知謀に長けているが保険を作る。確かに一人の力では限界があるし、僕とルルーシュだけでは大々的な活動はできない。

ならば諜報員を作り情報を集めるといふのは賛成だが、それを戦犯で補うというのはあり得ない。

有り得ないのだが、ルルーシュなら、やりかねない。利用できるものは何でも利用するはず。しかも始末しやすい相手ならなおさら。

だが、ギアスにも穴がある。これほど大規模な戦争で罪もない人々を殺した奴を、僕は信用できない。

なぜだ。どうして出てきてくれない、ルルーシュ。

僕は君を信じたのに。

今の僕は、君を信頼できない。

「スザク、そろそろトリスタニアだぞ」

「・・・・・・・・わかった」

ランスロットはトリスタニアに向かい、滑空する。王城に無事に到着し、竜とランスロットは地面に降り立つ。

「・・・・・・・・貴方様がアルビオンの翼でいらっしゃいますかな？」

王城の入り口から、皮と骨だけで筋肉が少ない人物が現れた。目の下には隈ができ、手は微かにふるえている。明らかに過剰労働をさせられている。

「マザリーニ枢機卿」

「ヴァリエール公爵夫人・・・・・・・・。何でもアルビオンに助成されたとか」

「助成・・・・・・・・、まあ、端から見るとそうですね。ですが、私は娘とグラモン家のご子息を迎えに行っただけですわ」

なにやらマザリーニ枢機卿は百面相し、顔色をさらに悪くして頭を下げた。

「……………姫様が大変失礼なことを……………」

無言の肯定。兵士の耳があるせいか、はつきりとしたことは告げなかった。ルイズ嬢もギーシュも何のことかわからないように首を傾げるだけ。数分、沈黙が続く。

するとルイズ嬢がじつとこちらを見てきた。

「……………、ねえ、サイト。あのゴーレムには私の元使い魔がいるのよね?」

「ん? ……………まあ、そうだな」

「私には見えない、聞こえないように強制のスペルをかけられているのよね?」

「そうらしいな」

穴が開くようにこちらを見ている。見えないはずなのだが、どうしたのだろうか。

「それって、茶髪で精悍そうな青年なの?」

「……………なに? もしかして、ギアスが解けかかっている?」

「僕のことが見えるのか?」

「ルイズ、見えてんのか?」

サイトと同じような声が出てしまう。バカな。ギアスが解けるはずはない。ルルーシュのギアスは、ギアスキャンセラーで無効果されない限りは絶対に解けないはず。

「見えている訳じゃないわ。ぼんやり、そう、何かいることはわかるの。でもノイズが走ったみたいにぶれて分からない、男か女かも分からない。正直見ていて気分が悪いわ」

「おいおい」

しかし、これは困った。ルルーシュが見つかっていない今、どういう理由かギアスが解けかかっている。やはり矛盾した情報のせいでルイズ嬢の中でなにかしら起きているのか。

周りは僕の情報を与えるがルイズ嬢には見えない。この異常事態でギアスに摩擦が起きているのか。精神に作用するところが大きいギアスは曖昧なところが多い。

僕たちの情報を認識不可能にするという命令と、周りから与えられる情報が倒錯している。精神に与える過負荷によってギアスになにかしらの影響がでているのか。

（正直、僕はもうアルビオンでいろいろやってしまった身だ。今更トリステインで、ルイズ嬢の元に帰るなど言い出されたら本当にルルーシュの居場所を探せなくなる）

こうなれば、早く終わらせて帰るより他はない。

「マザリーニ枢機卿、ですか？」

「君は？」

「はっ！ 私はアルビオンとレコンキスタの戦争にて、アルビオンの翼を任せられました枢木スザクと申します。ウエールズ殿下より、トリステインの姫君、アンリエツタ様に手紙をお持ちいたしました」

「……ほう、ウエールズ殿下が直々に。それもヴァリエール公爵夫人ではなく、君にか。ずいぶん信頼されているようだ」

この人は平民と貴族の差別の激しいトリステインでは珍しい。しっかりと対処してくれるか。

「ふむ、すまないがヴァリエール公爵夫人。彼を伴って姫様に謁見をしてまいります」

「ええ。ルイズ、あなたも行っただけじゃない」

「はい、お母様」

こうして城門から入り、サイト、ギーシュ、ルイズ嬢、そして僕は通される。城は堅牢な外見と違ってかわって警備兵が少なく、貴族がそこらでお互いの功績を自慢していた。

ここは本当に城なのか不安になってくる。

聞こえてくるのは誰がオーク鬼を何体殺したかの、竜をしとめたのだ。アルビオンの話は知らされていないのか、いっさい話題にもあがらない。

アルビオンが落ちれば真っ先にねらわれるであろうトリステイン。

このままで大丈夫なのか疑問しかない。

「姫様、よろしいですか」

「はい、どうぞ」

通されたのは大きな謁見場。赤い布地のカーペットらしきものが玉座まで延び、そこにはルイズ嬢とさほど年齢のかわらない王女が鎮座していた。

柔らかい表情で僕たちを迎え入れた姫殿下は玉座を立ち上がると、ルイズ嬢めがけて走ってきた。いきなりの光景に言葉をなくしていると、マザリーニ枢機卿が頭を抑えている。苦労している原因は、この奔放な王女様にあるのか。

「ルイズ、よく帰ってきてくれました。私は貴方を信じていましたよ」

「姫様……」

ジーンとした様子で涙をこらえる二人。完全に男性陣はほったらかしである。サイトは呆然、ギーシュは次は自分かなと身構えている。

僕は一王女が他国の使いを前にして私情に走る姿に若干頭痛を覚えていた。

ひとしきり抱擁が終わるとギーシュに一言二言謝辞を述べる。ギーシュは顔で笑っていたが心は泣いているだろう。

そしてサイトに目を向け、僕と目を合わせた。

「お初にお目にかかりますアンリエッタ姫殿下。私はウェールズ殿下より使いとして参らせていただきました。枢木スザクです。以後お見知り置きを」

本当はすぐさま立ち去りたいがそうもいつてられない。目の前にいる少女は明らかに他国の王。アルビオンを代表してきている僕は相応の礼儀を尽くさなければいけない。

「これはウェールズ殿下よりアンリエッタ姫殿下にお渡しするものと」

「よしなに。ありがとうございます」

恭しく手紙を受け取り、じっくり三回ほど読む。誰も言葉を発さないなか、アンリエッタ姫殿下は涙を一筋流した。

「……ウェールズ様は、生きていらっしゃいますのね？」

「はい。」「健在でございます」

「……そう、ですか」

手紙を胸に抱き、僕の方を見る。

「ウェールズ様が生きていて、それを貴方が持ってきた。つまりはよほど信頼された臣下ではありませんか？」

「いえ、臣下ではありません」

「・・・・・・・・えと、では何故貴方に？」

「僕とウェールズは友達です。友人の頼みを聞くのは、友人として当然です」

僕の発言で姫殿下は呆気にとられていた。だが周りは杖を抜くものの、剣に手をかけるもの、姫に駆け寄るものと様々。やはり他国とはいえ、王を呼び捨てにし、まして友人扱いするなど礼儀知らずなのだろうか。

「友人・・・・・・・・ですか」

「ええ。友人です。臣下ではなく、友人として彼を支えたい。僕はそう思っています」

逡巡する。確かに利用目的で近づいたのもあるが、僕たちはレコンキスタを追い払うためとはいえアルビオンに手を貸した。これからアルビオン以外で取り入るのは難しいだろう。

ならば利用する。利用した上で、アルビオンが幸せになるように戦う。僕は誰も死なせたくはない。ウェールズだって、助けたい。彼は善王となる。それを見守りたいのだ。

シャルルやシュナイゼルという穿った王の素質を見れば、善王をみたいと思っってしまったても許されないだろうか。

「・・・・・・・・そうですか。兵を下げなさい、アニエス」

「しかし、姫様・・・・・・・・」

「よいのです。下げなさい」

「・・・・・・・・御意」

納得していない風に兵に命令を下すのは女の人だった。今もこちらを睨みつけ、いつでも剣に手をかけられるように体制を維持している。・・・・・・・・隙がないな。

「兵の無礼をお詫びいたします。それから、ここまでのルイズ達の護衛、感謝します」

「はっ！ 身に余る光栄にてございます」

「ここに書いてある食料はすぐさま用意させます。確かに戦争後、物資は滞るでしょう。友好国として援助はさせていただきます。二日後、またトリスタニアにお越しく下さい」

二日。まあ、流通を考えればそれだけかかるか。

だが問題として僕はどうすればいいのだろう。

ランスロットはさすがにまずいな。アルビオンの機密になっているみたいだけど、このアカデミーとやらは問題が多い。強行に出られればさすがに他国の人間とされている僕が対処するには都合が悪い。

いや、それが狙いか？

目の前でニコニコ笑う姫殿下。だが、本当に彼女は笑顔を絶やさ

ないただの良君なのか。強かにランスロットを解析するつもりではないだろうか。

「ではそれまでの間は、貴方の身柄はこちらで預からせていただきますが、よろしいですか？」

「……この展開は、まずいな。確かに僕にはコネクションがない。魔法学院で期日まで居座ろうとも僕はそもそも部外者扱い。オスマン殿やコルベールさんにも迷惑をかける。」

これは、一刻も早く打算案を提示しないとまずい。ランスロットはオーバーテクノロジーの結晶だ。しかもルルーシュの頭脳がなければ製作すらできない。

「スザクさん、何か不都合でもございますか？ それと、あのゴーレムも持ち運ぶには難しいでしょう。アカデミーで預かってもらいますわ」

「………っ！」

まずいますまずい！ あの目は、本気だ。諜報でも放っていたか、ランスロットを確実に知っている。見ればただのゴーレムだとせせら笑うはず。だが、姫殿下はランスロットに一定の価値を見いだしている。

まさか、この姫、ただの小娘ではないのか？

「いえ、姫殿下の意向はありがたいですが、私はアルビオンの復興に行きたいと思います」

「ですがアルビオンは今ガリアを越えています。そのような長距離をまたとんぼ返りなど、使者にたいして礼儀知らずだと思われますわ。遠慮しなくても大丈夫です。ですので、心配には及びません」

「しかし、私はただの使者でございます。それも他国の。信用には時間が足りません故」

「いいえ。ウェールズ様が貴方を信頼したんだもの。私も貴方を信頼しますわ」

この姫、僕を足止めする気がありありと見て取れる。とんだ狸だ。ウェールズめ、恨むぞ。なにが可憐な少女だ。とんだ爆弾ではないか。

しかし、これ以上の問答はまずいな。最悪無礼を覚悟で無理矢理帰るか？ いや、ダメだな。他国に対して失礼な態度で望めばウェールズに対して申し訳が立たない。

「……では姫殿下。彼を我がヴァリエールで迎え入れますわ」

そのとき、本当にその提案はありがたいと思った。

「……あら、ヴァリエール公爵夫人。警備の者はどうしたのですか？」

「警備？ 残念ながら、何者かに眠らされてしまったわ」

「あら、そうですか。それは調練が足りなかったわ。以後気をつけるとしましょう」

ふふふと表面上は笑っているが、空気は一気に下がった。サイトもルイズも感じ取っているのか、顔を青くしている。唯一ギーシュは姫殿下をみながら『可憐だ』と何度も呟き喧噪など耳に入ってもいないようである。

ある意味彼が羨ましい。

「ヴァリエール公爵夫人、何故あなたが出てくるのですか？」

「姫殿下、彼とは共闘を果たした中です。確かに他国の使者とはいえ、いきなり王城で休憩などとてもとてもできるはずなどあり得ませんわ」

「確かに、言い分は分かりますが……」

「それに、我がヴァリエール家からも彼には恩を返したいと思いついて、こちらでも食料を提供したく思います。友好国のアルビオンに」

「申し出はありがたいのですが、貴方は一公爵夫人でしかありません。幼くとも私は王です。使者に対する責任を放棄して、一公爵夫人に任せたとあつてはアルビオン側も何かと不都合でしょう？ これは小さきことですが国と国とのやりとりです。出しゃばらないでいただけますか？」

「出しゃばるなどと、そんなおそれ多い」

ですが、と前置きをし、烈風殿は視線をはずす。僕の方を向き、目で何かを訴える。

「本人の意見も聞くべきではないでしょうか？」

ああ、確信した。この公爵夫人と王、何か確執がある。巻き込まれるこちらとしては厄介だが、考えてみれば名前しか知らない姫と共闘した公爵夫人では後者の方が僕としてはやりやすい。

だがアルビオン全体の意見を鑑みれば、姫殿下の意向を無視するのも忍ばれる。ああ、本当にめんどくさい。

魅惑の妖精停のみんなにも挨拶したかったのに、これは無理だな。

「……………すみませんが、姫殿下。私は公爵夫人に私的なお話がありまして、失礼ですがご厚意を無碍にする形となることをご容赦ください」

「……………そう、ですか。確かに、話が急すぎたわね。本人の意見を尊重するという形で納得しましょう」

精一杯の笑顔を浮かべるが、目だけ笑っていない。声は聞こえているが、サイトは聞こえているのかどうかも怪しい。ギーシュの無神経が今猛烈にほしい。

「……………では、二日後に。枢木スザク、さん」

……………怖いな。処刑日を伝えられた気分だ。

憂鬱な気分のまま、僕は王城を後にする。

それは王女の一言で（後書き）

押しには弱いアンリエッタ。

これからダークサイドをかけたらいいなと思います。

それは他国の厄介事で（前書き）

広がるヴァリエールとアンリエッタの不信感。

それは他国の厄介事で

「・・・・・・・・ヴァリエール公爵夫人、助かりました」

城門を出て間者の目がないであろう位置まで移動し、謝辞を述べる。

くだらない政争に巻き込まれそうになったが助け船がありがたいのは事実。

おかげで混乱なしに事態の收拾を終えることができた。

「いえ、こちらの都合もありますし、なにしろ、あなたの事情もあるでしょう?」

「仰るとおりです」

「それに、私個人の都合もあります。ですので、お互い様ということで」

全面的な信頼には至らないが、マシだと思えば気が楽か。

それに拠点制圧時にでも内装の把握は有効な手札。

いつでもトリステインと戦争になってもいいように、公爵家の内装を知っておくことも戦略幅を増やすことになる。

公爵夫人の・・・・・・・・烈風殿の恐ろしさは精神力の膨大さと馬

鹿げた魔法行使。ナイトメアフレームがなければ死ぬ。

たった二日で王都を見回れる訳もなし。ならば公爵の家とやらを見てやるう。そうすれば少なくとも、トリステインの貴族の防護レベルが判明するはず。

ランスロットにはウェリリウを配置するか。襲われたなら近くの竜を扇動して逃げればいいし。

「では、まずはルイズ嬢、ギーシュ、サイトを学園に戻しましょう。……それで公爵夫人、後ろの方は？」

「エレオノールよ。ヴァリエール家の長女。最近家に帰ってきてないから、王都に来たついでに持って帰ろうと思ってね。ほら、エレオノール、挨拶なさい」

「……お母様がいうなら、仕方ないわね。本当はイヤだけれど仕方ないわ。私はエレオノールよ。エレオノール・アルベルテ・イーヌ・ル・ブラン・ド・ラ・ブロワ・ド・ラ・ヴァリエール。ヴァリエール家の長女で、アカデミーに在籍しているわ。一応、よろしくしてあげてもいいわよ」

「枢木スザクです。よろしく」

苦笑しながら挨拶を交わす。気丈な娘……。といっても、僕より年上だろうが。変なところで子供っぽい人だ。

「……ふん。なによ、平民の分際で……。何であんな奴がアルビオンに認められているのかしら……」

ぶつぶつと自分の世界に埋没する。さすが学者ということか。見下されているが、恐らく身分に愛著する余りに理解を示さないのだろう。ルイズ嬢の偏向差別はやはり家族が原因か。

といっても公爵夫人は普通に接してくれる。

ルイズ嬢も最初に比べればサイトを人間扱い一歩手前にまでは見ている。

改善しているが、やはりトリステインに根付いた差別意識を払拭するのは難しいな。

しかし、長女か。ルイズ嬢が三女だから、次女もこんな感じなのだろうか。

二日間、ギクシャクしなければいいな。

「さて、そろそろ行きましょう」

「はい。では、先にランスロットに乗って点検してきます。竜籠飛翔後にランスロットも飛翔しますので、後ほど」

「ええ。わかりました」

最後まで懐疑的な目でエレオノールさんは僕を睨んでいた。ランスロットに主立った異常はない。主だったところに異常はないが、ガンダールヴのルーンで一応確認したが、やはり細部は魔法により干渉されていた。

ランスロットは解析されると一番まずい。単機で一騎当千ができ

る。量産されでもすれば、個々の実力が劣化しても脅威となり得るからだ。

だからウエリリウに見張りをさせていたが、遠距離から解析の呪文をかけられたのか。

だが、確かルルーシュが魔法のアクセスを誘導する魔法をランスロットにかけていたはず。

ルルーシュの言うことによれば、魔法とは精霊を使役して行うもの。その精霊を使えなければ魔法は発動できない。それを阻害、誘導することができれば、ランスロットの見取り図はわからない。

この魔法は精霊を使役する為の装置が必要なので、ガウエインにはルルーシュが、ランスロットにはウエリリウが精霊阻害として働いている。飛んできた精霊の道順を変えるだけなのでウエリリウもできる。

解析された見取り図は、正直どれかわからない。パターンとして役に立たない見取り図を10個ほど。どれかが引っかけたのだろう。

「……………早くここを出よう。これ以上はつきあいきれない」

竜籠が安定した気流に乗ると、ランスロットを起動させる。エナジーウイングを展開し、飛翔。ウエリリウもそれに追従する。

くだらない政争に利用されたくはないが、二日は帰れないとなると憂鬱だ。

せめてヴァリエール公爵がいい人であるように祈るしかないか。

「マザリー二枢機卿、どうでしたか？」

「どうとは？ 姫様、私は賢者ではありません。しっかりと申してください」

「……ウエルズ様を助けた、あのスザクという方。そして戦場で破壊の限りを尽くしたとされる白銀と黒体のゴーレム。アルビオンに今、どういう力があるのか、あなたはどう見極めますか？」

ふむ……とマザリー二は考え込む。

あの圧倒的不利な状況から追い上げ、わずかな兵で何十万というレコンキスタ兵を葬ったとされるゴーレム。今五国の間でもっとも注目を浴びているのがアルビオンのゴーレムだというのは確か。

何せ、一体あるだけで戦場がひっくり返るのだ。抑止力、戦力としては最強のもの。そして他国より領土が狭いトリステインにとつては是非とも欲しい武力だ。

腐敗貴族と戦場を知らぬ貴族が多すぎるため、いつ他国に攻めいられてもトリステインは墜ちる。過去の威光にいつまでも張り付くこの国の未来は明るいものではないだろう。

「そうですね、アルビオンは、恐らく今回の戦争で疲弊しております。ゴーレムのおかげで被害は最小限とはいえ、物資、食料などは

元々多い方ではありませんからな。それを出汁に同盟、条約を結びつけるのが従来の方法ではありますが……」

少しマザリーニは言葉を切る。

一個人としてはあまり使いたくない策故にどうしたものかと悩んだのだ。

しかし、今は枢機卿の身。個人ではなく、枢機卿の合理的な意見を提示する。

「他国はそれで満足しないでしょう。必ずゴーレムの設計者、及び使役者を出せというでしょう。もしくは設計図の提示、技術の公開などでしょうな。他国もトリステインも、今のアルビオンはいち国家と見れるとは言い難い。空を飛ぶ移動要塞であり、いつ自国を壊滅させられるかと戦々恐々でしょう」

トリステインは王弟がアルビオンの国王であることから簡単に手綱を握ることができると一部バカな貴族が思っているだろうが、恐らくアルビオン王ジェームズ一世はこたびの戦争で一線を引くだろう。であるならば次の王は聡明と名高いウエルズ殿下。トリステインとの仲をどうするのかは簡単には決められないはず。

マザリーニは時期の悪さに頭が痛かった。以前のウエルズなら、盲目なまでにアンリエッタ姫と逢瀬を重ねていた彼なら状況は好転した。

しかし、今日の出来事を見てもわかる。ウエルズ殿下は国の執政で来られぬ故に使いを出した。これが意味するのはウエルズ殿下が国を任せられるまでに昇格、つまりは国王の座についたこと。

それが、王子から国王への自覚を得たかだ。

なにせ、幼くとも彼は戦争で学んだはずだ。

民の悲鳴を。

王の責務を。

勝手な行動は、国の転覆を招くことを知ってしまった。色恋で国を犠牲にするような方ではない。となれば、アンリエッタ姫との婚約を押し進めればいいという話でもなくなる。

国王としてのウェールズ殿下と、個人としてのウェールズ殿下を、これから先に分けていくだろう。

自覚のない幼稚な女王であるアンリエッタ姫ではダメだ。

個人としては好いていても国王としての彼ならアンリエッタ姫を迎え入れたりすることは難しい。

良母であつても賢王でない。そんなアンリエッタ姫を彼は受け入れるだろうか。

「そうですか。では、アルビオンに負けぬ力を整える必要はありますか？」

「………なにを簡単にいいいますか。数万をなぎ払える力など、どう整えるのですか？」

「疑問に疑問で返すのはあまりいいとは思えませんね。私は考えたのですよ。今のままでは、私が嫁いでいき最高の形で収まったとしても、トリステインはアルビオンの属国になるしかない。戦力が違いますからね」

「確かに。姫様の言うことはもつともでしょうな」

「属国の王女が国を動かす必要はありません。アルビオン貴族からも、あまりいい目は向けられない。しかし、私は属国ではなくあくまで友好国として行きたいのですよ」

「そのためには、力が必要と？」

「左様です。しかし、簡単に手にはいるならば苦労はしません。ならば、相手の痛い腹をつけばいい」

にやりと、アンリエッタ姫は笑う。黒い笑みを浮かべながら、マザリーニは続きを促した。

「メイジでは、勝てぬ。ならば始祖の使い魔を使えばいいのではありませんか？」

一瞬、マザリーニは思考を中断した。あまりに突飛、あまりに傲慢、あまりに極端すぎる回答。

元聖職者である彼にはアンリエッタ姫の言い分は的を得ていないばかりか見当違いの結論にいきったのではないかとすら思う。

「姫殿下、どこにそのものがあるというのですか？」

「なに、本物を用いる必要などないではありませんか。虚無の担い手と、珍しい使い魔がいれば事足りませんか？」

本物を用いる必要などない。つまりは欺くためだけでいい。

戦力ではなく、宗教の象徴。

ブリミル教によって伝えられる虚無の担い手の伝承。

その象徴に手を出せば、貴族側から瓦解するかもしれない。熱心なブリミル教徒であるならば、特にロマリア辺りは許さないだろう。

ロマリアからすればいたかどうかもわからないブリミル様を奉り聖職者が貧民を苗床に成長する。その根底には信じようと信じまいと宗教の力がある。

トリステインが虚無の担い手を公開すれば、ロマリアとしては接触を図るだろう。そして内部に取り込もうとする。

その虚無の担い手、虚無の使い魔が他国によって殺されるという事態はあまり芳しくない。

ロマリアの民衆の受けはよくないだろう。民に反乱されると金が減る。肅正によって、見せしめによってロマリアの民衆の数が減れば、他国の侵略を許してしまう。

まさかとは思うが、情報操作による牽制と他国への圧力を一気にかけるつもりだろうか。

「しかしながら、姫殿下。そんな矢面に立つ人物などおらぬではあ

りませぬか。そのような国のための人柱など、体のいい生け贄と同意。だれがそのようなことを引き受けるのですか」

「あら、枢機卿、先ほどの私の友人を見ていなかったのですか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」

「ルイズの使い魔は珍しくも人間ですね。前例がない。つまりは、彼が虚無の使い魔であると否定する材料がない」

ことの真相に迫ったマザリー二は顔を青くする。

「・・・・・・・・・・公爵家の人間を、虚無の担い手に仕立てあげるとい
うのですか！？」

「ええ。今は他国も隙あらばアルビオンに攻めいりたいはず。しかしゴーレムのせいで戦後だというのに攻めいることはできない。一体がここにあるとしても、もう一体がいます。しかも、二体ではなく三体目、四体目が存在するかもしれません。そのなかでアルビオンが仕掛けるような真似をしなさい。他三国は利益のため、宗教のため、脅威を取り除くためにアルビオンに向かうかもしれません。ウェールズ様は愚王ではありません故、そのような失敗はしない」

ならば。

「今の時間でできることは、一刻も早くアルビオンに対抗する手段を得、牽制をかけることです。他国を巻き込もうが、大義名分の為に動こうが、とどのつまりは今のアルビオンは民衆にとって、貴族にとっての敵となるしかない。何せ強力な戦力が整っている。だれでも不安になりませんか？そこを突きます」

「疑心暗鬼となった国と民は御しやすい。皆が贄となり、屍の上を私が歩きましょう。どれだけ他国の人間が死のうが関係ありません。流言飛語にだまされる方が悪いのですから」

「すべては私とウェールズ様を対等にするための布石にすぎません。火をおこして燃え広がればそれだけの犠牲がでましようが、最終的にはすべて燃え尽きるでしょう。吹けば飛んでいく塵、骨の一変も残らず死すというなら、それは罪の意識になるうとも痕は残さない」

「血で汚れを濯ぎます。血で渴きを癒します。血で民を騙します。でなければ、私はウェールズ様と共に歩けない」

今マザリーニが感じているのは、単純な恐怖。

数日前までは少女であったはずのアンリエッタ姫の面影はない。

自分の為に他者が死のうが関係ない。

自らの利益を第一に考え、行動すると宣言しているのだ。

親友と語った口で親友を利用する。

なにも知らぬ民を騙し、アルビオンへの恐怖を植え付ける。

情報を流し他国の牽制と不安をあおる。それによって相互不干渉の事態を築き上げ、四国が同時にアルビオンの隙をねらうようにし向ける。

前例のない暗君だった。どこまでも他国を利用し、先見を伴って

自分にとっての最善を掴みとる。

「アニエス、他国に商人に偽装した兵を放ちなさい。噂を広め、アルビオンのゴーレムへの恐怖を与えてきなさい。ゲルマニア、ガリアは情報を隠蔽する恐れもあります。徹底的にその考えを崩し、民衆の不満のはけ口、おそれの対象としてアルビオンを陥れなさい」

「ひ、姫様！？ なぜそのようなことを！」

「トリステインの為でもあります。他国に不安を与えなければ四国の意見は食い違います。しかし、貴族は民衆の意見は聞かなくても保守には動くでしょう。貴族の総意は国の総意。疑心暗鬼となった貴族を国王が制御できると思いますか？」

「お待ちなさい姫！ あなたの考えは独善的で現実味がない！ ついてくる民のことも考えてくだされ！」

精一杯の叫びだった。アンリエッタの考えは、確かに牽制にはなるだろうが結局破綻する可能性が高い。それに、公爵の三女を生け贄とし、虚無の担い手と仕立てたとしても証明する手だてがない。

王女の話は、すべてがうまく転がった場合の結果、そうなるであらうという空想に近い。

他国がアルビオンに同盟を持ちかければ終わり。

賭になんてならない。むしろ、そんなことが成し遂げられるはずもない。

「マザリーニ枢機卿、国とは何ですか？」

「もちろん、民と統治者の相互関係によって成り立つ集合体でございます」

「いいえ。国とは王とそれにつき従う者で構成されます。王に従わない民など、国の民といえるのでしょうか？ ついてくる民は、王を選定する者ではありません。王に従うべき従者でしかありません。ならば、王はそれを使役する権利があります」

私に従わない民など、いらないのではないのでしょうか？

アンリエッタ姫はそういう残すと玉座を立つた。詳細な指示を飛ばすのだろう。執政をすべて丸投げにし、王足る威厳も迫力もない彼女が取り得る手段は限られている。

状況と手段をうまく利用し、他国を騙し、民衆を蔑ろにし。性根が心優しい彼女の中身は、今なぜか麻痺している。焦りと不安で、ありもしない妄言に騙され判断を失っているようにも見える。

だが忠告ももはや意味をなさない。今の姫は容赦もなくマザリー二の首を物理的に両断する手段すらもやりかねない。

あわただしい王城でマザリー二は絶望に身を浸す。もともと、烈風が国を離反するかもしれないという懸念が一気に現実味を増した。

また痛むであろう胃を押さえ、執務室へと向かう足取りは重く。マザリー二後ろ姿には覇気など存在しなかった。

それは他国の厄介事で（後書き）

私の中では

アンリエッタⅡ腹黒お姫様
マザリーニⅡ苦勞人

です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4201t/>

ゼロの使い魔 ギアスオブナイトメア

2011年10月15日08時50分発行